

604-184



1200501531461



貿易經濟叢書
第六十輯

大阪市産業部貿易課發行

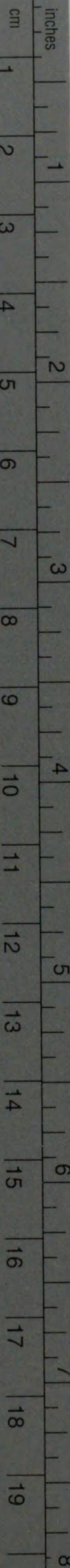
南洋

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



60
18

南洋



貿易經濟叢書
第六十輯



大阪市產業部貿易課



洋



大阪市産業貿易課



目次

南方共榮圈確立への要望……………一

南洋一覽表……………四

蘭領東印度篇……………九

比律賓篇……………三

佛領印度支那篇……………六

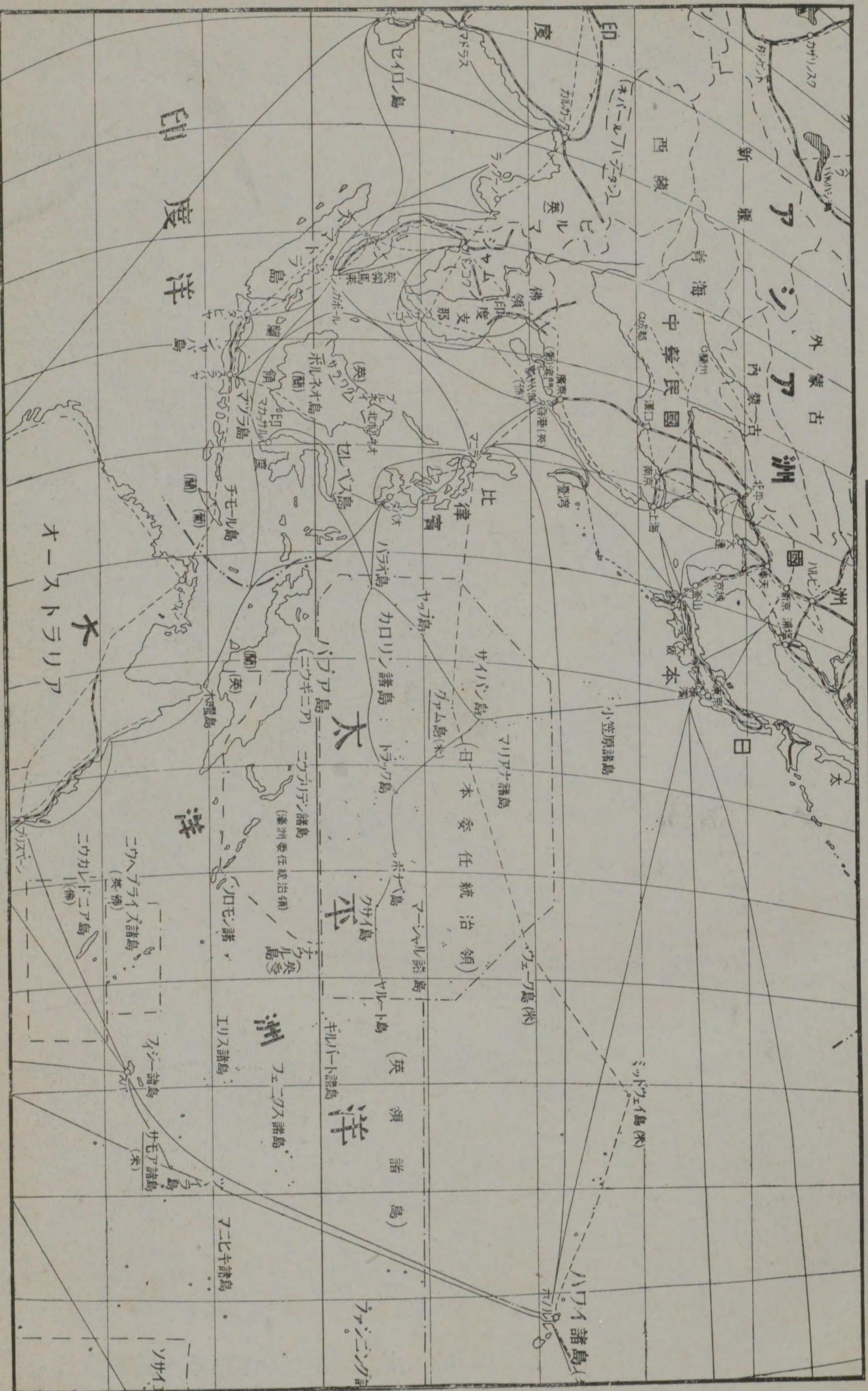
英領馬來篇……………六

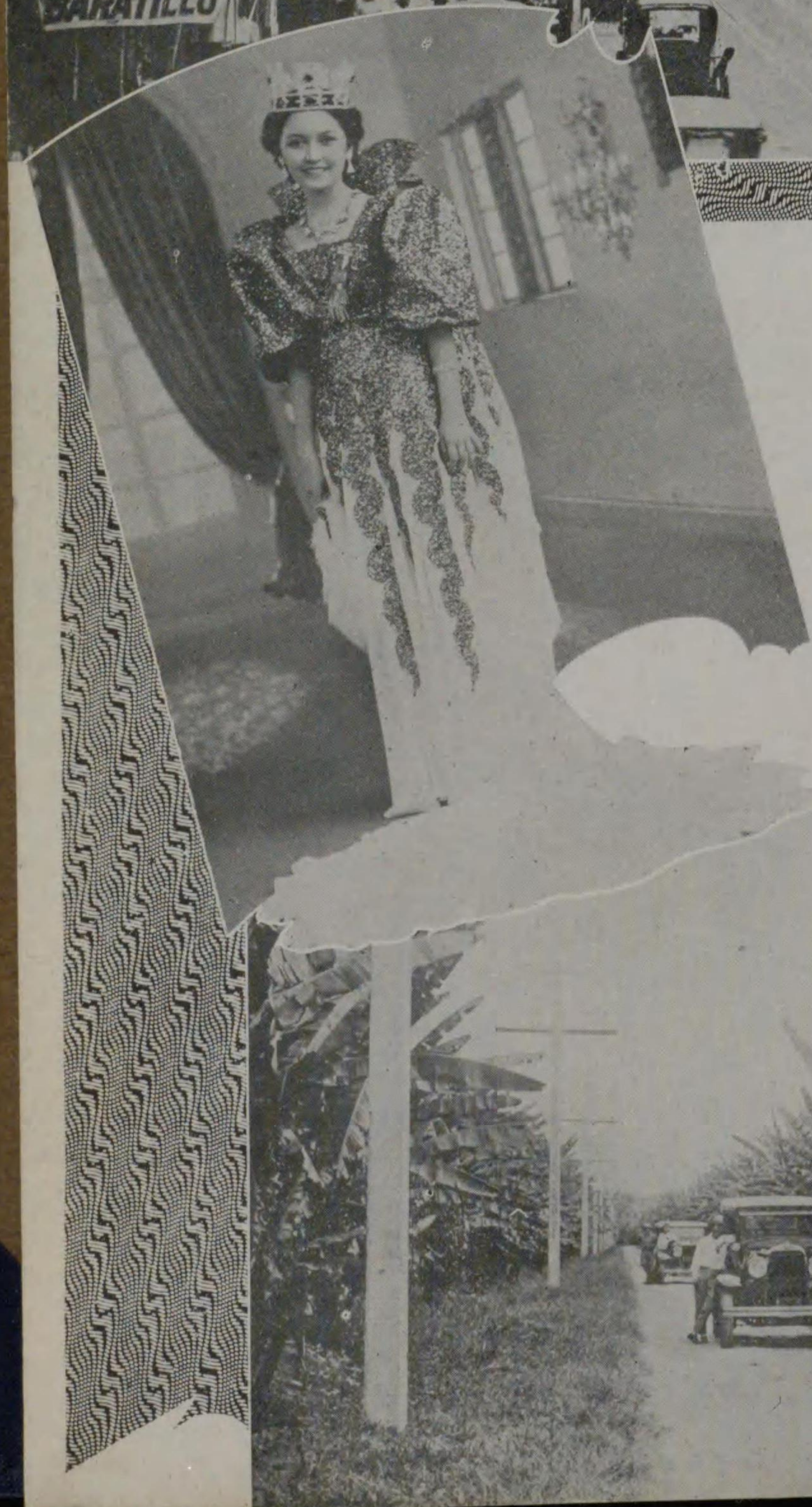
泰國篇……………八

英領ボルネオ篇……………二

附南洋委任統治領……………二七

南洋





● ● ● 比 律 賓

(上) マニラ市街

(中) ミス・ヒリツピン

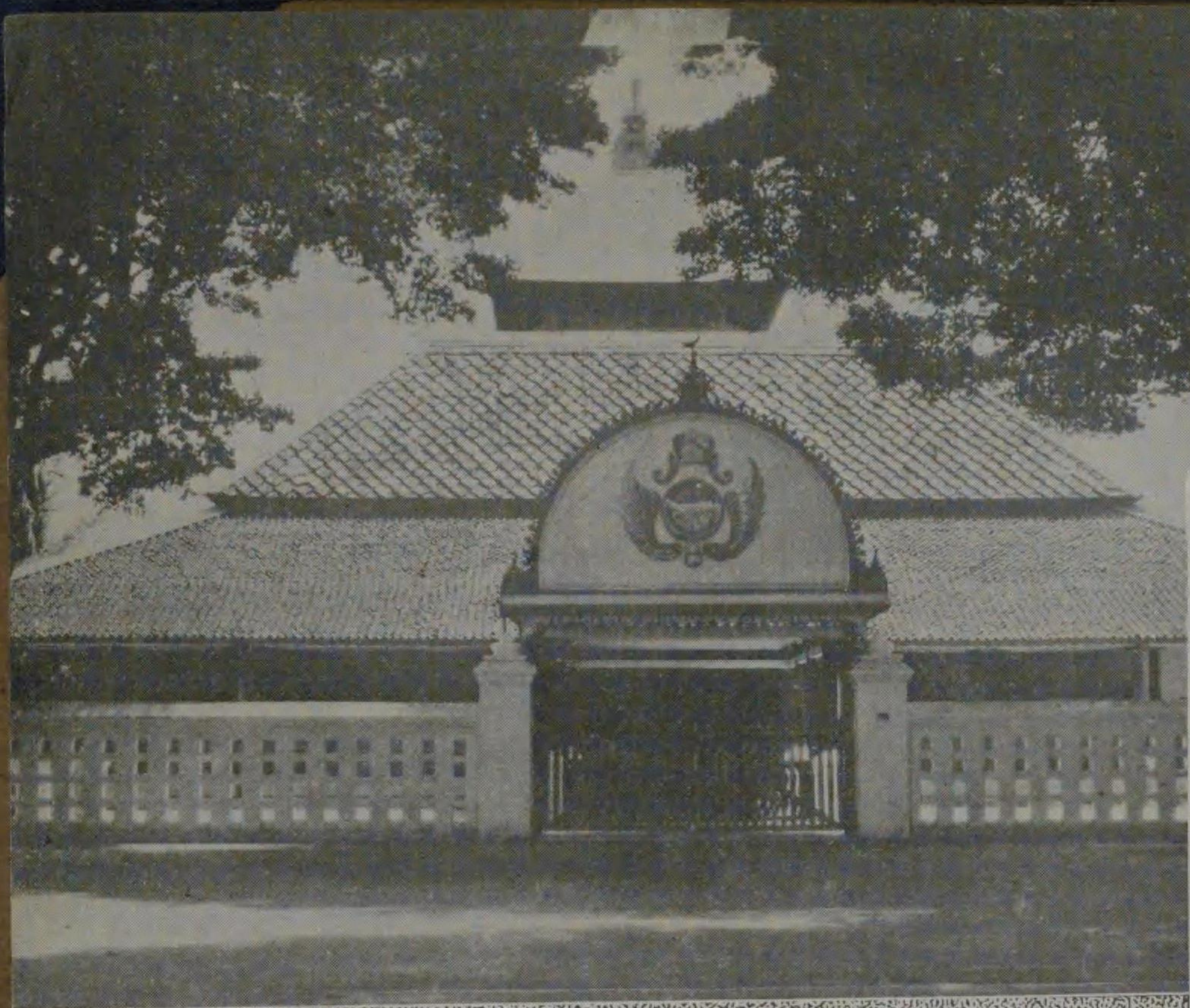
(下) ダバオの麻畑



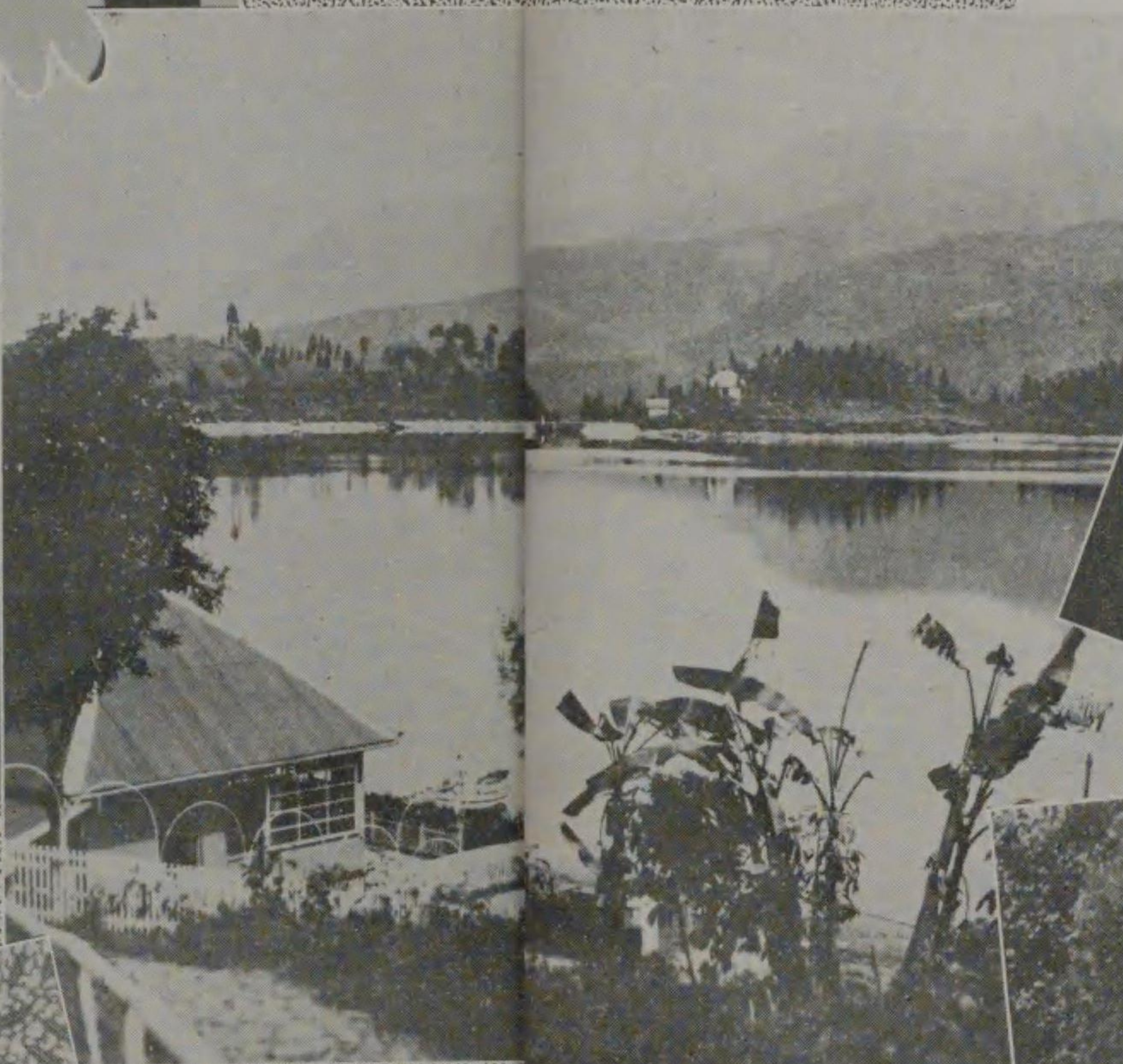
〔領治統任委洋南〕 洋南るへ翻旗章日

蘭領印度

爪哇美人



回教寺院



スラバヤ避暑地

邦人農園



サラサ織



サラサを織る



パタビヤの横顔

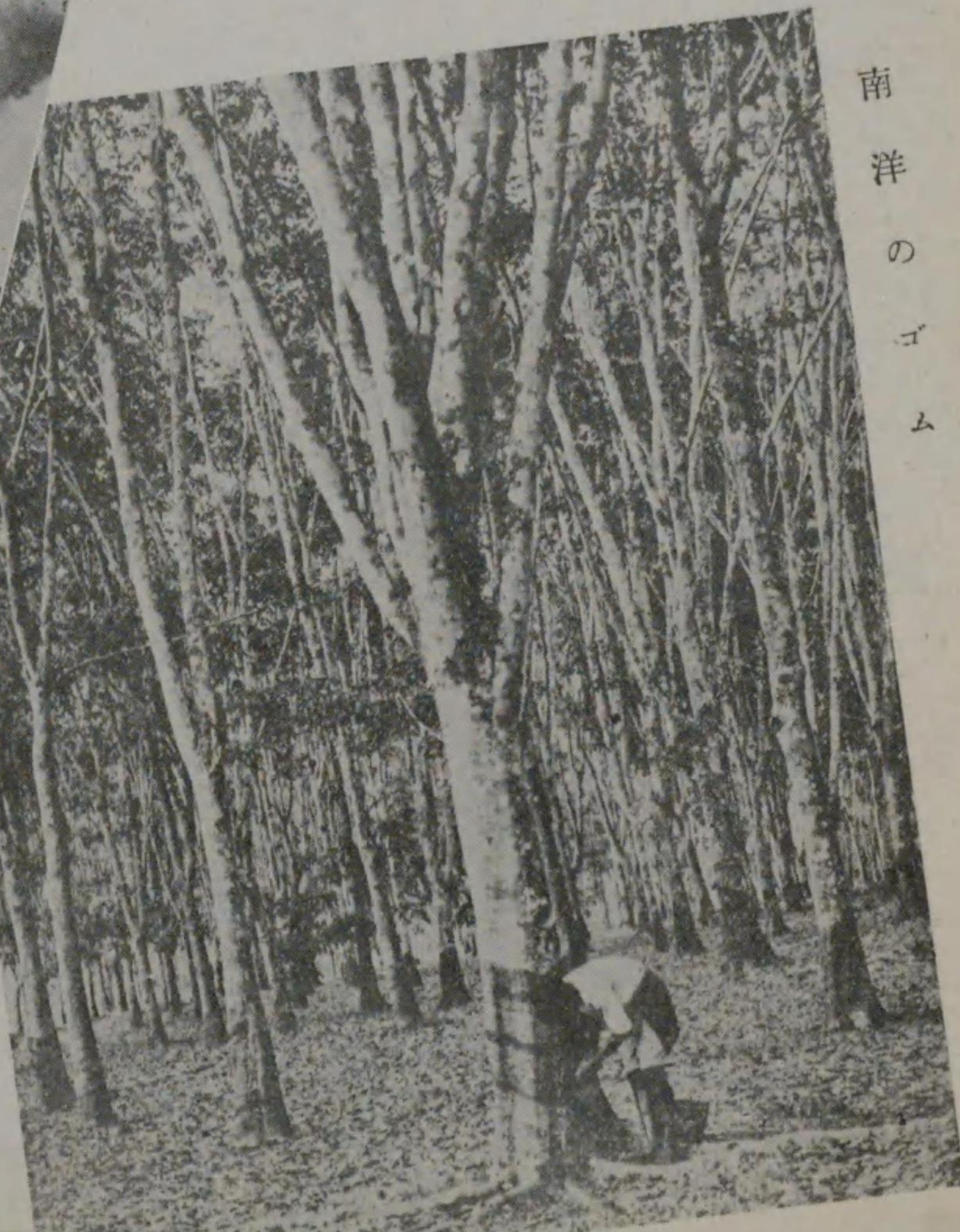


(ヤネギ・一ユニ) 林始原ぬら知を鉞斧

花棉の洋南



(く焼を林始原) 拓開



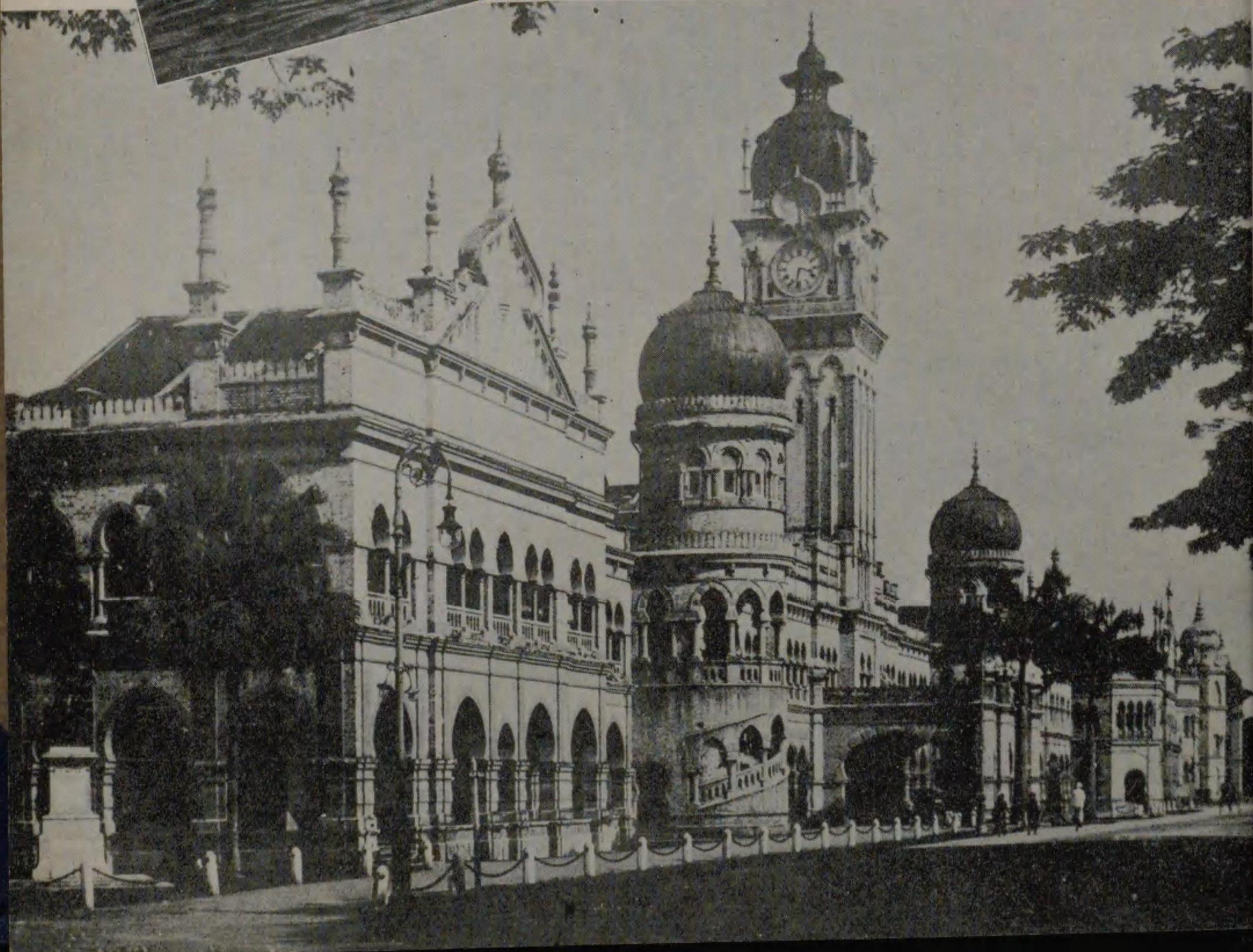
南洋のゴム

英領馬來

新嘉坡



馬來聯邦州政廳 的宮王ヤヂボンカ

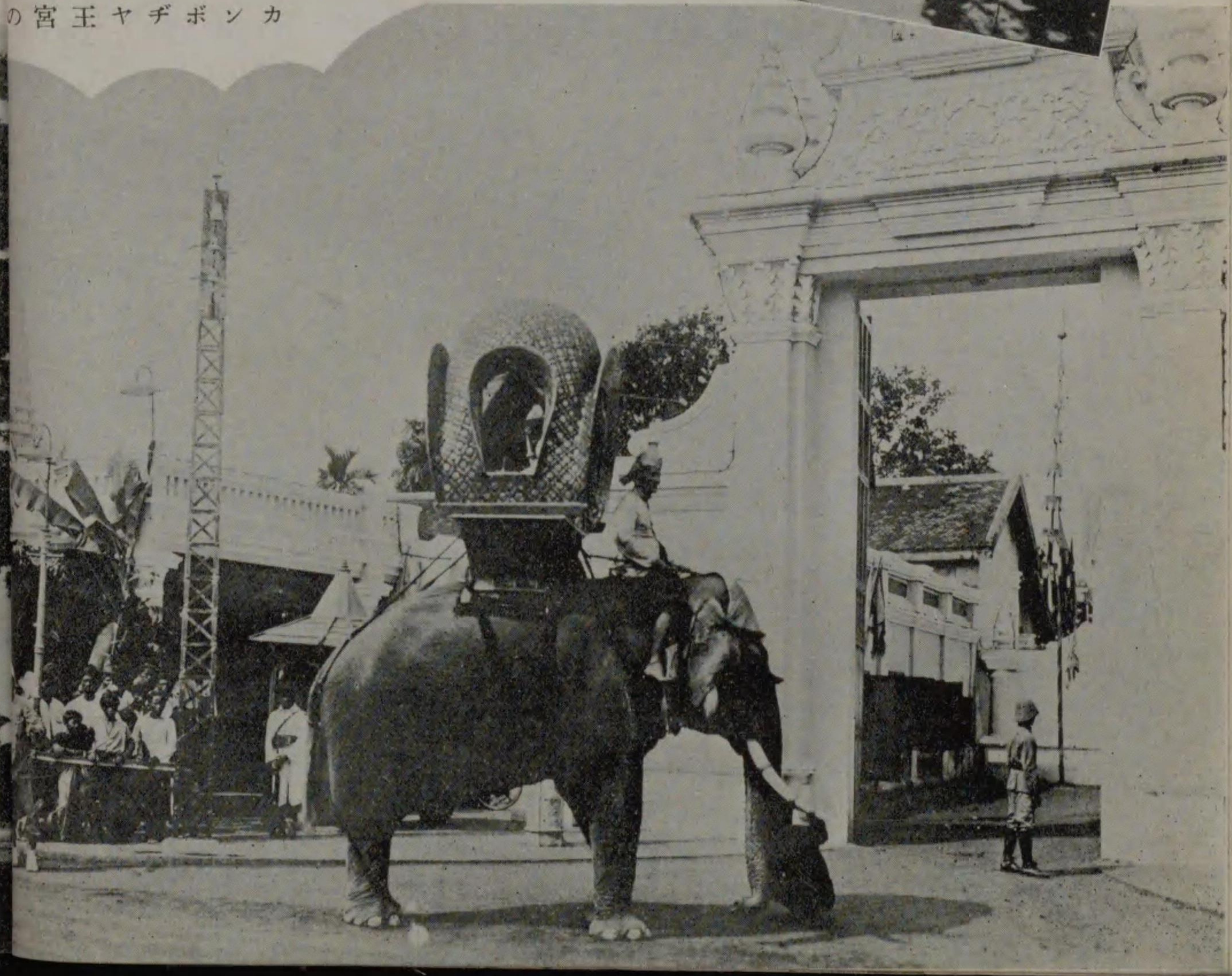


佛領印度支那

カボンヤ人の上水生活



カボンヤ王宮





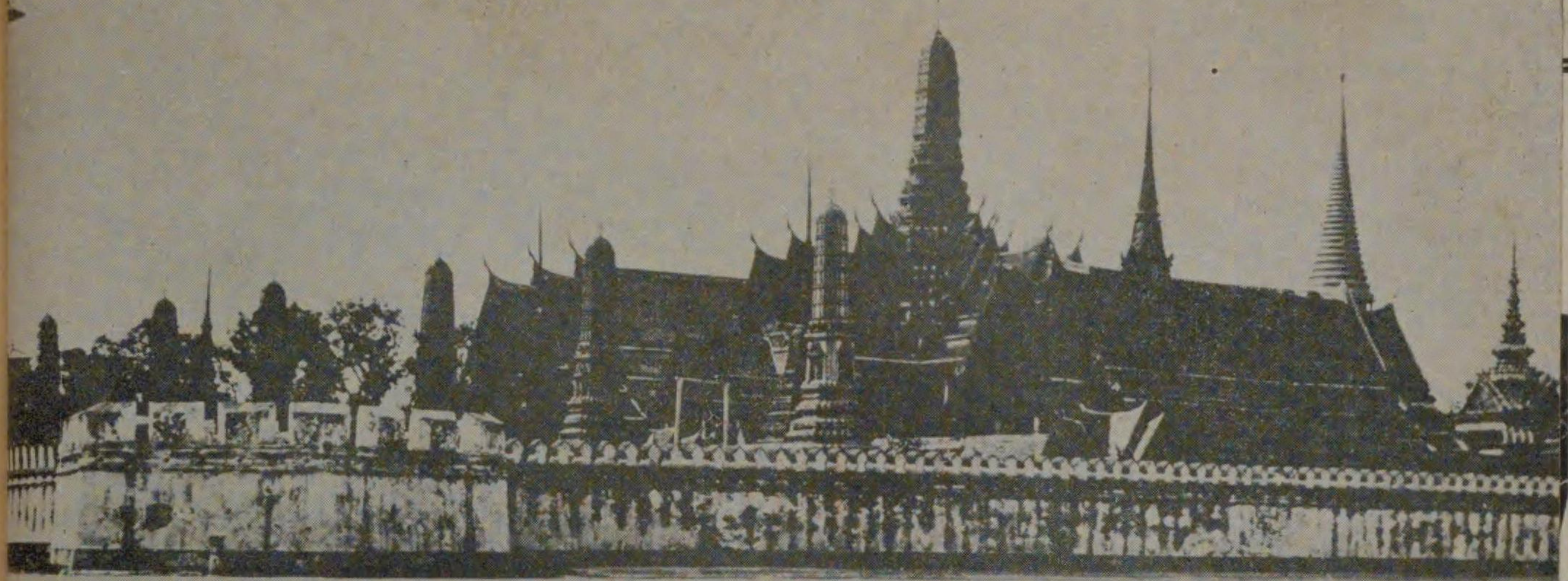
南方共榮圈確立への要望

去る九月二十七日ベルサンに於て締結された日獨伊三國條約は言ふまでもなく、東亞と歐洲に於て夫々新秩序建設の共同目的に邁進する三國が相提携協力すべきことを約束したものである。これによつて我國の今後とるべき外交國策が力強く中外に闡明され、凡ゆる障礙を排除して大東亞新秩序の建設を完遂せんとする決意が明らかにされた。

もとより右三國條約により初めて我が大東亞政策が表明されたのではない。支那事變の進展に伴ひ、日滿支のみならず南洋を含めた大東亞圈の建設へと發展すべきは地理的、經濟的にも必然の勢であつた。折柄昨年九月勃發を見た第二次歐洲大戰が南洋方面にも微妙な影響を及ぼすに至り、遂に松岡外相によつて南洋を含む東亞共榮圈の確立といふ不動の國策が表明されたことは周知の通りである。三國條約は東亞に於ける日本、歐洲に於ける獨、伊に對し、相互にその指導者的地位を認め、夫々の目的達成に協力援助を確約したものであるから、我國としてはこゝに最も強力な盟邦を得たわけである。

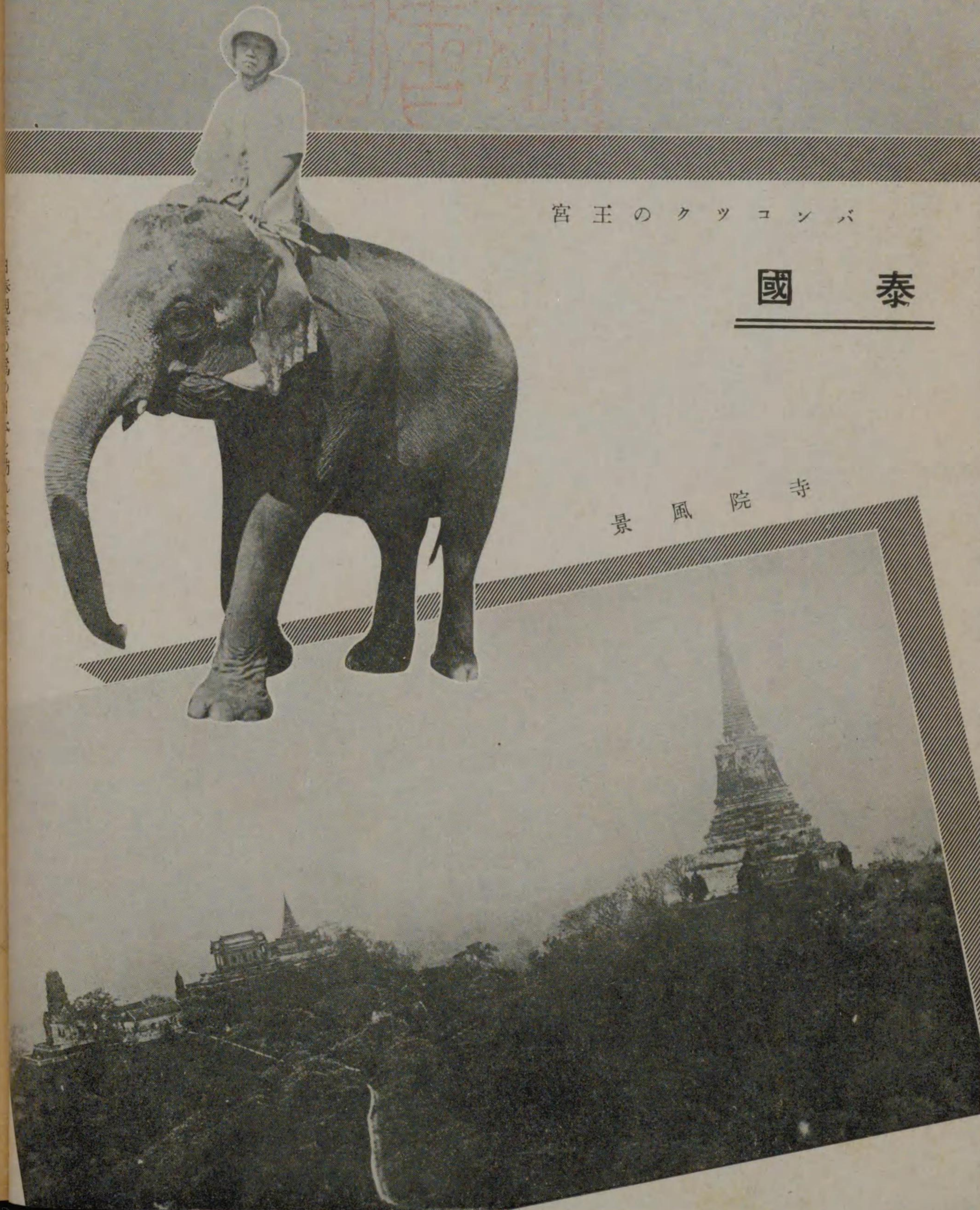
軍事的、政治的見地は論外としても、南方諸國の經濟的意義は我國にとつて實に絶對的のものである。今次歐洲大戰が如何なる結末を告げるか尙豫斷の限りではないが、フンク獨經濟相などの見解にも明らかな通り、來るべき世界經濟體制

南方共榮圈確立への要望



宮王のクツコンバ

國 泰



景 風 院 寺

が幾つかの大ブロックに分割されるであらうといふことは略々想像される。従つてこの趨勢に備へるためにも、南洋諸國を東亞共榮圈の構成要素として緊密に包含せしめることが絶対に必要であり、また之等諸國としてもそれが今後とるべき最善の方法と考へられるのである。

二

普通南洋と稱せられるのは、我が委任統治領たる内南洋を除けば、佛印、泰國、英領馬來、比律賓、蘭印、英領ボルネオ、英領ニュー・ギニア等の廣汎な地域を指すものである。これを政治的に見れば、先づ獨立國と認められるのは泰國のみで、比律賓は一九四六年を以て獨立を完成することになつてゐるが、其他は凡て歐米列強の植民地である。而も蘭印がオランダ領であるのを除けば、殆んど英米佛の勢力範圍となつてゐる。

經濟的にこれを見れば、右の傾向は更に著しい。英領各地に於けるイギリス、佛印に於けるフランス、比律賓に於けるアメリカの地位が夫々支配的であるのは言ふまでもなく、泰國、蘭印などでも英米の經濟的勢力が根強く地盤を張つてゐるのである。

南洋各國の資源、産業等に就ては別項に於て詳述することとしたが、周知の通りこの地方は大部分熱帯に屬し、各種の熱帯特有の資源に恵まれてゐるのみでなく、礦物、其他の資源も豊富である。即ちゴム、甘蔗、米、規那、椰子、麻等の農産物、石油、錫、鐵、ボーキサイト等の礦産物、チーク材其他の林産物など貴重な資源が殆んど至る所に産出される。従つて歐米列強は逸早くこの方面に觸手を伸したのである。

凡そ強大な自立的經濟圈を確立するためには熱帯資源を包括することが必要である。斯くて歐洲に於ける獨伊樞軸もアフリカをその經濟圈内に包擁すべく意圖してゐることが諒解される。日滿支ブロックが鞏固に結成されても、經濟的に充分の自主性を獲得できるものとは期待し難いのであつて、地理的、歴史的に特殊關係にある南洋をもその大經濟圈内に包括することは正に必然と云はねばならぬ。

三

我國と南洋との交渉は歴史的に相當古いが、遺憾乍ら鎖國制度のため最も重要な時期に中絶状態となり、従つて南方發展は列國に比し立遅れを餘儀なくされた。併し乍ら開國以來の貿易は支那大陸に次いで南洋諸國を主要な相手國とし、我が對外貿易上に占める南洋の地位は極めて重要である。尤も既存歐米勢力が右の發展趨勢を抑制したのは言ふまでもなく殊に事變以後は種々の事情もあつて全く停滞状態に陥つてゐた。また貿易以外の企業、其他の經濟的進出に於ても一部先驅者的な活動を除けば、全般的には未だ大して見るべきものがない。

然らば大東亞共榮圈に南洋を包擁するため今後如何なる方策が講ぜらるべきであらうか。南洋に産出する農礦産物は我が國防國家建設上必要とされるものが多く、また我國は南洋諸民族の要求する生活必需品其他の工業製品を提供し得るのであり、正に有無相通すべき關係にある。そこでこの自然的な關係を積極的に、計畫的に増進することが根本的に必要である。特に國際情勢が前記の様な趨勢を辿り、従前の如き世界自由通商の復活を期待し難い今日、我國として重要輸入資材の供給源を南洋に確保することは絶對的に必要である。斯くて彼我の物資交流を増進するのみでなく、邦人の資本、技術を積極的に進出せしめて、資源開發に協力し得るやうに導くことが要望される。また貿易決済の如きも漸次圓貨本位に導き、歐洲に於てマルクが支配的通貨たることを意圖する如く、大東亞共榮圈に於ける圓の指導的地位を確立しなければならぬ。

勿論英米等の既存勢力がこれに對して反撥的態度に出ることは當然豫想される。然し三國條約に示された我が國策は決定的のものであり、斷乎として凡ゆる障礙を排し邁進するものと思ふ。

今次歐洲大戰の急展開を契機として既に我が南洋外交は著々進められ、曩に日泰間に友好條約締結並に定期航空の開始があり、佛印に對しては軍事協定の成立により皇軍の平和的進駐が行はれると共に松宮經濟使節が派遣され、また蘭印に對しては曩に小林商工大臣の派遣あり、佛印及び蘭印當局との折衝が引續き行はれてゐることは周知の通りである。これらの外交折衝が所期の妥結に達し、南洋を含む大東亞共榮圈の確立が速かに達成されんことを期待するのは全國民の一致せる要望であらう。

南洋一覽表

面積	在住本邦人及人口	財政	國名
一、九〇四、三三三平方尺	六、三九四人 (一九三七年) 六〇、七七一、三三人 (一九三四年)	歲入 千盾 五三三、三七八 歲出 千盾 五〇六、六四五	蘭領東印度
三、九六、二四四平方尺	三三、九九人 (一九三七年) 一六、〇〇〇、三〇三人 (一九三〇年)	歲入豫算 比 九、二七六、一五〇 歲出豫算 比 八、九一四、一三〇	比律賓
七四〇、四〇〇平方尺	二四一人 (一九三七年) 三三、〇〇〇、〇〇〇人 (一九三六年)	歲入 千比弗 三三、〇〇〇 歲出 千比弗 三三、〇〇〇	佛領印度支那
一、三、七、七、七六平方尺	一四、〇五九人 (一九三七年) 四六、一、四、四〇人 (一九三五年)	歲入 千弗 一三、三〇〇 歲出 千弗 一三、〇〇〇	英領馬來
五、八、〇〇〇平方尺	五三一人 (一九三七年) 一四、四、四、四〇〇人 (一九三九年)	歲入豫算 千銖 一〇、九、四、四五 歲出豫算 千銖 一〇、九、三、九七	泰國

貨幣	物産	國名	
金本位貨 盾(ギルダ)又單位 はフロリン) 百圓に就き 四八、四六盾 (一九三九年)	農産 (一九三九年) 千担 ゴム 一九五、八八〇 砂糖 一、五七五、三三三 茶 八四、〇〇〇 珈琲 五七、〇〇〇 規那 一、一〇〇、〇〇〇 カ、オ 一、七〇〇 パーム油 二四三、〇〇〇 シサル 一〇六、〇〇〇 林産 (一九三九年) 木炭(千遮) 七四、三三七 薪炭材(千立方米) 一、五五五 木材(千立方米) 一、二八二 鐵産 (一九三九年)	農産 (一九三八年) 千担 米 一三六、四三三 甘蔗 一、二六、六六六 コ、椰子 八三、三六六 麻 二五、二一九 アバカ 二二、六七三 玉蜀黍 一九、四三三 煙草 四、二二五 林産 (一九三八年) B F 鐵産 (一九三九年)	蘭領東印度
金爲替本位 比(ベソ)單位 百圓に就き 一九二、八三圓 (一九三九年)	農産 (一九三八年) 千担 米 五七、九〇九 甘蔗 六三、〇八五 甘蕉 三、六六九 砂糖 四七 玉蜀黍 六、二二〇 林産 (一九三七年) 鐵産 (一九三九年)	比律賓	
金塊本位 比弗(ピアストル) 單位 百圓に就き 七三、四比弗 (一九三七年)	農産 (一九三八年) 千担 米 五七、九〇九 甘蔗 六三、〇八五 甘蕉 三、六六九 砂糖 四七 玉蜀黍 六、二二〇 林産 (一九三七年) 鐵産 (一九三九年)	佛領印度支那	
金爲替本位 海峽弗單位 百圓に就き 一九九、六四九圓 (一九三九年)	農産 (一九三九年) 千噸 護謨 三六、四 コプラ 三四、四一〇 錫 五、〇一九 鐵産 (一九三九年)	英領馬來	
金爲替本位 銖(チカル)又は單位 は(パト)ト) 百銖に就き 一五八、三七〇圓 (一九三九年)	農産 (一九三八年) 千擔 米 七五、九八 煙草 一三三 玉蜀黍 八三 棉花 二八 豆類 二四三 林産 (一九三八年) チーク材 三、七四七 其他雜木材 五、三三、三五〇	泰國	

主なる輸出 入相手國及 金額		主なる輸入 相手國及 金額	
日本	八五・一	日本	八五・一
獨逸	六三・八	獨逸	六三・八
米國	四二・二	米國	四二・二
新嘉坡	三三・五	新嘉坡	三三・五
其他		其他	
輸出 (一九三九年)	千盾	輸入 (一九三九年)	千盾
護謨	一九六・五	護謨	一九六・五
石油	一五九・〇〇一	石油	一五九・〇〇一
砂糖	七九・〇〇〇	砂糖	七九・〇〇〇
鑽石卑金屬類	五七・六二四	鑽石卑金屬類	五七・六二四
茶	五七・〇八九	茶	五七・〇八九
其他	一九九・五九五	其他	一九九・五九五
輸入 (一九三九年)	千盾	輸出 (一九三九年)	千盾
綿織物	一三三・〇〇〇	綿織物	一三三・〇〇〇
食料品	八六・八八三	食料品	八六・八八三
機械器具	六二・三五七	機械器具	六二・三五七
金屬製品	五九・一九四	金屬製品	五九・一九四
化學製品	四九・四三三	化學製品	四九・四三三
其他	一三九・四三三	其他	一三九・四三三
日本	一五・三三七	日本	一五・三三七
獨逸	八・五七六	獨逸	八・五七六
米國	五・六六一	米國	五・六六一
支那	五・二八七	支那	五・二八七
其他		其他	
輸出 (一九三九年)	千比	輸入 (一九三九年)	千比
砂糖	九九・三三三	砂糖	九九・三三三
椰子油	二六・八〇一	椰子油	二六・八〇一
麻	三三・七四五	麻	三三・七四五
煙草	一七・八四三	煙草	一七・八四三
其他	六〇・一六七	其他	六〇・一六七
輸入 (一九三九年)	千比	輸出 (一九三九年)	千比
鐵及鋼鐵製品	二四・七〇〇	鐵及鋼鐵製品	二四・七〇〇
機械及部分品	一六・一九	機械及部分品	一六・一九
礦物油	一五・五五五	礦物油	一五・五五五
其他	一六三・五二二	其他	一六三・五二二
香港	一六・〇	香港	一六・〇
英領印度	二二・〇	英領印度	二二・〇
蘭領印度	一五・〇	蘭領印度	一五・〇
日本	四〇・〇	日本	四〇・〇
其他		其他	
輸出 (一九三九年)	百萬法	輸入 (一九三九年)	百萬法
米	一三六・〇	米	一三六・〇
玉蜀黍	三三・五	玉蜀黍	三三・五
護謨	九・六	護謨	九・六
石炭	一五・四	石炭	一五・四
其他	六・四	其他	六・四
輸入 (一九三九年)	百萬法	輸出 (一九三九年)	百萬法
綿織物	五・五	綿織物	五・五
金屬類	三・〇	金屬類	三・〇
金屬加工品	二・七	金屬加工品	二・七
纖維類	二・九	纖維類	二・九
其他	一・三〇	其他	一・三〇
泰國	一〇五・五八	泰國	一〇五・五八
英國	九〇・八七	英國	九〇・八七
薩拉瓦	三三・三三七	薩拉瓦	三三・三三七
日本	一三・四〇	日本	一三・四〇
其他		其他	
輸出 (一九三九年)	千弗	輸入 (一九三九年)	千弗
錫	三三・九〇五	錫	三三・九〇五
礦油	一五・八三〇	礦油	一五・八三〇
礦	五・四三〇	礦	五・四三〇
其他	一四九・一三三	其他	一四九・一三三
輸入 (一九三九年)	千弗	輸出 (一九三九年)	千弗
護謨	二四・七五九	護謨	二四・七五九
礦油	九・〇三三	礦油	九・〇三三
錫	五・六三七	錫	五・六三七
其他	三二・六六六	其他	三二・六六六
日本	一九・三二七	日本	一九・三二七
英國	一五・三三六	英國	一五・三三六
香港	一三・三三三	香港	一三・三三三
彼南	一一・九〇一	彼南	一一・九〇一
其他		其他	
輸出 (一九三九年)	千銖	輸入 (一九三九年)	千銖
錫及錫礦	三〇・八四	錫及錫礦	三〇・八四
護謨	二五・二二三	護謨	二五・二二三
チーク材	六・六九四	チーク材	六・六九四
其他	一八〇・六九七	其他	一八〇・六九七
輸入 (一九三九年)	千銖	輸出 (一九三九年)	千銖
完製品	九三・一〇一	完製品	九三・一〇一
飲食物	一六・七九八	飲食物	一六・七九八
原料	一四・七五八	原料	一四・七五八
其他	四・九七四	其他	四・九七四

對出入額		對出入額	
輸出 (一九三九年)	千盾	輸入 (一九三九年)	千盾
錫	二八・一〇〇	錫	二八・一〇〇
石油	七九・六六四	石油	七九・六六四
石炭	一七・八二二	石炭	一七・八二二
其他	三三〇・六八	其他	三三〇・六八
輸出 (一九三九年)	千比	輸入 (一九三九年)	千比
水產	七四・三二六	水產	七四・三二六
金	一〇・七八一	金	一〇・七八一
車金屬	一〇・七八一	車金屬	一〇・七八一
其他	五九〇・三三三	其他	五九〇・三三三
輸出 (一九三九年)	千比	輸入 (一九三九年)	千比
佛國	一八四・三三三	佛國	一八四・三三三
米國	一五・五三〇	米國	一五・五三〇
日本	六・六四五	日本	六・六四五
英國	六・五二〇	英國	六・五二〇
和蘭	三・五五五	和蘭	三・五五五
佛國	三・五五五	佛國	三・五五五
其他	一六六・八五五	其他	一六六・八五五
輸出 (一九三九年)	百萬法	輸入 (一九三九年)	百萬法
佛國	一・二九六	佛國	一・二九六
米國	四・八〇	米國	四・八〇
新嘉坡	三・八〇	新嘉坡	三・八〇
香港	一・六二〇	香港	一・六二〇
日本	一・六二〇	日本	一・六二〇
其他	一・四二〇	其他	一・四二〇
輸出 (一九三九年)	千弗	輸入 (一九三九年)	千弗
新嘉坡	六二・六九九	新嘉坡	六二・六九九
彼南	四九・八四八	彼南	四九・八四八
米國	三三・六五九	米國	三三・六五九
香港	二二・六〇三	香港	二二・六〇三
日本	二・三三七	日本	二・三三七
其他		其他	
輸出 (一九三九年)	千銖	輸入 (一九三九年)	千銖
錫	一五・二〇〇	錫	一五・二〇〇
鐵	一・九三二	鐵	一・九三二
鐵產	一五・二〇〇	鐵產	一五・二〇〇
其他		其他	
輸出 (一九三九年)	千銖	輸入 (一九三九年)	千銖
錫	三三〇・五三三	錫	三三〇・五三三
鐵	三三〇・五三三	鐵	三三〇・五三三
其他	二二・六三三	其他	二二・六三三
輸出 (一九三九年)	千銖	輸入 (一九三九年)	千銖
新嘉坡	六二・六九九	新嘉坡	六二・六九九
彼南	四九・八四八	彼南	四九・八四八
米國	三三・六五九	米國	三三・六五九
香港	二二・六〇三	香港	二二・六〇三
日本	二・三三七	日本	二・三三七
其他		其他	
輸出 (一九三九年)	千銖	輸入 (一九三九年)	千銖
新嘉坡	一九・九七三	新嘉坡	一九・九七三
其他		其他	

日本對南洋 諸國貿易額		(以上一九三九年)		(以上一九三九年)		(以上一九三九年)		(以上一九三九年)	
輸出	千圓 一七、八〇三	輸出	千圓 二四、七四〇	輸出	千圓 一、九二二	輸出	千圓 二二、三三〇	輸出	千圓 二六、〇三三
輸入	千圓 七、六六九	輸入	千圓 四九、二〇〇	輸入	千圓 二六、六五二	輸入	千圓 二五、八八九	輸入	千圓 五、四〇六
(内譯)		(内譯)		(内譯)		(内譯)		(内譯)	
綿織物	千圓 五三、二五	綿糸布	千圓 七、三三	礦物	千圓 二五	布帛製品	千圓 一〇、三三四	綿織物	千圓 一四、六三
綿織糸	千圓 一四、〇九四	メリヤス製品	千圓 三、七三	陶磁器硝子	千圓 二八八	衣類製品	千圓 二、一三四	人絹織物	千圓 一、三九三
人造絹織物	千圓 九、四二	絹人絹織物	千圓 七、八	石炭	千圓 二八二	金屬製品	千圓 三、四	其他布帛	千圓 二、三〇九
其他	千圓 六、一四	其他	千圓 一三、八三	飲食物及煙草	千圓 二七〇	其他	千圓 九、三四	鐵及金屬	千圓 一、〇二六
輸入	千圓 一六、一七六	輸入	千圓 一〇、四七	其他	千圓 八九	輸入	千圓 三、七六	其他	千圓 七、一三
生護謨	千圓 一、七九三	麻	千圓 一〇、〇一一	護謨	千圓 三、七六	其他	千圓 七、七四八	チーク材	千圓 一、〇八三
木材	千圓 一、二〇八	丸太	千圓 二、五三五	石炭	千圓 一、九七	金屬及鐵	千圓 五、九九	其他	千圓 一、〇九
採油用原料	千圓 三九	鐵礦及金屬	千圓 六、九二	玉蜀黍	千圓 二、三四	其他	千圓 一、〇九		
實綿及纜綿	千圓 五二、〇九	葉煙草	千圓 二五、四三	其他	千圓 二、三四				
其他	千圓 (以上一九三九年)	其他	千圓 (以上一九三九年)	其他	千圓 (以上一九三九年)	其他	千圓 (以上一九三九年)	其他	千圓 (以上一九三九年)

蘭領東印度篇

一 日蘭關係の將來

南方共榮圈、わけても蘭印に對する我が國民の關心が今日程高まつたことは未だ曾てない。去る九月十二日日蘭交渉の使命を帯びてバタビアに安着した小林使節は

「世界情勢の如何に拘らず、將又如何に變化するにせよ、日本と蘭印兩國の友好關係並に經濟關係は一層深厚を加へなければならぬ。この幸福な關係を保ちつゝ貴國と協力することは日本の期待希望するところである。貴國は天然資源に富み廣大な國土を有してゐるが、日本は高度工業化した國家で各種の生産品を輸出しつゝある。斯くて日本としては蘭印の資源に大なる期待を置いてゐる。この有無相通ず

蘭領東印度篇

ると云ふ原則が日蘭印間の關係を支配することは極めて自然なことである。

余の今日の使命は兩國が堅固な友好關係に立つて經濟的紐帶を愈々増進せしむるにある。」

と聲明し、之に對してファン・モーク蘭印首席代表も友好裡に交渉に當らんとする旨聲明應答して目下日蘭交渉は相當進捗してゐる模様である。

蘭印の豊富な資源並に日蘭貿易關係に就いては既に各方面から可成克明に詳述されてゐるので之が重複を避けることゝするも、蘭印の輸入部門に於ける日本の地位は一九三九年、三八年兩年度共和蘭本國に次ぎ第二位を占めて居り、翻つて日本の輸出部門から見ても蘭印は米國、印度に次ぐ主要なる

第三國市場である。にも拘らず日本の進出が余りに急激であつたが爲めに——一九三四年には蘭印輸入部門に於ける日本の割合は三二・四％——諸般の邦品壓迫となり、兩國を繞つて貿易調整問題が幾度か繰り返され、一九三七年の所謂石澤・ハルト覺書交換によつて一應この關係は軌道に乗つた。この協定は今も尙存続してゐる筈ではあるが、日本は支那事變、蘭印は第二次歐洲大戰の影響によつてその實行不可能となり、事實は有名無實と化してゐる。この覺書交換以來三年、茲に再び廣義の經濟交渉が開始されてゐるのであるが、周知の通り世界情勢の激變は交渉の前途を實に多難ならしめてゐる。

換言すれば從來に於ける交渉の重點は如何にして我が製品即ち綿織物を主とする各種纖維製品、自轉車、金屬類、硝子セメント、琺瑯鐵器、陶磁器其他の輕工業製品等を多く賣り込むにあつたが、最近の情勢に於ては輸出もさること乍ら如何にして蘭印の時局資源を多量に輸入し以て經濟關係を調整し東亞共榮圈の確立を期するかに重點が推移して來てゐる。

である。如何に多くの障礙乃至好ましからぬ第三國の干渉が豫想され、又現實に存在するとしても、敢然之を突破してこそ新東亞共榮圈の樹立が齎されるのではなからうか。

二 概 況

位 置 蘭領東印度は亞細亞大陸の南東、北緯六度より南緯一一度、東經九五度乃至一四一度の間に散在する和蘭領の島嶼の總括的名稱で、大體左の四群島から成つてゐる。

- 一、大スンダ群島……スマトラ、爪哇、ボルネオ、セレベス
- 二、小スンダ群島……バリ、ロムボク、スムバワ、フレエロス、スムバ、チモル、サプー、ロテイ
- 三、モルツケン群島……ハルマヘーラ、バチヤン、オビラ、プール
- 一、セラム、アムボン、スーラ、バンドラ
- 四、ニウギネア及屬島……ニウ・ギネア(西半)、アルー、ミソール、ワイゲオ、サラワティ

尙行政上からは爪哇・マヅラと外領に區分されてゐるが、之は人口の密度、民度及經濟的意義等を根據としてなされた

即ち世界情勢の不安、殊に英米樞軸の對日經濟壓迫強化から日本が蘭印に對する石油、錫、マグネサイト、ニツケル、タングステン並にゴム等の依存性、殊に石油資源の確保は重大問題中の重大問題となつて來たのである。

日蘭交渉の全面的成功は吾々の心から望むところである。然し乍ら世界の情勢が極めて深刻なる不安の様相を呈してゐる現在、經濟的よりも寧ろ政治的交渉の妥結を必要とするに於ては交渉の前途も多事なりと考へなければならぬ。例へば蘭印の貿易部門に於ける米國を見ても一九三九年に於ては輸出で第一位、輸入で第三位と、遂に蘭印に取つて米國が日本よりも重要な相手國であることを示してゐる。而もハル長官も「蘭印はゴム、錫、規那、コブラ等の重要な商品の世界産額の大きな部分を占めてゐる……」と聲明してゐる如く、米國の蘭印に對する關心も頗る大きく、其他蘭印の各種通商制限、入國制限、營業制限等日蘭印間に横たわる諸障害も尠くない。

然し乍ら東亞共榮圈確立の爲めの兩國の提携は必然的運命ものである。

面積 蘭領印度の面積は百九十萬四千三百四十五平方方で和蘭本國面積の實に五十八倍、本邦面積の二・八倍に該當する。而して之が内譯は爪哇及マヅラ十三萬二千七百七十四平方方、外領百七十七萬二千七百七十一平方方となつてゐる。

氣象 南東部に濠洲を控へ、北西部は亞細亞大陸に連る關係上氣象は常にその影響を受け、大體に於て十二月、一月二月は雨季、六月、七月、八月は乾燥期である。晝夜の時差も殆んどなく一年中を通じて時差の最も大なる時でも僅に四十八分に過ぎない。

四季を通じて氣溫の變化も尠く、海岸附近で平均二四度乃至二七度、平均最高氣溫及平均最低氣溫の差が最も尠ないのは爪哇西部の一度、最も大きいのはアムボイナの二度である。一日の氣溫の平均較差は乾燥期六―七度、降雨期四―五度である。又氣溫は土地の高低に従ひ、普通百米高まる毎に氣溫は平均〇・六度下降する。

人口 一九三四年國勢調査による蘭領印度の人口一覽表

は左の通りである。

爪哇及マツラ	外	領	合	計	比	率
インドネシヤ人	四〇、八七九、〇五三	一八、二四六、九七四	五九、一三六、〇六七		九七、三六%	
歐洲人	一九二、五七二	四七、八四六	二四〇、四一七		〇・四〇	
支那人	五八、二四三	六五〇、七八三	一、二三三、二四		二・〇三	
其他東洋外國人	五三、三九	六三、二六六	一一五、五五五		〇・一九	
計	四一、七七八、三六四	一九、〇八八、八六六	六〇、七六七、三三〇	一〇〇・〇〇		

〔註〕 東洋外國人とは日本人、支那人以外の東洋人にして、日本人は歐洲人の中に含まれてゐる。

因に一九三七年の我領事館調査による在蘭印邦人数は六千三百九十四人で、會社、銀行、商店の事務員最も多く、物品販賣業之に次ぎ、其他農耕、園藝、畜産、鑛業等の従事者となつてゐる。

財政 蘭領印度の財政は第一次歐洲大戰前迄は極めて順調であつたが、大戰勃發と同時に豫算は著しく膨脹し、歳入不足は年々増加の一途を辿り一九一三年より一九二一年迄の赤字累計は十億六千四百萬盾に達した。一九二四年の頃より世界經濟の安定と行財政整理斷行の結果漸次國家財政に余裕

運用に當り、同行内外保有正貨を操縦し外國爲替の賣買を行ふことにより蘭印盾の對外價値を正貨現送點の範圍に安定せしむる組織である。

貨幣單位は盾（ギルダ）又はフ（ロリンとも稱す）で、補助單位は盾の百分の一の仙（セント）である。

因みに正金銀行調査によるバタビア向平均爲替相場は左の通りである。（百圓に就き）

一九三五年	四三、〇元盾	一九三六年	四四、九七元盾
一九三七年	五二、八二四	一九三八年	五二、六〇五
一九三九年	四八、四〇六		

三 資源と産業

熱帶國下の蘭印は天然資源に恵まれ、食料農産關係に於ては米、玉蜀黍、甘蔗、コーヒ、茶、煙草等の栽培を初め、蜜柑、バナナ、マンゴ、シヤドリツク、ドリアン等の果實を多量に産し、林産關係に於ても椰子、檳榔、チーク、ゴム、紫檀、黒檀等極めて豊富である。

を生じたるも、一九二九年の世界不況に禍せられ再び逆轉し、政府の諸般の對策に拘らず尙期待するが如き成果は得られず、累年歳入不足を繰り返してゐる。

蘭領印度歳入出表（單位千盾）

歳入	歳出	差引	
一九三二年	五〇一、三二九	六三三、一四〇	一、一〇、〇一一
一九三三年	四六〇、〇六五	五五四、〇六三	九三、四二七
一九三四年	四四四、三三七	五〇八、四五六	五四、〇八九
一九三五年	四六六、五五一	四八〇、四三三	一三、五八一
一九三六年	五五五、三三八	五〇六、六四四	二八、七三三
一九三七年	五三〇、五七九	五九〇、〇五三	三九、二二三
一九三八年	五八、二六〇	五八、〇三六	二九、七六六

〔註〕 一九三七年概算額、一九三八年見込額

貨幣 蘭領印度の貨幣制度は金本位貨であるが實際には流通せしめず、領内に於ては無制限法貨たる銀貨及補助貨を流通せしめ、金貨は單に蘭印盾貨の對外價値即ち對外爲替相場を維持調節する爲めに之を領内並に海外に保有するに過ぎない。換言すれば當領の金爲替本位は爪哇銀行の發券制度の

地下資源も亦豊富にして、現在尙完全な調査は行はれてゐないが、調査済の結果から見ても金、銀、鐵、マンガン、銅、錫、ニッケル、クローム、石油、石炭、マグネシウム鑛等を埋藏する事が證明せられ、この外、硫黄、燐黄、沃素、ダイヤモンド等の産出もあげられてゐる。

之等の産物中現在最も注目されてゐるのがゴム並に石油、鐵鑛、錫、ニッケル、ボーキサイト等の軍需關係資源であることは周知の通りである。斯くの如く地上地下共豊富な資源を有する點から、その主要産業もこれら資源開發の線に沿つて構成されて來てゐるが、その根幹をなすものは農業であり、鑛業之に次ぎ、一部には畜産、水産、林業等が行はれてゐる。近年蘭印では原始的原料産業から離脱すべく甘蔗、ゴム、コーヒ、纖維類、茶等の處理工場の設置、並に石油精製の工業化等が企圖されて來たが、尙先進諸國と比肩するには至らない。

(イ) 農産資源

蘭印の農業經營方法は歐洲人の經營によるエステート農業

と古来より傳へられる土民的農業に分れ、前者に於ては主として輸出目的の農産品、即ち甘蔗、ゴム、煙草、茶、コーヒー、規那、カ、オ、胡椒、古々椰子、油椰子、カボック、肉荳蔻等が生産され、後者に於ては米、玉蜀黍、落花生、大豆、カツサバ等即ち地域内消費向のものが生産されてゐる。産物中代表的なものとしてはゴムと砂糖で、ゴムは馬來に次ぎ世界第二位、砂糖も亦ジャバ糖の名を以て知られ、最近の情勢は左の通りである。

年次	生産額		輸出金額	
	生産額	輸出數量	輸出金額	輸出數量
一九三五年	千盾	千盾	千盾	千盾
一九三六年	一五四、八八二	一四三、五〇八	五三、二八八	一、四一四、五〇〇
一九三七年	一六、七三三	一六、一〇一	六七、五五六	一、三九八、九二七
一九三八年	二四三、〇四四	二三〇、〇三三	一五、九三八	一、三九八、九二七
一九三九年	一七五、〇七九	一五六、一〇七	七四、二一九	一、三九八、九二七
一九三五年	一五、八八〇	一五、四三七	一〇三、三〇四	一、三九八、九二七

(口) 地下資源

年次	生産額	輸出金額	輸出數量
一九三五年	千盾	千盾	千盾
一九三六年	一五四、八八二	一四三、五〇八	五三、二八八
一九三七年	一六、七三三	一六、一〇一	六七、五五六
一九三八年	二四三、〇四四	二三〇、〇三三	一五、九三八
一九三九年	一七五、〇七九	一五六、一〇七	七四、二一九

蘭印の地下資源は前述の如く極めて豊富であり、特に近代工業の必需資源たる石油、石炭、鐵から、ボーキサイト、アルミニウム、錫、ニッケル等實に時局的資源を頗る豊富に埋藏し而も之等が爪哇、スマトラを除いては殆んど未開發である爲めに一層價值づけられてゐる。以下主要礦産資源を摘記して見やう。

石油 石油は蘭印に於て最も古くから開發に着手された地下資源で、埋藏量三十億バレルと云はれてゐる。その分布状態はスマトラ、ジャバ、ボルネオ、セレベス、セラム、ムナ、チモール、ニューギネアの各油田に分れ、就中スマトラのパレムバン油田、並にボルネオのサンガ・サンガ油田が最も發達してゐる。昨一九三九年の石油生産額は七百九十四萬八千瓩で(世界の二・八%) 同年世界石油生産國の第五位を占めてゐる。

蘭印石油生産高

年次	生産高
一九三九年	七百九十四萬八千瓩
一九三八年	七百九十四萬八千瓩
一九三七年	七百九十四萬八千瓩

蘭領東印度篇

右の生産額を獲得した會社内譯は次の通りである。

爪哇及マツラ

爪哇及マツラ	八四、〇九〇瓩	九三、三三三瓩	九六、〇〇〇瓩
--------	---------	---------	---------

會社名	一九三九年	一九三八年	一九三七年
バレンバン	三、二二〇、〇三三	三、二二〇、〇三三	三、二二〇、〇三三
スマトラ東海岸	一、〇一〇、七三三	一、〇一〇、七三三	一、〇一〇、七三三
アチエ及其附近	八二、八八五	八二、八八五	八二、八八五
東部ボルネオ	九六、六六一	九六、六六一	九六、六六一
タラカン	六八、六八六	六八、六八六	六八、六八六
アニニ	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇	一、〇〇〇、〇〇〇
モルツケン	一〇七、〇三三	一〇七、〇三三	一〇七、〇三三
合計	七、九四八、六九四	七、九四八、六九四	七、九四八、六九四
バタールセ石油會社	四、四八六、五二〇瓩	四、四八六、五二〇瓩	四、四八六、五二〇瓩
和蘭殖民石油會社	二、一四〇、八六五	二、一四〇、八六五	二、一四〇、八六五
蘭領印度石油會社	一、三三〇、三二九	一、三三〇、三二九	一、三三〇、三二九
其の他石油會社	一、〇〇〇	一、〇〇〇	一、〇〇〇

右の中六十九萬七千瓩の原油は直に燃料油として賣却され七百二十四萬六千瓩は精製工場に輸送され、左記誘導品が精製された。

バンジン	二、〇九九、八二瓩
------	-----------

飛行機用ベンジン 四六、〇三二
 ホワイト・スピリット 五、七五六
 ケロシン 一、〇四七、四三三
 石油残滓重油及ダイゼル油 二、九〇二、五九二
 滑油 二九、二四三
 注油 一九、三〇六
 パラフィン、蠟及セレシン 九、九四四
 アスファルト 二九、二八八
 其他 四三、一〇三
 損失 二六、九五四

而して之等油田の開発には英米蘭三ヶ國の各資本が競争を演じ夫々その資本を代表するものは前掲バターフェ、和蘭殖民(コロニアル)、蘭領印度の三社である。バ社の公稱資本は三億盾、英四、蘭六の割合の共同出資であるが實際投資は五億盾に上り英國側が實權を握つてゐる。和蘭殖民社の公稱資本は一億盾であるが之も實投資は二億五千萬盾に上り、米國ス社系ニュー・ジャージ・スタンダードの子會社として一九一二年以來活躍を續けてゐる。蘭印石油社は蘭印政府とダツチ・

合 計 二六、一〇〇 二七、七三三 三九、七六〇

錫の採掘經營は大部分官營事業として政府の獨占下に置かれ僅に一部分が民間和蘭資本に許され、第三國からの投資は不可能に近く、この點英米資本下にある石油とは大いに趣を異にしてゐる。錫は周知の如く一九三一年成立した協定により國際的にその生産並に輸出を制限されてゐる。錫はその約五〇%が米國で消費されるので、米國の景氣如何によつて錫需要量は左右されると云つてよい。一九三八年錫界は前年秋米國に勃發した不況により著しい生産制限を受け沈滞を示したが、昨年に入り米國の需要も漸次恢復しつゝあつた所へ、第二歐洲戰の勃發となつて俄然錫界は活況を呈した。従つて蘭印の錫割當率も標準生産量の四五%から一躍一二〇%に引上げられた。

石炭 蘭印に於ける石炭の産地はスマトラ及びボルネオの兩島でスマトラをその主産地とし、埋藏量は實存炭量七億七千四百八十萬噸、可能採炭量六億四千二百三十五萬噸と推算されてゐる。炭坑の主なるものは政府によつて經營せられ

シエル團(英蘭系)との共同出資で公稱資本金一億盾と云はれてゐる。斯くの如く優勢なる歐米資本に對し我が國は三井物産と日本石油とが一九二九年に蘭印の東ボルネオ社と合辦會社を設けたに過ぎず、その資本は二百萬盾(日本側百九十八萬盾)で一九三七年以降協和鑛業會社が引續き開發に當つてゐる。蘭印の石油生産額が我が消費額に對して如何なる關係にあるか公表を憚るが、石油資源に乏しい極東に於て蘭印の有する意義は重且つ大なりと云はなければならぬ。

錫 蘭印の錫は石油と共に世界的重要資源となつてゐる。一九三九年の生産額は二萬八千噸で世界産額の約一五%に當り、英領マレー、ポリビヤに次ぎ世界第三位を占めてゐる。

蘭印錫生産高

一九三九年	一九三八年	一九三七年
バ ン カ 一六、九七五 噸	一五、五六三 噸	三三、四四五 噸
ビ リ ト ン 九、九三〇	一〇、四九二	一三、七七八
シ ン ケ ッ プ 一、二九〇	一、六六二	二、三六三
土 人 採 掘 一五	一七	一四

オムベリン、プール・ラウト、ブキット・アサムが著名である。然し乍ら蘭印の石炭産出高は次表に示す通り年産額も極めて少く漸く自給の程度で尙將來の産業と云ふべきであらう。

蘭印石炭産出高

一九三九年	一九三八年	一九三七年
オムベリン 五九〇、七三三 噸	五二六、八五三 噸	四三三、三七七 噸
ブキット・アサム 六三、六六三	四三、九七七	四三、〇二七
以上政府炭合計 一、三三、〇四六	九七、七六二	八九六、三四四
民間炭合計 五八、七七六	四八三、八三三	四七、六三二
總 計 一、七八、一八二	一、四六、六四七	一、三三三、〇六六

鐵 鐵鑛はセレベス中央のラロナと南東ボルネオ州の東南端スンゲイ・ドゥア附近一帯に多く、その推定埋藏量はラロナ地方三億噸、スンゲイ・ドゥア鑛床一億七千萬噸、其他各地を合算すれば總額十億噸にも達すると云はれてゐるが、概して品位低く、地理的にも不便なるのみでなく製鐵用石炭が産出されぬ爲め今尙製鐵業は發達を見ない。要するに鐵鑛資源は徒に死藏されてゐる状態である。



蘭領東印度篇

ボーキサイト アルミ用其他諸般の用途に使用せられるボーキサイトの資源も相當豊富である。産地はスマトラ島の中部東岸、馬來半島々端附近にあるリオウ群島のビンタン島、バタム島、カリモン島及び錫産地ともに知られてゐるバンカ島が有名で、ビンタン島並にバタム島のみでも埋藏量は一億噸以上と推定されてゐる。ビンタン島の最近の産額は左の通りである。

一九三七年	一九八、九七〇噸
一九三八年	二四五、三五四
一九三九年	二三〇、六六八

我が國アルミ工業の原料の大部分が蘭印、馬來に依存する意味に於て、この資源は我國に取り相當の重要性をもつ譯である。

ニツケル ボーキサイトと共に蘭印の新興工業と目されてゐるもので、セレベスの中部プウルウ・バラン鑛床で鑛量約三十二億噸と推算されてゐる。

蘭印の各種鑛石産出高は左表の如くである。

見るに至つたが、爾來その發展は左程急速でなく、大局的に見るならば依然蘭印の工業は尙満足な状態にあるとは云へず原始産業國として工業製品の多くを海外に依存してゐる。

蘭印の工業は輸出を目的とする農園工業と、領内消費を目的とする歐人製造工業及土人工業とに大別することが出来る。

農園工業は蘭領印度が農業國である關係上最も整備發達し數に於ても斷然他を壓してゐるが、製造工業は由來政府民間共に余りに意を用ひなかつた爲めに、近代的設備を有するものはセメント、麥酒、石鹼、機械修理、紙、硝子、織物、製水、清涼飲料水、製革、鞣皮、タイヤ、自動車組立、塗染料の各工場が存するに過ぎない。然し乍ら近年政府の保護獎勵により漸次工場を増設及新工業の勃興を見るに至り、昨一九三九年度にはガスマスク工場、陶磁器工場、アルミ工場、飛行機用ベンジン工場の新設擴張が傳へられ、近代工業も亦漸次その緒に就きつゝある。些か統計は古いが南洋年鑑より蘭印工場數を示し、その趨勢を窺ふこととする。

蘭領東印度篇

蘭印各種鑛石産出高

	一九三九年	一九三八年	一九三七年
アスファルト石灰	五、三三三噸	六、三四三噸	二、一九九噸
ボーキサイト	三三〇、六六八	二四三、三五四	一九八、九七〇
磷	一三、七七七	三三、二二三	二六、一六七
マンガン鑛	一三、三三〇	六、九八七	一一、〇八三
モナサイト	一一三	三九三	三七〇
ニツケル鑛	九、六九八	一〇、〇〇〇	一〇〇
硫	一六、八〇〇	一六、二四三	一、二六四
金	二、四四四	二、三三七	一、七六八
銀	一八、二五五	一八、〇八八	一五、五五八

〔註〕一九三九年暫定數字

(ハ) 工業

第一次歐洲大戰を契機として世界の植民地が夫々可成りの程度に自國の工業を發達せしめたことは事實である。蘭印に於ても世界大戰當時歐洲よりの商品輸入が困難となるやその工業化問題が漸く論ぜられる様になり、各種新工業の創設を

蘭印各種工場一覽表 (一九三五年末現在)

工場種別	爪哇	外領	計
機械工場	五〇	八	五八
機械修繕工場	八九	五五	一四四
鐵道工場	四四	一〇	五四
印刷工場	一八四	四一	二二五
石灰及セメントタイル工場	二七	二	二九
農園工業計	一、四七四	七七一	二、二四五
製粉工場	一七二	—	一七二
精米工場	四二七	三七六	八〇三
製茶工場	二四四	二九	二七三
珈琲工場	五三	七六	一二九
珈琲護謨工場	二四五	一〇	二五五
護謨工場	一四四	二三一	三七五
タビオカ工場	二〇	—	二〇
織維工場	一六	七	二三
其他	五三	四二	九五
ダイヤモンド工場	二	四	六
發電所	一四四	一六八	三一二



蘭領東印度篇

製材工場	五二	六四	一一六
カボック繅綿工場	六九	五	七四
珈琲焙工場	七四	二二	九六
清涼飲料水工場	六八	七一	一三九
コブラ・落花生 カボック種子油工場	六四	三九	一〇三
芳香油工場	一一〇	六	一二六
製紙工場	三	一	三
排水揚水工場	一七八	二四四	四〇二
葉巻煙草工場	三	一	三
紙巻煙草工場	二二	一	二二

四 外國貿易

輸入の約五割、輸出の約三割を歐洲に依存する蘭印の對外貿易が今次の歐洲動亂により未曾有の激變に際會してゐることは想像に難からず、その影響の僅少でないことも自明であるが、以下は南洋共榮圏の一環としての蘭印の貿易近狀を紹介し、之等の數字の中から影響の一端を推測することとする。

(イ) 貿易額

第一次歐洲大戰により激増した蘭印の貿易は時に波瀾を捲き起しながらも大體順調なる経過を示してゐる。

最近三ヶ年蘭印對外貿易額 (單位百萬盾)

輸出入總額	一九三九年 一、二六六・二	一九三八年 一、一五〇・七	一九三七年 一、四四七・〇
輸出額	七四六・九	六六五・三	九四九・〇
輸入額	五一九・三	四八五・四	四九八・〇
出超額	三三六	一七九・九	四五一・〇

蘭印對外貿易指數 (一九二八年一〇〇)

輸入價額	一九三九年 四八	一九三八年 四九	一九三七年 七三
輸出價額	一九三九年 四八	一九三八年 四三	一九三七年 七三
輸入重量	一九三九年 三六	一九三八年 三三	一九三七年 五八
輸出重量	一九三九年 三〇	一九三八年 三四	一九三七年 五八

蘭領印度品別輸出額

品名	一九三九年		比較 増(+)減(-)
	重量(噸)	金額(千盾)	
動物性産物	三三、二五七	八、三九二	(+) 七五五
香料薬味薬材	四三〇、七八二	一九六、五三六	(+) 八九、五三三
珈琲	一四八、九五八	二九、二五	(+) 一〇、〇六
合油種子	六七、五一一	一一、八九九	(-) 三、八六
植物性油脂	八九一、〇〇六	二二、二四四	(-) 二六、七七八
砂糖	一、六〇六、八九六	七六、〇四〇	(+) 四一〇、二四四
煙草	三三、四五四	二六、五八五	(-) 一四、八六
タピオカ	二八九、一四二	九、九〇三	(+) 三、五五七
茶	八三、六七八	五七、〇八九	(+) 一、八三二
織維	一三八、三五六	一九、七三六	(+) 二四、九九六
其他植物性産物	八九五、三〇五	二八、八八〇	(+) 三、四二三
石油及同製品	七、〇四六、三三〇	一五九、〇〇一	(+) 六〇、一四二
礦物性燃料	四三、九四三	五七、六二四	(-) 三六、三八一
鑽石卑金屬類	四三、九四三	五七、六二四	(+) 一、九一六
其他	一一〇、一一	七、七七一	(+) 三、九〇六

前二表の通り茲二、三ヶ年漸次恢復過程にあつた蘭印貿易界は第二次歐洲動亂によつて急激な發展が期待されたに拘らず、輸出はゴム及錫並に印度向砂糖の激増があつたのみで其の他は一般に低調、他方輸入も歐洲戦争見越思惑で一時増加を見たが結局在庫過多で其後振はず、一脈の光明を前途に望みつつも尙貿易界の好調に達するには時日を必要とするものと如くである。

(ロ) 品別貿易

豊富な熱帯性農産物及礦産物を輸出し、織物、食糧品等の生活必需品並に工業製品の輸入を特徴とする蘭印の傳統的品種別貿易は今も尙變化を示してゐない。



蘭領東印度篇

外國産品(不合金銀)	六、三二	三、〇五	六、三二	六、三二
金	五〇	七、二四	三三	四、八四
銀	二、〇七、四九三	七、四六、八七五	一、〇六、四三三	八、一、五七三
計				

(輸出) 輸出品の内容を一九三九年に就いて見るに石油、ゴム、錫等時局を反映する蘭印の特産物は著しい増加を示し、砂糖も亦頗る好調を呈してゐる。

ゴム 昨年度輸出額は一億九千六百萬盾で輸出の第一位を占め、前年度に比較し數量に於て八萬九千噸、價額に於て六千一百万盾を激増し、如實に軍需資源としての重要性を示してゐる。一九三九年度主要仕向先を見ると在表の通りで、米國向が第一位を占めてゐる。

和 蘭	一九三八年	一九三九年
	千盾	千盾
英 國	九、七六七	七、九三三
獨 逸	一四、〇八二	一三、二五七
米 國	一〇、三六六	七、二四〇
新 嘉 坡	四六、〇五八	八九、〇五四
其他 共 合 計	三三、七五五	四七、六〇〇
	一三五、三六八	一九六、五五五

本國向けが多數を占めてゐる。一九三九年國別輸出額は左表の通りである。

米 國	一九三八年	一九三九年
	千盾	千盾
新 嘉 坡	四、〇三三	一〇、四三三
和 蘭	三三	四、一八六
日 本	三三、〇三三	一〇、一五三
彼 南		一三、三五五
其他 共 合 計	三三、四四三	五八、八八八

農業生産物を一九三九年に就いて見るにその輸出の筆頭に於けるものは砂糖以下茶、煙草、コブラ、パーム油、珈琲、規那等の順となつてゐる。この中砂糖はゴム、石油に次ぐ蘭印の主要輸出品で、世界的過剰生産の中にあつて如何に之を處理するか、多年蘭印の懸案となつてゐるものである。日蘭交渉に絶えず砂糖問題が附隨することも蘭印自國の情勢からすれば亦已むを得ぬ次第である。一九三九年の砂糖輸出額は七千八百萬盾で主要仕向先は左の通りである。

蘭領東印度篇

石油 石油類の一九三九年輸出は一億五千九百萬盾でゴムに次ぎ第二位、前年に比し數量は六十萬噸の増加であるが、金額に於ては五百萬盾の低落となつてゐる。一九三九年の仕向國別數字を見ると左表の通りで、新嘉坡向が最も多く、其他濠洲、新西蘭向、埃及向等が多數となつてゐる。この新嘉坡向が何處に再輸出されるかは公表を憚るとしても、その多くが石油資源に恵まれぬ東洋方面に向ふであらうことは明らかであらう。

新 嘉 坡	一九三八年	一九三九年
	千盾	千盾
濠洲及新西蘭	三、二八〇	三、三九〇
埃 及	一三、八〇八	一五、九九〇
支 那	一、一〇〇	七、三三四
其他 共 合 計	七、五五五	六、〇一一
	一六一、六〇五	一五五、三八〇

錫及錫鑛 錫及錫鑛が大部分を占める鑛石卑金屬類の一九三九年度輸出額は五千七百萬盾でゴム、石油、砂糖に次いで第四位、錫鑛は全部和蘭本國へ、錫(片及塊)は米國向と和蘭

和 蘭	一九三八年	一九三九年
	千盾	千盾
埃 及	六、八六三	五、九二六
新 嘉 坡	一一、二一九	一一、五三三
印 度	二、八三四	四、五七八
香 港	一、八八二	二〇、〇〇八
其他 共 合 計	四、一〇八	六、一八六
	四四、六九〇	七七、九八三

(輸入) 次に蘭領印度品別輸入を掲げる。

蘭領印度品別輸入額	一九三九年	一九三八年との比較(増減)
動物植物種苗	四四九	一九〇 (+) 一三三 (+) 一〇
飲食料嗜好品	六〇一、八五三	八六、八三三 (+) 三三、三七七 (+) 一、九四三
動物性産品	三三、七四一	四、七六七 (+) 七九八 (+) 三二
植物性産品	四四九、〇三三	一一、六三四 (+) 二六、三四八 (+) 二四三
鑛物及同製品	二五、四九〇	四九、四四二 (+) 四九、六五七 (+) 七八四七
化學品醫藥染料	三、七七一	三、七七一 (+) 七四四 (+) 一六七
塗料化粧品	三、七七一	三、七七一 (+) 七四四 (+) 一六七
土器陶磁器	三、七七一	三、七七一 (+) 七四四 (+) 一六七

蘭領東印度篇

硝子及同製品	三三、五〇	四、九一	(一)	六、一九三	(一)	七〇三
木材キルク植物性 編材料及工作品什器	三〇、八九	三、九六五	(一)	一七、四二七	(一)	二、三五
皮革及同製品	一、五三七	三、三〇〇	(一)	九二	(一)	五五六
糸織物紐及同工 作品衣服裝身品	三九、三六〇	三三、〇八八	(一)	二、七六一	(一)	二、〇〇一
紙及同製品	八六、〇四〇	一六、三三二	(一)	二、二三八	(一)	六六
金屬及同製品	三〇、四四九	五九、一九四	(一)	三、四、八七五	(一)	九一
車輛及同部分品 (不含タイヤ)	二五、八五七	三三、二〇二	(一)	五、八三四	(一)	七、三三三
機械工器具樂器 ランプ時計武器類	五七、六五八	六、三三七	(一)	一六、三六四	(一)	五、二二五
其他(含ゴム製品)	九六、六六六	六、五六四	(一)	二、九三	(一)	四五六
金	七六	四九、九四七	(一)	四二	(一)	四、一、五〇〇
計	二、〇七、七三三	五九、二八七	(一)	五九、五七三	(一)	三三、八九七

輸入品の内容を一九三九年に於いて見ると原料國たる名の通り衣食の占める割合が大きく、織物、糸、衣服裝身具類は一億二千三百万盾を以て第一位を占め、飲食品及嗜好品の八千六百万盾が第二位を占めてゐる。之に次いで近年漸次勃發の氣配にある工業資材としての機械器具類(六千二百万盾)、金屬及同製品(五千九百万盾)、化學藥品塗染料類(四

其他共合計

二七、二〇〇

三三、六八

機械器具並鐵鋼及同製品

蘭印の工業勃興の爲めに不可缺の之等重工業製品の輸入は和蘭本國製品が優厚なる蘭印の保護政策により卓越せる地位を占め、其他獨逸、米國、英國、白耳義製品が鎬を削つてゐるが、本邦製品は之等列強に比し機械器具は遙に水準以下である。纖維製品を誇る本邦と雖も將來の進出策として之等重工業的製品の輸出増加に努力を必要とすることは、左掲主要仕出國別輸入表によつて窺知されやう。

(機械器具)

和蘭	一九三八年	一九三九年
	千盾	千盾
獨逸	二〇、七四六	一三、二五二
米國	二二、八七	九、七六九
英國	二一、三八六	一四、六〇九
日本	四、八三四	四、二八三
其他共合計	一、七五一	一、二四一
(鐵鋼及同製品)	五七、二二六	四六、四二一
獨逸	八、四五五	六、六九三

蘭領東印度篇

千九百万盾)が目立つてゐる。

綿織物 漸次紡績業は興りつゝあるとは云へ尙綿織物は蘭印輸入の大宗で、和蘭本國、日本、印度、英國製品が猛烈な競合ひを演じてゐる。一九三九年に於ける主要仕出國別輸入額は左表の通りであるが、今次歐洲大戰による歐洲よりの輸入杜絶によつて蘭印市場に於ける日本品の進出がどうなるか蓋し刮目に値するものがあらう。

(綿織物)

和蘭	一九三八年	一九三九年
	千盾	千盾
日本	二七、四三三	三三、四四九
英國	七、〇五	六、六二
其他共合計	六七、六三三	七〇、二四〇
(織物—但綿織物以外)		
英領印度	九、五七	七、五三
日本	六、三四	六、二八七
和蘭	四、一〇九	二、四六
英國	一、九三七	一、三八九

白耳義

七、四六九

五、九六〇

和蘭

六、九〇〇

五、九二五

米國

五、〇八七

六、九八八

日本

五、〇〇〇

七、〇一三

其他共合計

四三、三三九

四三、三九五

食料品

農業國原料國であり乍ら尙多量の食料品の輸入を必要とするものは、其の生産物の多くが生活必需品と云ふより寧ろ嗜好品に屬する爲めで、その輸入は左表の如く三千万盾臺に上つてゐる。主要仕出國別輸入額を左に掲げる。

新嘉坡	一九三八年	一九三九年
	千盾	千盾
和蘭	一五、〇〇一	四、八六六
濠洲新西蘭	五、一八七	三、七三三
英領東阿弗利加	三、八九〇	一、三三三
其他共合計	三、二六九	三、七九
	三六、五五	三三、三三

(ハ)一國別貿易

蘭印の主要國別貿易を最近の情勢に就いて見ると左表の通りである。

蘭領東印度篇

蘭印主要相手國別貿易額 (單位百萬盾)

相手國	(輸出)	
	一九三九年	一九三八年
歐羅巴洲	二〇六・七	二四一・〇
和蘭	一〇七・五	一三〇・一
英國	三四・一	三四・九
獨逸	一四・六	二三・五
佛蘭西	一一・三	一一・二
佛蘭西義	三・六	五・二
白耳義	一六・二	九・二
ルクセンブルグ	五・一	九・九
伊太利	一四・〇	九・二
丁抹	一四・七	八・九
亞米利加洲	二四・七	二一・六
米國	二四・七	二一・六
亞細亞洲	二四・七	二一・六
日本	二四・七	二一・六
印度及緬甸	一八・四	七・六
彼南	二四・一	五・一
新嘉坡	二四・五	一〇・九
香港	一三・四	一三・四
支那	九・八	九・七
總計	四九七	四七四

相手國	(輸入)	
	一九三九年	一九三八年
濠洲新西蘭	四一・三	三六・〇
阿弗利加洲	三四・二	三七・四
埃及、亞歷山、ボートサイド、スエズ	二五・一	二九・三
南阿聯邦	五・八	五・一
其他	四一・七	四七・六
總計	七三九・五	六五二・七
歐羅巴洲	二四・六	二二・九
和蘭	九六・五	一〇六・一
英國	三三・三	三八・〇
獨逸	四一・二	四八・五
佛蘭西	九・二	九・三
佛蘭西義	一一・六	一一・二
白耳義	六・二	五・〇
ルクセンブルグ	六・二	五・〇
伊太利	六・二	五・〇
亞米利加洲	六七・七	六四・三
米國	六三・八	六〇・一
亞細亞洲	一六三・七	一五三・七
日本	八五・一	七五
印度及緬甸	一四・八	一八・二

相手國	蘭印よりの輸出		蘭印への輸入	
	一九三九年	一九三八年	一九三九年	一九三八年
彼南	三三・〇	四・三	三六・一	四・三
新嘉坡	三三・五	二・六	二・六	二・六
泰國	四・一	二・一	二・一	二・一
佛印	二・八	六・五	六・五	六・五
香港	六・六	八・二	八・二	八・二
支那	一〇・二	一三・三	一三・三	一三・三
濠洲及新西蘭	一五・四	四・四	四・四	四・四
阿弗利加洲	六・五	二・三	二・三	二・三
其他	一・五	二・三	二・三	二・三
總計	四九七	四七四	四七四	四九七

更に之を金額順に摘記して見ると左表の如くである。

順位	相手國	一九三九年	一九三八年
第一位	米國	和蘭	同上
第二位	新嘉坡	新嘉坡	同上
第三位	和蘭	米國	同上
第四位	濠洲及新西蘭	同上	同上
第五位	英國	同上	同上
第六位	埃及	同上	同上
第七位	日本	獨逸	同上
第八位	印度及緬甸	日本	同上

蘭領東印度篇

以上三表の通り蘭印の本國に對する貿易額は絶對優位に置

かれてゐるが、一九三九年の輸出では米國向が第一位となり本國向は第三位に轉落し、動亂による對歐貿易の打撃を米國に轉換せんとする模様が明らかに看取される。濠洲及新西蘭向輸出は第四位で一九三九年、三八年共變化なく蘭印が求償貿易に力點を置くとすれば日本に對するよりも米國或は濠洲と提携する可能性が數字的に示されてゐることは留意すべきであらう。

日本向輸出は一九三九年第七位、一九三八年第八位なるに反して、日本よりの輸入は和蘭本國に次ぎ第二位で、斯くて累年甚だしき蘭印側の入超となり、果は本邦品に對する不當なる各種壓迫となつてゐるのである。日蘭通商交渉のキイ・ポイントは或はこの片貿易の圓滿なる調整に存するのではなからうか。

蘭印の輸入相手國は和蘭、日本、米國、獨逸の順で茲二ヶ年同順位を維持してゐる。獨逸は今次動亂の爲め一時的に勢力の後退を見るべきことは必然であるが、この虚に乗ぜんとする米國の勢力は大いに警戒すべき必要があらう。

五 日本と蘭印との貿易

最後に日本の對蘭印貿易に就て見るに、我が蘭印輸出は第一次世界大戰を契機として飛躍的に増大した。特に昭和六年以降日本商品は金再禁止後の圓爲替安に乗じて滔々と蘭印に進出したに比し日本の對蘭印輸入は割合に増加せず、我が貿易尻は昭和三年迄毎年入超傾向にあつたのが、四年以降は出超に轉じ、八年の如きは出超額實に一億圓餘に達した。既述の通り昭和九年一月蘭印當局はこの片貿易を調整すべく會商を我が方に申込み來たつたが、双方の主張に多大の懸隔ありし爲め不調に終り、昭和十一年には和蘭の金輸出禁止による盾貨の低落により日・蘭印間の片貿易は相當修正された。その後支那事變發生に伴ふ日本の貿易統制と蘭印の不況により日蘭兩者の貿易は稍々不振に陥つたが、昨年度は歐洲動亂により先高見越による綿布類の大量買付が行はれ、他方日本の時局資材買付量も増加した爲め前年よりは幾分の好調を示してゐる。本邦對蘭印累年貿易額は左の通りである。

本邦對蘭領印度累年貿易額 (單位千圓)

Table with columns for Year (大正十三年 to 昭和十四年), Export (輸出), Import (輸入), and Balance (出(入)超). Includes numerical values and symbols like (+) for surplus and (-) for deficit.

商品別日蘭關係を観察するに、次表に示す如く對蘭印輸出に於ては、布帛類が對蘭印輸出總額の七〇%を占め消費市場

としての蘭印の特殊性を表示し、以下金屬製品、化學藥品、飲食料品、車輛類、陶磁器等となつてゐる。蘭印よりの輸入は護謨が首位を占めて對蘭印輸入總額の四四%を占め次位は油脂類、藥品材料、鑛及金屬、穀物類等がその主要部分を占めてゐる。

本邦對蘭印品別貿易額 (單位千圓)

Table with columns for Year (昭和十四年, 昭和十三年), Category (e.g., 綿織物, 鐵製品, 機械及同部分品), and Value. Includes a sub-table for 'Mechanical and related parts'.

蘭領東印度篇

(靴ノモ)	六二〇
(布帛製 護謄底)	一〇、四〇〇
輸出 總額	一三、〇〇〇
(輸入)	
生 護 謄	一六、一七八
木 材	一、七九三
採油用原料	一、二〇八
實綿及綠綿	三、五九
麻類及其ノ他ノ植物纖維	二、六四
砂 糖	一、三三
豆 類	二、二六
インヂイアラツパ 及ガタバーチヤ(生)	一、〇八〇

玉 蜀 黍	五、三三四
食 鹽	一、四一〇
菓 子	九四
苧 麻	九〇九
コ 皮	八八九
キ 皮	六四一
珈 琲	七、六三九
輸入 總額	八、二四九

尙蘭印の對日輸入額は總輸入額の一八・一%を占め和蘭本國に次ぐ地位にあり、又日本の第三國貿易中蘭印の占める地位は、輸出は米國印度に次ぎ第三位、輸入は米國、印度、獨逸、加奈陀、伯刺西爾に次ぎ第六位となつてゐる。

比 律 賓 篇

一 比律賓を繞る日本と米國

日本が比律賓に交渉を有する様になつたのは西班牙領以前即ちマゼランの比律賓發見(一五二一年)前からである。就中貿易に關しては後で詳述するが、例の御朱印船に依る物々交易があり、それらは彼我の距離の近接すると云ふ地の利を得て盛んに行はれたものである。

我が移民團も古くより續々渡比して在留日本人は支那人に次ぐ程になつたが、比律賓に於ける日本移民は支那人や猶太人の様に中間的商業には従事する事なく、常に生産部門の第一線に立ちダバオの荒野開拓、水産事業、林産事業及製造工業等の如き新分野に力を注ぎ、比律賓の發展に大なる貢献を

して來た。正式の移民として日本人が始めて比律賓へ渡航したのは明治三十三年で現在では二萬九千餘の日本人が在住して居る。

比律賓對外貿易に於て日本の占める地位は輸出入共第二位にある。勿論第一位の米國と比較する時は數字は問題ではないが、一九四六年後の比律賓獨立を考へる時、現在對米無關稅輸出品中の大宗たる砂糖、コブラ、椰子油等は當然特惠的待遇を中止され、やがて之等の特産品が日本を好個の市場とするであらう事も強ち夢想とは云へないだらう。併し何んと言つても日本にとつて、主要輸入品は礦物資源である。之等資源の貧困に悩む日本として比律賓の地下資源は寔に大きな價值を有する。

一方本邦品の輸出から見た比律賓は綿布製品の有数の市場である。一九三五年以來日米紳士協定締結によりその輸出も年四千五百萬平方米に制限され、加之、支那事變發生以來は在比支那人の日貨排斥が盛んに行はれ、我が綿布製品は著しく逆境にあるが、それでも尙一九三九年には金額にして五百五十萬圓を輸出した。又比律賓貿易に於ける日本の海運業の地位を見るに日本船は日比貿易品の大部分を輸送してゐるのみならず比律賓の米國向輸出にも重大役割を勤め、一九三九年比律賓の日本船舶による輸出入合計は六千七百六十萬五千比を算してゐる。

比律賓に於ける日本人の投資額は二千五百萬弗乃至五千萬弗と見積られ、ダバオに就いて見ても農業關係一千六百五十萬弗、商工業六百二十五萬弗、木材及製材業百萬弗、漁業十五萬弗、其他七十五萬弗、合計二千四百六十五萬弗となつてゐる。

斯くの如き緊密なる關係にあるに拘らず、去る五月には各國移民を一率に五百名とする移民制限法が比律賓議會を通過した比律賓が今又移民制限に依つて日比兩國友好關係に、延いては南方共榮圈確立に好ましからぬ材料を提供したことは遺憾に耐へないところである。

二 概 況

位置及面積 比律賓群島は、亞細亞大陸の東南、馬來群島の北東部を占め、北緯四度四十分より二十一度十分、東經百十六度四十分より百二十六度三十四分の間に散在する大小合せて七千八百三十三の島嶼より成る。この内命名されたもの二千四百四十一でその半数にも足らず、殘餘の島嶼は唯熱帶樹茂る無人島か又は岩礁で、その最北端の島は我が臺灣とは僅に百哩の近距離にある。全面積は二十九萬六千二百九十四平方呎にして、我が朝鮮臺灣、樺太と合したものに略々等しく、内ルソン島、ミンダナオ島の兩面積は全群島面積の七〇%に相當する。

今主要島嶼及其面積を示せば次の通りである。(單位平方呎)

ルソン 一〇五、七〇八

ミンダナオ 九三、五八七

した。この案が米國から出たものか、又は比律賓自身から出たものか疑問であるが、日本移民に及ぼす影響の少なくない事も考へなければならぬ。

之に對し我國外務省情報部長は左の談話を發表して、帝國の見解を表明した。

『比律賓移民法の通過に付き未だ公電に接せぬので如何なる経緯で當方の要望を無視して、斯くの如き事態に立至つたかを審にし得ないのであるが、孰れにしても遺憾のことであつて、我方に於ては今後も尙正當な立場を了解善處せしむる爲め交渉を繼續する積りである。今回通過の法案を見るに、割當移民の外に非移民の入國が自由であるは勿論、非割當移民に關する規定あり、更に大統領の特別許可による移民の入國を認めて居る事實に顧み、差當り比島政府に於ては是等規定の運用に依つて從來比島經濟開發に絶大の貢獻を爲し來つた我が移民の入國に付き、從來に比し著しき變化を見ざる様措置せられんことを要望せざるを得ない。』

名目は紳士協定とは云へ我が綿布製品の輸入制限を實施し

サマール	一三、二七二	セブ	四三、九〇〇
ネグロス	一一、六九六	ボホール	三、九七三
パラワン	二、六五五	マスバテ	三、二五〇
バナイ	二、五三〇	其他の島嶼	一七、一六六
ミンドロ	九、八二六	計	二九六、二五四
レイテ	七、二四九		

地勢及氣候 比律賓群島は地勢極めて複雑、不規則であるが山脈は多く海岸線に平行して走つてゐるから比較的大河は尠く、その代り深山幽谷多く、爲に海岸線の延長は迂餘曲折して、延距離一萬八千四百餘呎と稱せられてゐる。その山脈も火山系が重で、その關係上地震多く、温泉も各所に湧出して我が國の地勢ともよく近似する。

比律賓群島は地形南北に長く、緯度にして十六度三十分も懸隔するため氣候は一樣でない。併し大體七月から十月までは雨期で、十二月から五月迄は乾燥期である。但し太平洋に面した方面では右の雨期と乾燥期は反對で、南部比律賓では雨期は一定してゐない。

一般に十一月、十二月、一月、二月の四ヶ月が絶好の季節で、この平均氣温は華氏七十七度乃至七十九度である。季節

風の襲来も亦有名でその關係上雨量も所、時に依り變化多く雨量の最も少き地方の過去十二ヶ年間の平均は六〇・七三吋雨量の最も多き地方は一二五・六八吋である。湿度も周圍が海の爲め一體に高くなつてゐる。

人口 比律賓群島の總人口は一九四〇年一月一日現在で千六百萬三千三人と發表されたが、之を一九一八年の人口、千三十一萬四千三百十人に比較すると過去廿二年間に約六百萬人が増加した。比律賓在住外國人總數は十六萬六千九百七十七人、その内邦人は二萬九千二百六十二人で、之を地方別にすると最も多いのはダバオで一萬七千八百八十八人に達して居り、マニラは四千七百七十人である。

在住外國人中最も多いのは支那人即ち華僑の十一萬七千四百六十一人で第一位、邦人は前記の數字で第二位、次いで米國人の八千七百三十九人(軍人及其の家族は除く)、西班牙人の四千六百三十七人の順序になつてゐる。

財政 比律賓の財政制度は現在總て自主性の基礎に立ち、政府の費用は盡く比律賓國內納稅者の負擔となつてゐる。

月別	一九三九年	一九三八年	一九三七年
一月	一九四、一四九千比	一六三、七四八千比	一四一、三〇〇千比
二月	一九一、三四〇	一六七、四二四	一四三、五一九
三月	一九一、三〇四	一七三、七三七	一四八、四八八
四月	一九〇、七六七	一七〇、四三三	一五〇、三二二
五月	一九〇、四二二	一七〇、六三九	一四九、二五一
六月	一九〇、〇八八	一七九、五六四	一五二、五九三
七月	一九〇、九六九	一八二、四〇九	一五二、六七二
八月	一八八、七四六	一八三、七四三	一五二、六八一
九月	一九一、七五一	二〇六、七九八	一五五、一六九
十月	一九二、六六二	二二八、一六一	一五七、五六九
十一月	一九五、五二五	二〇八、四一四	一五七、四〇四
十二月	二〇一、〇三三	二〇五、四三六	一六一、四八九
平均	一九二、五八〇	一八七、七〇八	一五二、八六一

因みに正金調査による日比爲替相場は左の通りである。(百比に就き)

一九三五年	一七四、三四七圓	一九三八年	一七五、五五三
一九三六年	一七三、五一六	一九三九年	一九二、八八三
一九三七年	一七三、五三三		

第二次歐洲戰爭進展の結果、政府の収入は各方面に亘り相當の減収を見るものとして、一九四一年度政府豫算を發表した。その歳入、歳出を前年度と比較して見ると左の通りである。

	一九四一年	一九四〇年	増減
歳入豫算	九、一七六、五〇比	九、〇六一、八〇比	一五八、七〇比
歳出豫算	八、九一四、一三〇	九、五三〇、〇七〇	六一五、九四〇
一九四一年度豫算を費目別に示せば左の如し			
一九四一年	一九四〇年	増減	
一般經常費	七九、〇五四、五〇〇比	八、二八、六五〇比	二、六四、一五〇比
特別費	七八、四〇〇	六九、八四〇	二九、六〇
特定費	九、三六、一八〇	九、六〇、三五〇	二三六、四〇〇
臨時費	一、八七、七〇〇	四七、二九六、二六四	四五、四一九、五六四

貨幣 米國領有以前は西班牙の勢力を受け、所謂墨西哥銀が流通してゐたが領有後金爲替本位を確立し、單位をペソ(比)に統一し、一比を米國通貨五十仙にリンクせしめ、これに對應する補助貨も制定した。

今貨幣流通高を統計に依り示すと左の通りである。

三 産業と資源

(イ) 農産資源

比律賓は元來が農業國である。之はその地形が農業に適する様地味が肥え、氣候、湿度、雨量等が自然的に調節宜しきを得てゐるためである。

耕地面積も全面積の約五割に近く、農産物中主要なものは米、甘蔗、コ、椰子、麻、煙草、アバカ及玉蜀黍等で、その中米が首位を占め、甘蔗、麻等と共に比律賓の財的資源を構成する主要農産物生産高を見ると左の通りである。(一九三八年)

米	アバカ
二六、四三三、〇〇〇比	三、六七二、三〇〇比
甘蔗 二六、六六六、二七〇	玉蜀黍 一九、四三三、三〇〇
コ、椰子 八三、三三六、二九〇	煙草 四、二二五、四六〇
(副産物を含む)	
マニラ麻 二五、二一九、七一〇	

農業國である比律賓經濟に於て牧畜も重要な地位を占めるが、それ等は唯耕作に従事する牛馬を目的とするもので、酪農品及肉類は猶完全自給の域に達せず、米國より供給を受け

その他現在では尙大して數字に現れぬが、將來有望視されるものに護謨、珈琲、カボツク等がある。

(口)林 産 資 源

林業は農業に次ぐ一大産業にして、幾多の統計が示す様に比律賓は世界屈指の森林國である。森林地帯は全面積の約半分を占め、それに投資された額も一九三八年には三千三十六萬六千比、製材工場數百四十八であつた。

一九三八年に商業用材として伐採されたる總數量は十億千四百八十四萬六千八百四十五ボード呎、價額三千五百五十四萬九千三百七十六比にして、其の全生産高の八四%は國內消費に充てられてゐるが、豊富な林産物中ラワンは建築、家具用として需要多く、未加工即ち丸太のまゝ輸出される。今一九三八年及一九三九年の主要仕向地別輸出高を擧げると左の通りである。

一九三八年 一九三九年

日 本	九七、四八ボード呎	一二七、四九四ボード呎
支 那	三、六二〇	二九、七四四
日本占領區域支那	一一、三六二	六、八二一
濠 洲	一、四〇〇	一、一八二
佛領南洋	—	二、〇八二
其 他	二、二六五	一、八二七
計	一二七、一六七	一五九、一五一

木 材

米 國	三、四八三ボード呎	三、九〇五ボード呎
英 國	八、一七一	六、五八九
英領アフリカ	三、七三六	三、八四八
濠 洲	五、〇六八	三、〇五八
支 那	一、五四八	三、六一九
其 他	三、四〇一	三、九九七
計	四三、三九八	四四、〇一八

右の如く丸太に於ては日支兩國で事實上全部を占め、木材では米國が通常その半量を占めてゐる。

(ハ)鑛 産 資 源

六千八十七萬五千比、一九三九年、七千四百四十四萬四千比と逐増してゐる。過去六ヶ年間の金生産高を擧げると左の通りである。(單位比)

一九三四年	三三、七〇一、九三三	一九三七年	五二、五〇〇、〇〇〇
一九三五年	三三、〇三三、〇四四	一九三八年	六四、〇〇〇、〇〇〇
一九三六年	四四、四三〇、四三〇	一九三九年	七四、三三、二六

(ニ)水 産 資 源

海岸線の長さ一萬八千四百餘軒で、米國本土の海岸線よりも長く、その領海延面積は實に陸地面積の六倍餘に及ぶ。従つてこの海岸より受ける利益も莫大で、その近海に棲息する魚類も二千餘に達して居り、海岸至る所水産業の不可能な所は無い。

然しこれら水産資源も唯島内の需要に當てるだけで、一歩進み工業化即ち罐詰輸出の域に達してゐるのは一、二を數へるだけである。

今一九三三年以降の魚獲高及金額を擧げると左の通りである。

資源開發狀態から見た比律賓鑛業は金鑛採掘以外未だ發展途上にあると云へるが、最近卑金屬鑛業も重要産業の一つに加へられつゝある。一九三九年に於ける卑金屬全生産高は千七十八萬一千八百五十五比で、一九三八年の同生産高より三百四十一萬一千九百六十九比、即ち四六・三%の増加を示してゐる。一九三四年からの卑金屬生産高の急激なる増加振りを示すと即ち左記の如くである。(單位比)

一九三四年	八三、七九	一九三七年	五、〇四八、四四〇
一九三五年	一、三二〇、八六六	一九三八年	七、三三〇、二六
一九三六年	七、四〇六、七七一	一九三九年	一〇、七八、八五五

猶一九三九年に於ける卑金屬生産高内譯を示すと左の通りである。(單位比)

鐵 鑛	四、九四、八〇〇	マンガン鑛	六〇、二六三
銅	二、九三、四八四	錫	六、七六一
クロム鑛	二、二九五、二七	合 計	一〇、七八、八五五

金生産高に關する限りその統計は増加の傾向を示し、その輸出額も一九三七年、四千六百三十三萬五千比、一九三八年

總魚獲高

一庇〇・三比として計算

一九三三年	四、七〇、六〇〇	一、四三、八六比
一九三四年	六、六四八、五三〇	一、九四、五九
一九三五年	一〇、六九〇、七〇〇	三、〇〇、三三
一九三六年	一三、〇〇〇、四三〇	三、九〇、二九
一九三七年	一五、〇四四、四八〇	四、五三、六四四
一九三八年	一八、三三三、四三〇	五、四四、六六
一九三九年	一九、六七四、六四六	五、九〇、三三

魚類以外の水産物として眞珠貝、海綿、鼈甲等がある。特に眞珠貝の採取は有名で、その採取は主に日本人の手で行はれてゐる。然し魚類及海産物を當然海外へ輸出せねばならぬ。比律賓が反對に外國からその罐詰製品を毎年相當額輸入してゐるのは奇現象と云はねばならぬ。

(ホ)工 業

本來が農業國たる比律賓に於ける工業は、當然農産物に關するものが多い。即ち製糖の機械化であるが、近代的生産手段と技術との適用が栽培部面に阻止され、糖業は農工分業が數へるのみで、主として米國よりその供給を受けてゐる現状である。

一九四六年後比律賓は獨立し、その結果米國に對しては特惠的關係が無くなるから、一般國內産業を工業化して自給自足乃至は輸出生産に邁進すべく努力してゐるが、既にその現れとして屑物更生等で輸入抑止の方法を採つてゐる。

之等屑物更生等の工業化は比律賓經濟から言へば未だ重要なものではないかも知れない。併し巨大な農業部門に存在する副産物を活用して既に市場性の明かな商品を製造する程度にまで踏み出した意義こそ大なるものとしなければならぬ。

(ハ)商 業

既述の如く農業本位の國である比律賓の商業も又工業と同様の立場にある。併し商業に關する限り閑却する事の出來ないのは華僑の存在である。在比外國人中第一位を占める優勢裡にあつて各部門の仲介、卸、小賣、行商等を營むもので、彼等は比律賓特産物の取引に於て精米、木材及煙草等の約九

原則とされて居る事から、こゝではジャワやハワイに於ける如く製糖會社が蔗作農場を自營するのでもなく、キューバに於ける如く近代的大農經營が行はれてゐるのでもない。斯くて業界に於ては工業部門と所謂栽植企業との統合が強く要望されてゐる。

獨占的地位にあるマニラ麻(一名アバカ)の工業化は單に市場擴大の爲めのものではなく、特に海外市場の需要を恒久的ならしむるためのものである。斯くて政府は國內麻生産業者の利益擁護のため、將又比律賓工業助成のため資本金二千萬比を以て國策會社を創設した。

コ、椰子油の工業化が初められたのは一九〇九年で、その間相當の成績を挙げたのであるが一九二九年の世界不況に伴ひその生産量も減少した爲め、政府はその工業化の復興助成を目的として今年八月資本金二百萬比でコ、椰子國策會社を設立した。

パルプ及罐詰工業に關してもその豊富な資源を十分に活用して輸出製品とする域には未だ遠く、兩者共二、三の工場を割、砂糖の移輸出も亦その手に收めてゐる。蓋し比律賓商業の大部分は華僑の存在を無視して考へる事は出來ない。

最近一九三九年十一月比律賓聯邦始政記念日以来、外國人(主に華僑)に對しその小賣商權及地位を比律賓人の手に移行せしむべく各種の制限を加へてゐる。

四 外 國 貿 易

(イ)貿 易 額

比律賓の對外通商貿易が西班牙人の領治以前から支那、日本、ポルネオ等の隣邦商人との間に行はれて居たことは幾多の文献に記されてあるが、更に西班牙人と交易する様になつてからは物々交換又は金若しくは鈴、鐘等を仲介物として貿易を行つた。日本とは例の御朱印船による南蠻貿易が行はれたが、西班牙の統治下にあつて比律賓の外國貿易が最も盛大に行はれたのはマニラを中心としての西班牙の對東洋―日本支那、印度及マラツカ貿易が行はれた時代で、殊に支那との貿易は股賑を極め十六世紀から十九世紀にかけて毎年三十

隻乃至五十隻が來航して生糸、絹、刺繡、緞子、縐子等の高貴な織物や、銅器、硝石、火藥等を輸入した。併し西班牙政府は一時土人の外國貿易を制限したため當然發達すべき比律賓の對外通商が一時非常な障礙を受けた。その後十九世紀の初葉になつて此の制限を解かれたが、それは既に西班牙王朝の比律賓君臨の終末期であつたから、その影響力も小さかつた。

此の西班牙統治の末期三十年間は左記の統計が示す如く例年出超の好調にあつた。

西班牙領時代の比律賓外國貿易

平均年度	輸入額	輸出額	差引出超額
一八〇一—一八四四年	三、〇〇〇、四八七比	四、六七六、六五七比	一、六七六、一七〇比
一八五〇—一八八九年	三、五七八、三三〇	四、九八二、四三〇	一、四〇四、一〇〇
一八九〇—一八四四年	三、五五三、三八八	三、五二二、五五八	三〇、八三五比

比律賓が西班牙領を離れ米國領となり、その軍政期たる一八八八年—一九〇一年間の貿易は逆調を示したが、米比間に自由貿易制が施行せられた後の米比貿易は目覺しい發展を示した。即ちその間の統計を年平均貿易額で示すと左の通りである。

好市場である。米國が比律賓對外貿易の約八割近くを記録するのにも又當然の結果と言はねばならない。

一九三九年度對外貿易が前年よりも減少した事は第二次歐洲動亂の勃發のためで、今第一次歐洲大戰當時の統計を見ると左の通りである。

年	輸 入	輸 出
一九一三年	一一、六五五千比	一〇、六六四千比
一九一四年	九、七二七	九、七三九 (第一次歐洲大戰勃發)
一九一五年	九、六三四	一〇、七六六
一九一六年	九、〇九二	一三、八七四
一九一七年	一三、五九四	一九、二〇八

以上の統計が示す如く第一次大戰勃發當時は輸出入共減退したが、その後順調に進んだ事から考へ、今次の場合もその結果は一般に好況が期待せられて居る。

尙過去十ヶ年間の對外貿易は左の通りである。

比律賓累年對外貿易額

年	輸 入	輸 出	總 計	差引出(入)超
一九三〇年	二四六、一五五千比	二四六、三三四千比	五二、五九千比	二〇、四九千比

以上統計が示す様に比律賓貿易は輸入、輸出共増大の一途を辿つて居る。勿論之は前述の如く一九〇九年に設定せられた關稅關係に最大原因を見出すのであるが、併し、この現象は全然自由貿易相互主義の影響のみとは言へない。即ち他の重大要素は農産物の工業化による生産増加、鑛産物の採掘増加及水陸輸送の改良等が大きき力となつた事は言ふ迄もな

自由貿易は比律賓の生産製造業者に全米國市場と云ふ廣大な地域を與へ、そこで農産物、原料資源の大部分が吸収された。一方米國製品は比律賓市場に對する自由輸入の特權により競争者の大部分を驅逐し、あらゆる輸入品目中實質上の獨占權を得て進出した。斯くて比律賓は單に米國に對し農産物の良き供給者たるのみならず、米國製品にとつても利益多き

年	一九三九年	一九三八年
一九三二年	一九、三三七	二〇、七九四
一九三三年	一五、七九〇	一八、〇六六
一九三四年	一三、四七三	一一、五四二
一九三五年	一六、七二四	三〇、八〇七
一九三六年	一七、〇四七	一八、四九二
一九三七年	二〇、二五三	二七、二八六
一九三八年	二八、〇五一	三〇、四六五
一九三九年	二六、五二五	三三、五九一
一九四〇年	二四、五五五	四九、八〇六
一九四一年	二四、四三三	四八、九六七

(口)品 別 貿易

(輸 入)	一九三九年	一九三八年
綿 布	二五、二八千比	二八、七四七千比
鐵及鋼鐵製品	二四、九七〇	二六、〇一五
機械及部分品	一六、一九一	一九、五八二
鑛物油	一五、五六五	一五、八八
煙草製品	一三、九四五	一五、八六七

比 律 賓 篇

酪農品	八,五〇〇	八,九四九
麥粉	八,三二二	一〇,一六三
藥品化學製品	七,六九五	八,八八一
電氣器具	七,六五〇	七,六〇八
紙	六,五〇〇	七,三七八
其他	二〇,〇九七	二六,〇九五
總計	二四五,五五五	二六五,二二五
砂糖	九,三四六	一〇〇,〇四四
コブラ	二六,八〇二	二四,五二二
麻	二二,七四五	二〇,三三八
椰子油	一七,八四三	二二,四一一
煙草	一四,五二九	九,九二九
刺繡品	一〇,六九四	一〇,一七六
乾燥椰子	八,八三七	七,六三三
木材	六,三六三	五,六五一
鐵礦	五,〇九八	四,〇八一
果實	四,二九八	二,七四一
コブラ碾製品	四,二五〇	五,四九五
丸太	三,一五七	二,四六一

クローム鐵	二,一五四	一,五七七
其他	一五,三三六	一五,五六三
總計	二四,四三三	三三,一五一

(金は含まず)

(ハ)國別貿易

歐洲よりの輸入は交戦國をも含め一般に増加を見、英國一〇%、和蘭八%、獨逸二%と何れも増加したが、唯佛蘭西は全體としては少い數であるが凡そ二〇%減じた。

次に比律賓よりの輸出を見ると第一位は米國向で一億八千四百二十六萬三千五十比で前年に比し三%の増加を見た。對日輸出は一千五百五十三萬三千三十六比で前年より僅に増加したが、特に和蘭は前年より一躍三〇%を増加して六百六十二萬三十四比に達した。

一九三七年以降の主要相手國との貿易額を比較すれば左の通りである。

比律賓主要相手國別貿易額

支那	一,九三三	一,九〇四	二,〇一九
獨逸	三,六二二	二,九八八	一,九八三
其他	一九,九一〇	一七,三〇六	一九,二五〇
總計	二〇,一五三	二〇,一五〇	二四,四三三

一九三九年の比律賓對外貿易に關聯して特筆すべき事は商船の増加と共に比律賓の船舶が海運界に大いに活動した事である。

船籍別輸出入運搬狀況(一九三九年)

國籍別	輸 入	輸 出	合 計
比律賓	八三,二千比	三,五二,三千比	四,三,四五千比(一九三八年)
米 國	三,二六七	五,八四〇	九,一〇六
英 國	三,五五三	三,四,四二六	六,九七九
日 本	一〇八,四六五	五,四,五〇八	一,一三,九七三
獨逸	二四,一八六	四四,四二五	六八,六一〇
和 蘭	一八,〇二九	五五,一八〇	六七,六〇九
其 他	一,二,八八〇	一一,一〇一	一三,九八一
總計	一四,五〇〇	七,五三九	二二,〇三九

比 律 賓 篇

米 國	一九三七年	一九三八年	一九三九年
獨逸	二二六,六〇四千比	一八〇,七二四千比	二六六,八五五千比
日 本	三二,一〇四	二五,四一四	一五,二二七
支那	八,二八八	八,〇〇九	八,五七六
獨逸	六,六二二	六,五〇〇	五,二八七
支那	四,八二六	四,六八八	四,五二六
獨逸	四,五三六	五,八四三	五,九五四
和 蘭	四,四〇六	五,八三三	五,九〇七
英 國	五,三二二	五,四三三	五,九六一
其他	二五,三四一	三二,八二九	二七,一五二
總計	二二八,一四〇	二二九,二二五	二四,五五五
米 國	二四一,四八五	一七六,八八九	一八四,一六三
日 本	二〇,〇二九	一五,〇二六	一五,五三〇
英 國	二二,四六六	六,一〇七	六,六四五
和 蘭	二,一三七	五,〇八二	六,五二〇
佛 國	一,五九九	三,一八四	三,五五五
丁 抹	一,二八九	三,〇九六	二,六六七

比 律 賓 篇

航空便	八	一八七	二五五
郵便	六〇三	四七八	六、五〇九
總計	二四三、三三	二四八、四七一	四八六、二七三

五日比貿易

日比貿易はマゼランの比律賓發見以前から既に交易制により行はれて居た事實は明瞭であるが、貿易統計として記録に残るものは一八五八年（安政五年）比律賓から日本へ總額僅か九百三十六比の輸出があつたのが最初で、輸入は一八七四年（明治七年）日本から始めて一萬二千百十四比の品物が比律賓に入つてゐる。

我が對比貿易關係が急發展したのは第一次歐洲大戰の頃からで、一九一三年の千四百六十五萬圓から一九二〇年には五千萬圓に昇つたが、爾後減退に轉じ、一九三一年には二千九百萬圓に墜ちた。以後正常なる發展を遂げ出超を續けたが一九三八年からは入超に轉じた。

本邦對比累年貿易統計を示せば左の通りである。

燐 寸	九	一四二	六
綿 糸	一、二四七	一、三三四	一、七六一
綿 布(生地)	三三二	二二	六九
同 (晒)	八六三	六六	二七九
同 (其他)	四、八九一	五、一七六	八、七一九
絹織物	二四	六	三九
人絹織物	六九四	二、〇九六	五、五〇〇
綿ブランケット	一五八	九五	二五二
メリヤス製品	三、七三三	四、〇四四	五、一〇、五
身邊粧飾品	八九	一五	三四三
紙 類	二〇八	三八	四四
石 炭	四	一、九三三	三、七三三
セメント	一四六	六五八	一〇一
陶磁器	六〇	六八	一、四二二
硝子及同製品	七三	一、〇一〇	一、九七一

比 律 賓 篇

輸 入	輸 出	總 計	(出)入超
一九一三年	六、六九千圓	七、三九千圓	一四、六八千圓
一九二〇年	三、四、八七六	一、六、四〇五	五〇、七七一
一九二九年	三、〇、五九七	一、八、〇四四	四八、六四二
一九三一年	二、〇、四三三	八、九八八	二九、四三三
一九三二年	二、三、六二二	九、七六四	三三、二二六
一九三三年	二、四、〇五一	一、四、一八五	三六、二三六
一九三四年	三、六、四七一	一、八、八九一	五五、五三三
一九三五年	四、八、〇五八	二、三、九四九	七二、〇〇七
一九三六年	五、八、四〇〇	三、六、二六六	八八、一〇七
一九三七年	六、〇、三〇八	四、五、一三三	一〇四、五四一
一九三八年	三、三、五九九	三、五、六三二	六八、三三〇
一九三九年	二、四、七四四	四、九、二一〇	七三、六四四
小麥粉	一九三九年	一九三八年	一九三七年
水産物	一千圓	一千圓	八、八千圓
魚油及獸油	一	三	六九七
鐵製品	四七	六五	二、二六二
機械及部分品	三七五	八七	一、〇、三
洋燈及部分品	九七	二四	四七
玩具	三〇	三四	五六七
其他	九、五三〇	二、八七五	三、三八六
總額	二四、七四四	三、三、五九九	六〇、三四八
(輸 入)			
麻	一〇、四七七	二、四、四三三	三、三、五〇〇
丸太	一〇、〇一一	六、五二七	一〇、九七八
鐵鐵及金屬	二、五二五	一、四、三三六	八、二九
葉煙草	六九二	九五	九五九
藥材	二七	〇	四二二
皮革	九三	三三六	四一八
其他	二四、四七九	二、〇、四	一、七七一
總額	四九、二二〇	三、三、六三二	四九、一八三

猶我が對比品別貿易を示せば左の通りである。

佛領印度支那篇

一 南方共榮圈としての佛印

佛印カトルー總督は、去る七月十三日、支那事變の解決促進に協力し、併せて今後は日本との相互依存的な經濟關係を緊密にする必要がある旨を誓約し、次いでポードアン佛外相は、九月二十四日、佛印との協定成立による皇軍の平和的進駐につき聲明書を發表し、今後は日本との外交經濟關係を緊密にする必要があることを強調して左の如く述べてゐる――

「佛蘭西は今回の日本と佛印との協定により、東亞新秩序下に於ける日本の政治的經濟的權益を認め、佛蘭西はこの調印が忠實な日佛協商の發足となることを希望するものである」と。

かくて援蔣ルートの一だつた佛領印度支那は、大東亞共榮圈の一員に加はることとなり、その産業及び資源は、直接にの望ましいことは敢て贅言を必要としないであらう。

歐洲第二次戰による佛本國の没落によつて佛印の對日關係は實に急激に轉回した。去る九月圓滿妥結した日佛協定による皇軍の佛印進駐は日佛政治關係友好化の第一歩と見るべく更に今回の我が佛印經濟使節團の派遣によつて過去の歪める經濟關係も完全に清算さるべく期待される。

二 概況

面積 佛印は亞細亞の東南隅、印度支那半島の東部に位置し地勢は一般に北高、南低の形をとつてゐるが、半島の中央部を峻嶮なる西藏山系の支脈が縦走して東西を分つ分水嶺となつてゐる。總面積は七十四萬四千方料で、交趾支那植民地及び東京、安南、カンボチャ、ラオスの四保護領から成つてゐる。之を我が國の總面積(六十七萬五千三百八十五平方料)に比し、尙六萬五千平方料廣く、本州の約二倍に當つてゐる。

人口 多種多様で文化的にも低く、且つ地理的條件に制約

我々の關心の對象となるに至つた。然らば現在佛印の經濟狀

態並にこれが開發狀況如何と言ふに、印度支那は極めて豊富な資源とこれが開發に有利な自然條件を具備しながら、しかも、その利用開發は、殆ど行はれて居らず、原料供給地としての範圍より一步も出てゐないといつて差支へない。諸般の理由が存するとしても、要するに、佛蘭西本國がこの地を領有或は保護國として以來、専ら土民を搾取し、土民自體に、就中佛印自體に經濟的實力を持たせないことを以て統治の根本方針として來た點に根因が潜んでゐる。所謂佛蘭西の本國至上主義の植民政策の結果であつて、之が爲め産業の振興資源の開發も遅々として進まず、文化的啓蒙も亦遙かに遅れ、土民は著しく無能力化されて來た。東亞共榮圈の理念とは全く相背馳せる斯かる舊態是正が一日も速に達成せられんこと

されて交通も不便なので、人口調査の如きも實施上頗る困難である。一九三六年調査に依る總人口は二千三百三萬、人口密度は平方料當り平均三一・一〇人で、割合に稠密な東京、交趾支那でも七五・一九人及び七一・三四人である。人口の主要構成成分は總人口の七二%を占める安南人で、人種別數字を示せば次の如くである。(一九三六年)

人種	總數(千人)	割合
安南人	一六、七九	七三%
カムボチャ人	二、九五	二七%
タイ人	一、三五	六〇%
其他土人	五九	二九%

而して全國民の七割以上が農民で、鑛工業に従事する者は僅かに七%に過ぎない。

氣候 土地の緯度と高度に依り著しい差異があるが、盛夏酷暑の熱帶性氣候であることは全國共通である。一年は二期に分けられ、乾期(十一月―四月)の濕度は平均攝氏二六―二七度位、雨期(四月―十月)は更に暑く、平均二七―二九度位である

南部西貢地方は寒暖の差は頗る少いが、北部の地方は、冬季夏季の區別が截然として、夏季は相當の暑さを示すが、冬季は湿度少くして爽快である。

財政 財政歳出入累年の趨勢は別表の如くで、一九二九年以來引續き歳入不足となつてゐる。これは一九三〇年世界恐慌の勃發に依り従來佛本國依存の政策を採つてゐた關係上直接その渦中に投ぜられ、累年、五百萬乃至二千萬ピアストルの赤字を計上してゐたもので、一九三一年を境として赤字は漸次減少し一九三五年以後に於いては寧ろ歳出入バランスは均衡を示してゐる。

佛印財政收支累年比較表

(單位千ピアストル)

年	歳入	歳出	過不足(△印不足)
一九二九年	九三、七三三	九四、九七五	△ 一、二四二
一九三〇年	九四、七四五	九四、九七五	△ 二、二二〇
一九三一年	七六、七〇三	一〇四、二四一	△ 二七、五三八
一九三二年	六五、二四五	九五、〇〇六	△ 二九、七六一
一九三三年	六二、四三〇	八二、八四七	△ 二〇、四一七
一九三四年	五七、八〇二	六二、八四三	△ 五、〇四一

(イ) 農業

印度支那は殆んど純然たる農業國にして、この事は其の輸出貿易に於ける約四分ノ三が農産物であることによりても明らかである。農産物の大宗は米であつて、次いで玉蜀黍、護謨、コブラ、落花生、胡麻、蓖麻子等の採油用植物、カボツク、胡椒等を擧げることが出来る。

米 印度支那隨一の農産物たるのみならず、印度支那經濟の根本要素である。即ち印度支那輸出の過半を占める米の豊凶如何が殆んど全經濟活動を左右すると共に、其の價格の高低は國民の購買力、租稅收入等財政上にも多大の影響を與へてゐる。従つて米作は佛印産業に於て比較的高度の發達を遂げてゐるが、未だ粗笨經營の域を脱してゐない。

印度支那の産米高は最近平年作で七百萬噸と言はれ、此の中毎年百萬噸が輸出せられてゐる。而して最近に於ける輸出の増勢と米價の昂騰とは農民其他一般經濟界に多大の利益を與へてゐる。

主産地はメコン河下流の平野であつて、河口の三角洲全部

年	一、三六九	一、三六九
一九三五年	五、七七八	五、四四九
一九三六年	六〇、一六〇	六〇、一六〇
一九三七年	一三三、〇〇〇	一三〇、〇〇〇

貨幣 佛領印度支那の貨幣制度は純然たる金塊本位制にして金貨は存在せず、市場には比弗(ピアストル)銀貨が代表貨幣として流通し、實際市場に於ては一比弗紙幣及五〇仙、二〇仙以下の補助貨で收支が行はれてゐる。比弗の百分ノ一がサンチームである。金融機關としては印度支那銀行が中央銀行の任務を持つて兌換券を發行し、一九三九年十一月三十日現在の紙幣流通高は二億二百萬比弗で、一人當り八比弗前後である。一般金融機關は未だ整備されて居らない。

因に日本と佛印との平均爲替相場は左の通りである。
(百圓に就き)
一九三三年 五三九ピアストル 一九三四年 四六七
一九三五年 四四一 一九三六年 四八九
一九三七年 七三・四

三 産業と資源

からカンボチャ平原に連り、更に安南の高台からトンキンのソンコイ川流域の平野まですべて米作地である。前者は西貢港より輸出されるにより西貢米といひ、後者はこれを東京米と名付ける。各州産米高の總産米高に對する割合は、交趾支那四〇%、東京二七%、安南一六%、カンボチャ一二%、ラオス五%となつてゐる。而してトンキン地方は二回作、中には三回作の所もある。

護謨 護謨樹は一八九七年に始めて佛蘭西人に依り移植されたもので、その栽培は最初から氣候、土壤が護謨に適してゐる上に近代的農業方法を以て發足した爲、一九〇六、七年頃から急速な發展を遂げ、馬來、蘭印、セイロンに次いで世界第四位の産額を誇つてゐる。主たる産出地は交趾支那の東北部、カンボチャの東南部及び安南の南部で、栽培總面積の七七・四%は交趾支那に集中し、二一%はカンボチャが占めてゐる。

玉蜀黍 米と共に土人の主要食糧であり、また輸出も米に次いで居り、佛本國にも相當輸出されてゐる。メコン河沿岸カンボチャが主たる産地で、近年は品質改良その他政府の増

佛領印度支那篇

産政策により著しくその産額を増加してゐる。

佛印主要農作物植付面積及生産高

作物	一九三六年			一九三七年			一九三八年		
	植付面積 (千ヘクタール)	産額 (千キントナル)	植付面積 (千ヘクタール)	産額 (千キントナル)	植付面積 (千ヘクタール)	産額 (千キントナル)	植付面積 (千ヘクタール)	産額 (千キントナル)	
米	五、四六〇	六〇、四六二	五、六四四	六三、一六二	五、五〇〇	六三、〇〇五			
護謨	二二七	四一、三三四	二二七	四三、三七七	一	五七、九〇〇			
甘蔗	八、五三三	九、三三六	九、三三六	△三、六六九	四				
砂糖	四二〇	四二〇	四二五	四二七					
玉蜀黍	三三六	四、九五六	四〇八	六、三三〇					
馬鈴薯	〇	〇	〇	〇					
珈琲	九	三	九	二六		三			

【註】△東京・交趾ノミ、×東京ノミ

(口) 鑛業

農業に次ぐ重要産業で、佛蘭西資本は最初に農業よりも寧ろ鑛山資源の開發のために投ぜられた。鑛産物としては、石炭、錫、亜鉛、タンクステン、金、鐵、アンチモニー、燐鑛石等たゞ石油を缺いてゐるのみであるが、現在開發されてゐる鑛山は、ラオスの錫を除き殆んど全部トンキンにあり、その他の地方は或は運送の困難なため、或は地質そのものゝ構成によつてトンキンの如く盛大ではない。然乍一見豊富に見えるこれら埋藏資源の利用開發は、佛蘭西が積極的に投資しないのと、一九三三年十一月制定の鑛業法に依り鑛區の所有者、占有者又は使用収益者は、個人の場合には佛蘭西人及び土民に限られ、會社の場合は、佛蘭西又は植民地に本社を有し、かつ重役の四分ノ三以上が佛蘭西市民、または佛蘭西籍民でなければならぬといふ制限がある爲め外國人は佛蘭西人又は土民の名義で取得しなければならぬといふ不便があり遅々として進まない。昭和十三年一月、臺拓は佛領印度支那

ハノイに印度支那産業會社を設立し、佛人スピラ氏と共同して東京州及び安南州の鐵鑛その他の鑛物資源を開發し、鐵鑛石を日本に輸入した。同社は資本金十萬比弗で全額臺拓出資佛蘭西商法によつて設立され、重役は全部臺拓關係の日本人である。然るに臺拓は、本年三月に至つて佛印鑛業法に依つて資本金百萬比弗の印度支那鑛業會社をハノイに設立、同社は去る六月から印度支那總督によつて、鐵鑛、マンガン鑛、クローム鑛、及び燐灰石の鑛業權享有資格を賦與された。この印度支那鑛業會社は佛印の鑛業法によつて設立された唯一の日本人經營の鑛業會社で、自己の名義で鑛業權を有してゐる。かくて印度支那産業會社と佛蘭西人との共同事業だつた鑛山事業は印度支那鑛業がこれを引継ぎ、印度支那産業會社は一般輸出入貿易、特に鑛石の輸出を行ふことゝなつた。佛印の主要鑛産物生産高は左の通りである。

佛印主要鑛産物生産高及輸出高

生産高	一九三七年	一九三八年	一九三九年
-----	-------	-------	-------

佛領印度支那篇

石炭	無煙炭(千瓩)	普通炭(同)
石炭(千瓩)	一、五八六	一、五八六
亞鉛	一、五八六	一、五八六
錫	一、五八六	一、五八六
金	一、五八六	一、五八六
海鹽(千瓩)	一、五八六	一、五八六
亞鉛	一、五八六	一、五八六
錫	一、五八六	一、五八六
金	一、五八六	一、五八六
海鹽(千瓩)	一、五八六	一、五八六

石炭 石炭の生産高は從來百五、六十萬瓩から百七、八十萬瓩に上つたが、一九三九年には二百萬瓩を超え、其三分ノ二以上が輸出に向けられた。主たる仕向先は日本、支那、佛本國等にして我國に於ては夙にホンゲル炭の名稱を以て知ら

れてゐる。炭田は埋藏量百五十億噸乃至三百億噸と稱せられ、トンキンのソンコイ川の河口に近い海岸から奥地にかけて厚さ三十尺乃至五十尺の水平厚層をなして地表近く帯狀に連り所謂露天掘である。ホンゲイ炭の炭質は東洋一といはれ、世界においても有数の良質炭であることは周知の通りである。

錫 石炭に次ぐ印度支那の重要資源にして、トンキン奥地の支那の廣西省との國境に近いカオ・バンの西五十軒附近にも産するが、其主産地はラオスのカンモン地方であつて、泰國境のタケークの東北にあるナム・パテーヌの溪谷をその中心地とする。産出高は近年一千噸を降らず、一九三九年には千五百噸に達した。現在採掘されてゐるものは極く一部分であり、而も最近の高相場の爲め良鑛採掘は行はれず、一般的に貧鑛採掘が行はれてゐる。而して之等の錫鑛の殆んど全部は馬來に移送せられ、此處で精煉の上歐米市場に供給せられてゐる。

錫の副産物としてのタングステンも亦重要鑛産物の一たるを失はず、年産三百噸に及んでゐる。

精米業が最も活潑に行はれ、工業に於て支配的地位を占める華僑に依つて獨占せられ、彼等は佛印精米所の少くも六割五分を所有すると言はれる。その他醸造業特にアルコール製造、製糖業等は漸次盛況に向ひつゝあるがその製造機構はまだ何といつても、時代遅れの域を脱し得ない。セメント工業は、トンキン地方に優良なる原料石灰石が出る爲め比較的發達し、一九三五年には製造高の約三〇%を輸出してゐる。

佛印工業生産高

	一九三六年	一九三七年	一九三八年
土人用酒精(千頭)	二七三	二九〇	四〇三
精製糖(噸)	九、九七	一三、六四	一五、〇六
紙卷煙草(〃)	二、〇八三	二、七八	三、〇一一
歐洲流に加工したる煙草(〃)	六	元	三六
セメント(千噸)	一四九	二三五	二六六
燐寸(百萬箱)	二二三	二七九	三〇四
爆竹及花火(噸)	三五七	五四六	四七八

(二) 林業

佛領印度支那篇

亞鉛 トンキンのソンコイ川左岸の石灰石層中に存在し、シヨイ・ヂヤンをその中心地とする。一九二六年頃には年産二萬五千噸を超えてゐたが、一九三〇年には年産一萬五千九百噸となり、その後更に減少して最近では五千噸臺である。亞鉛鑛は大部分領内に於て精煉せられて塊若くは錠の形で主として佛國、日本へ輸出されてゐる。

鐵は未だあまり開發されてゐないが埋藏量は甚大なものらしく殆んど全土から採掘されてゐる。最も有望とされてゐるのは、カンボチヤのコンボントムの北方七十キロのプノンデツクの鑛床と、トンキンのタングエン鑛床とである。

其他鑛産物として重要なものは金で廣く到る處で採掘され、産出金額に於ては最近寧ろ亞鉛を凌駕して、錫に次ぐ地位に在る。

(ハ) 工業

印度支那の工業は未だ幼稚にして見るべきものなく、専ら國內消費向に應じてゐるに過ぎず、僅かな近代工業を除けば家内手工業が各地に散在するに過ぎない。主要工業としては

印度支那總面積の五割七分、四千三百四十萬ヘクタールは大森林である。領内氣候は一般に雨量多く、長期に亘つて溫度が大であり、湿度は一般に高いため、植物の繁茂には絶好の條件を備へてゐる。現在伐採開發中の面積は四十八萬九千ヘクタールで交趾支那がその過半を占め、材種は建築用材、家具用材として適するものだけでも約八百種に達し、特にチーク、リム、トラク等が重要である。

佛印主要林産物生産高及輸出高

	一九三五年	一九三六年	一九三七年
木 材(千立方米)	五二七	六〇〇	
薪炭材(千ステール)	一、三六	一、四八	
木炭(噸)	四、七四	三、七六	
(輸出高)			
チーク材	一、七四	二、一四	二、三〇
樹脂、コロフォニウム	八〇二	六七九	八三四
ステイツクラツク	二五一	三三八	三五七
ベンジヨワン護謨	六七	二〇	六九

佛領印度支那篇

其の他の優良材	一、八四一	一、〇〇〇	一、六三〇
香 木	七二	五八	四八
普 通 材	九〇〇	一、三三三	一、三、〇〇一
木 炭	三、〇〇〇	二、五五〇	四、八二〇
アモーム及びカルダモーム	三三三	六五四	五〇三
蘭、藤及び竹	六〇九	三七〇	六〇八
ク ナ オ	二、三七七	二、〇七九	二、一〇三
マ チ ン	七八一	七五五	九二〇

(木) 水産業

海岸線の延長二千七百軒に及ぶ爲め魚族は甚だ豊富であるが、漁法は頗る幼稚であり、東洋有数の豊漁場を擁しながら、一般海上漁業は殆ど廣東方面よりジャンクに乗つて出漁する支那人漁夫に獨占され、安南人漁夫は海岸からせいぜい一千米以内の沿岸において小規模の漁業を行つてゐるに過ぎない然し漁撈法の改革と組織的漁業の發達を見る際には、當國漁業も亦著しき發展を期待することが出来る。殊にこの土地の土人は獸肉を食はず、魚類は米と共に必需食料となつて居

り、乾鹽魚の需要頗る大である。

四 外國貿易

(イ) 貿易額

佛印の外國貿易は歐洲大戰を契機として進展し一九二七年五十五億九千九百萬法の最高額に達したが、其後世界的不況に依る購買力の減退等の爲に不振を続け、一九三三年には十九億二千五百萬法に激減するに至つた。然し乍ら一九三五年以降顯著なる恢復を示して、一九三九年には五十八億六千六百萬法に達し一九二七年頃の好況時を遙かに凌駕し、輸出は一九三三年以降一九三九年迄に二四三%、又輸入も一六一%の増大を示してゐる。由來佛領印度支那は出超を常態として一九三九年の如き輸出増加の顯著なる結果として出超額は十億法に達してゐる。

佛印累年貿易額

(單位百萬法)

總額	輸 出	輸 入	出 超
一九二六年	五、三六六	三、一二四	二、二四〇
一九二七年	五、五八六	二、九八三	二、六〇三
			三、六〇三

となつてゐる。即ち輸出割合は一九三五年著減を示した後、大體毎年平均してゐるが、一方輸入の割合は變動甚しく、一九三七年には六三%となつたことは注目すべき現象である。印度支那貿易の國別分布に於ては前述の如く佛本國が輸出及び輸入とも壓倒的地位を占め、之に次いでアジヤ諸國で、亞米利加及び阿弗利加方面との貿易は僅少である。

佛印國別貿易額 (單位百萬法)

佛 國	一九三七年	一九三八年	一九三九年
獨 逸	一、九五五	一、三四六	一、五八〇
英 國	六四二	三七八	一三〇
和 蘭	三四六	五九五	一三〇
支 那	三三六	三三〇	一七〇
香 港	二五八	七六〇	一七〇
蘭 領 印 度	二九四七	二八〇	三〇八〇
日 本	三三八	二七三	三八〇
	二〇八六	八七〇	一、二二〇

(ロ) 國別貿易

一九二九年	五、一五二	二、六一六	二、五七三	三、八〇
一九三二年	二、〇〇五	一、〇六九	九七六	七九三
一九三三年	一、九三二	一、〇四一	九〇七	一〇三二
一九三四年	一、九七四	一、〇六六	九四三	一四六三
一九三五年	二、一九七	一、九八三	九〇四	三九六七
一九三六年	二、六一四	一、六八一	九九五	七〇二四
一九三七年	四、一五五	二、五九三	一、五六二	一、〇〇〇
一九三八年	四、七〇四	二、八四〇	一、九一六	九七六
一九三九年	五、八六八	三、四八八	二、三八二	一、一〇三

佛領印度支那は關稅制度上準本國としての取扱を受け、本國及アルゼリヤとの貿易は相互的に無稅であり、外國よりの輸入に對しては最高最低の複關稅制度を採つてゐる關係上、本國及び植民地特に本國偏重の貿易關係にあることは當然である。佛國及び植民地向輸出の割合は累年擴大せられ、一九二七年の二一・三% (内佛國二〇・三%) より一九三九年の三七・三% (同三二%) となつて居り、輸入に在りては一九二七年の五・三% (内佛國四・五%) より一九三九年五九% (同五六%)

佛領印度支那篇

佛領印度支那篇

佛領印度支那篇	(輸 入)		
	一九三七年	一九三八年	一九三九年
比 律 賓	八	110.0	
タ イ	118	113.7	
新 嘉 坡	118.8	276.6	356.0
米 國	180.1	248.8	418.0
其 他	331.1	377.5	362.0
合 計	2,540.0	2,847.7	3,495.0
佛 國	1937年 835.5	1,056.6	1,411.0
白耳義ルクサンプール	257.7	232.2	232.2
英 國	333.3	625.5	670.0
和 蘭	101.1	75	670.0
支 那	114.5	103.5	106.0
香 港	135.4	143.4	164.0
英領印度	437.7	553.3	110.0
蘭領印度	666	839	105.0
日 本	482.2	55.5	400.0
タ イ	331.1	360	400.0
新 嘉 坡	580	636	101.0

(ハ) 品別貿易

印度支那は原料國である關係上その對外貿易商品も一般農産物、食糧品、原料品を多く輸出して、工業品、精製品を多量に輸入してゐる。即ち一九三六年に於て輸出の七〇・九%は食糧品にして、原料品が二七%を以て之に次ぎ、完製品が二一・%であり、輸入に在りては完製品六一・五%、原料品二五・五%、食糧品一三・四%の割合となつてゐる。

輸出 輸出の大宗は米にして一九二七年頃には輸出總額の六五%を占め、其後減退してゐるが尙一九三八年には三六%に達してゐる。米に次いで玉蜀黍、護謨、石炭、魚類、錫等にして一九三九年輸出總額の五九%を占めてゐる。

アルヂエリヤ	31.0	39.4	48
チ ュ ニ ス	31.0	31.1	
其他阿弗利加	8.0	10.11	
米 國	53.0	103.11	99.0
其 他	63.4	99.4	
合 計	1,562.3	1,968.8	2,311.0

米の主要輸出先は支那、香港、佛本國にして日本への輸出は一九二八年以降激減し、一九三五年には僅かに〇・二%を占めるのみである。支那への輸出は一九三五年特に著しき増加を示せるのみで、香港及び佛國が常に二大市場をなしてゐる。

玉蜀黍は主として佛本國に輸出され、その他魚類は新嘉坡及香港、錫鑛は新嘉坡、錫は佛國及米國等に輸出されてゐる。護謨の輸出先の主なる國は米、佛、新嘉坡、獨逸、日本、支那と言ふ順であるが、最大仕向國は米國で一九三九年には全輸出量の二分の一強の割合を示してゐる。

佛印の石炭生産額の大半は輸出されて居り、その中日本向輸出が首位を占め、一九三八年四千二百萬法、一九三九年五千一百萬法と云ふ數字を示してゐる。輸出先は極東地方に限らず遠く北米、歐洲にも及んでゐる。

佛印主要品國別輸出額 (單位百萬法)

米	一九三九年	一九三八年	一九三七年
佛領印度支那篇	1,366	1,010	1,028

佛 國	351	533	555
支 那	83	18	113
香 港	17	16	31
英 印	258	17	3
玉 蜀 黍	345	51	47
佛 國	22	476	449
新 嘉 坡	16	11	50
米 國	405	334	167
日 本	4	3	50
護 謨	956	62	466
佛 國	331	179	108
新 嘉 坡	166	11	50
米 國	405	334	167
日 本	4	3	50
石 炭	154	133	91
佛 國	20	33	24
支 那	41	34	13
日 本	51	41	41
金 屬 類	131	100	80

佛領印度支那篇

水産物	七	八	七
果實及種子	三	七	元
鳥卵	四	六	四
茶	七	三	七
セメント	七	三	七
木材	元	三	八
其他共合計	三、四九	二、八四	二、五九

輸入 主要輸入品は綿織物を第一として麻織物、金屬製品、機械類、鐵鋼、礦油、棉花、紙、自動車、葡萄酒等にして、以上十品のみで毎年の輸入總額の約六〇%を占めてゐる。其他化學藥品、人絹織物、ミルク、護謨製品等亦主要輸入品であるが、最近に於ける人絹織物の輸入増加は顯著なるものがある。

綿織物の輸入は常に第一位を占め一九三六年には輸入總額の一三・六%を占めてゐる。これを國別に觀れば、その九割以上は佛本國よりの輸入にして、之に次いで佛領各種民地支那等である。この點將來日本綿織物の進出餘地多大なるも

のある譯である。

麻織物の輸入は大部分麻袋で、新嘉坡からのものが大部分を占め、香港が之に次いでゐる。礦油は工業原料品として重要輸入品となつて居り、毎年第二位を占めてゐる。蘭領印度よりの輸入が九割近く、米國が之に次いでゐる。

金屬類の輸入は佛本國が第一位に在り、遙か下つて英米獨等の諸國が續き、日本よりの輸入は微々たるものであるが、向後この種工業品の輸出は日本として相當進出の餘地ありと思はれる。

金屬加工品の輸入に於ては、佛本國が絶對的地位を占め、英、米、獨等が之に次いでゐるが、問題にならない少額である。

佛印主要商品國別輸入額 (單位百萬法)

綿、麻織物	一九三九年 五三六	一九三八年 四七	一九三七年 七二
佛 國	三三三	三三六	二七七

自動車	七四	五	六
飲料	五九	五	三
煙草	四	四	三
其他共合計	二、三六	一、九六	一、五三

五 日本と佛印との貿易

遠く安倍仲麻呂に其の交渉を發し、近くは豊臣、徳川時代の朱印船貿易、日本人町の建設と華々しき過去を持つた兩國關係は、寛永年間家光の鎖國令により遂に之等の有力なる經濟關係が潰滅するに至つた。其の後三百數十年を経て明治時代となり、海外發展氣運の勃興と共に、南洋方面への我が國經濟勢力も大いにその實力を發揮するに至つたが、印度支那政府當局のその排他的本國偏重の貿易政策に依り我が國の對佛印進出は振はなかつた。即ち日本は明治二十九年の本格的な日佛通商條約締結の際、佛印をもその適用範圍に加へられなき旨を請したが目的を達せず、その後、機會ある毎に、屢々、これが交渉を繰返したが成功せず、日本品は長い間最も

佛領印度支那篇

印度	六	三	二
新嘉坡	五	三	三
日本	一	三	六
金屬類	三〇	一九	二八
佛 國	三三	三	七
英 國	一八	九	八
支 那	七	四	〇
米 國	五	四	七
金屬加工品	二七	三	六
佛 國	三二	五	三
獨 逸	八	九	八
英 國	三	〇	二
米 國	九	三	三
日 本	一	三	二
織維類	二九	七	五
棉 花	一〇三	九	三
石油及精油	八	七	七
紙及紙製品	七	七	七
化學製品	七	七	七

不利な待遇をうけてゐた。更に昭和三年七月二日附大統領令を以て新關稅法を制定し一層高率なる關稅の大改正を行つた本關稅率が所謂キルシエ關稅率と稱せられるもので、當時無條約状態にあつた我が國はこれに依つて決定的な打撃を受け夫までも萎縮状態にあつた我が國の輸出貿易は益々沈滞し縮少される一方であつた。しかし、昭和七年五月十三日、はじめて通商協定が成立し、この協定に依り、日本の輸出品は最低稅率又は中間稅率の適用をうくることとなり、他方佛印の石炭、亞鉛礦は日本に無稅で輸入され、玉蜀黍、護謨、漆、棉花、亞鉛、コブラ、蔴、莞及び葦、籐、チーク材の諸品は、關稅上の最惠國待遇を約束されることとなり、愈々わが對佛印輸出貿易も軌道に乗つたかに思はれたが、その效果は、僅かに一年餘で消滅し、昭和八年下半年期には、早くも邦品に對する不合理なる壓迫が加へられはじめた。即ち邦品の課稅標準たる評價を過大に見積り、從價稅品として苛酷な課稅を行ひ、或は關稅率適用項目の不明瞭を口實に、頻々として適用項目を變更し、遂に昭和九年下半年期における佛印關稅率の一般

的改正に際し、昭和七年の協定に指定せられてゐる必需品を除く大部分は、協定の實益を失ひ今日に及んだ。

佛領印度支那對日貿易額 (單位百萬法)

年	輸出	輸入	合計
一九二七年	二九四・〇	六七〇	三六一〇
一九三三年	四二二	一九三	六四五
一九三四年	四〇九	三三三	六三二
一九三五年	五四一	二六三	八〇四
一九三六年	七八三	三三八	一一二九
一九三七年	一〇八六	四八二	一五六八
一九三八年	八七〇	五五五	一四二五
一九三九年	一六二〇	四〇〇	二〇二〇

佛印對日主要品別貿易額 (日本よりの輸入)

品名	一九三八年		一九三七年		一九三六年	
	數量 (百担)	價額 (千法)	數量 (百担)	價額 (千法)	數量 (百担)	價額 (千法)
薄荷	八	二七	三	二九	一	三〇
香水	二	三	二	二九	一	三
植物性タール	—	—	二	三	一	二
樟腦	三	四〇	二	七〇	一	三三
朝鮮人參	〇	六	一	五	二	二九
朝鮮人參以外の根	〇	—	—	—	—	—
築材	二四	二二	三七	二二	八七	一六
綠綿	一五、九六	一三、〇八	二二、八九	八、二九	一六、九〇	八、三五
生野菜	七、四二	八四九	六、〇〇	四三	二〇、四五	七、五
鹽漬野菜	二四	四	六	〇	七〇	六
トマト罐詰	—	—	—	—	—	—
其他野菜罐詰	二	—	三	二	三	—
干野菜	一	—	一	—	—	—
寒天其他海藻	一四	二七	四二	四七	八六	七〇
葦(干推葦)	二七	四九	一九	三三	五三	三六
麥酒	一四七	二七	二六	二六	二八九	二
工業用砂礫	二	〇	三	三	九七	七
セメント	—	—	—	—	三八八	三
硫黃	三四	六	一九	一九	二四七	一五

蟹類罐詰	三	八	三	三	三	三
海參	三	三	六九	四二	八五	四〇
魚の油脂	〇	〇	—	—	三五	三
麥粉	—	—	二五	七	一〇七	七
栗	二七	六	三	二	四	七
馬鈴薯	三、七八	二、五九	二、九〇	一、二四	二、七九	八
オレンヂ	三	九	八	一七	三四	九
林檎	一、三六	二四	二、九八	三五	二、七五	七
梨	二四	二	三五	五	一、〇〇	九
桃	二六	一四	七	五	三〇	五
柿	三七	二	五	一〇	二八	五
大豆	四	一	二〇	一	—	—
糖菓	一四	二	三	六	四	五
ビスケット	二	二〇	一五	三	—	〇
ジャム	三〇	一七	五	一八	五	一
チョコレート	〇	〇	八	八	二	—
チョコレート入り菓子	七	一〇	三	二	四	—
茶	七	九	二、五七	一、五八	三、一五	二
揮發性油	二〇	一五	四〇	一八	二四	七

佛領印度支那篇

石	炭	二五、四五一	一、五五二	一九七、七六	八〇、二〇、三〇九	六、五八
コイル	ター	六、六九〇	四、六二	八、五五八	四〇、三	九、四八八
重油		一〇、一	一、四	二、七	一〇	五
アスファルト	八〇、一九〇	四、七八一	四、八、二四九	一、五八一	四、四、三七九	一、一〇、三
アスファルト	以外の屑油					
ブリキ板		〇	〇	五九	二	一四
針金		二、五四	三、九	二、七、六三	一、二、一六、四二	一、二、四二
錫箔				七、五	四	一、六四
硫磺				一、七、七	二〇	一、六三
アンモニア					三	〇
硫酸安母尼亞				一、七、五〇	二、一、二、一九一	二、四七
硼酸				〇	四	一
硼沙				三	一	〇
臭素		三、八	四		〇	一
鹽酸	加里	七、五二	八、九	五、九、九	五、五、五	四、三、四
鹽化石灰					〇	三、五
商業的に純なる硫酸		五、四七	七〇	三、六四	二、四	二、八九
其他調味料						一、六
陶磁器硝子類	九、三、四一	三、一、三〇	一、六、九、六	四、一〇、三	一、三、三、七	二、八、六、七
絹類						
絹糸	八、〇	七、九、九	一、四、一	九、九、八	四、一	二、三、三
ガニイバツグ				一、八	二、八	三
綿布				二	二	三
絹及人絹織物	二、〇、四	二、六、四	四、九、三	五、六、三	四、五	二、二、九
人絹織物	九	二、〇〇	五	三、九	一、三	七〇
婦人服及其附屬品				〇	一、九	二、九、四
ネクタイ				〇	二	七
其他の衣服及下着類				〇	九	二
紙類				二	三	六
レターペーパー				一	四	三
一及封筒等				二	二	六
句装に用ひたるボール紙	一、三〇	二、九	二、四	四、八	二、六、五	六、五
カレンダー	廣告等	五	八	二	四	三
婦人帽用革バンド	六	三、七	三、五	八、四	一〇	三〇
モロッコ革製品	五	二、三	六、七	二、九	八〇	九、一

佛領印度支那篇

其他の酸	一、八、七、七	二、三、一	六、三、九	五〇	一、二、三	五
明礬		二	三、五、七	二、九	八、六、八	三〇
硫酸銅		一	八	二	五	一
酸化鐵		三	七	三	二	一
硫酸鐵		一、三	一、四、七	九	三	二
苛性曹達			一、八、九	三、五	二、七	三
粗製曹達					〇	〇
精製曹達		一〇、一	九	五	一〇	〇
重炭酸曹達		一、七、九	二、五	二、七、三	六、六、二	三、三
ナフタリン		五	二	三、二、一	五、九	五、六
ピツチ	八、八、〇、五	三、九、九	二、六、八、三、六	二、九、五、六	四、四、三、六	五、八
窒素肥料				一〇	一、五、五	八、三、九、九
石灰窒素	一〇、二、五	一、〇、二、五	二、三、六、四	一、五、五	八、三、九、九	四、九
其他の化學藥品	三、三	一、八、一	一〇	六	四	二
殺虫劑(蚊取)		二、三、三	一、七、一	三、四、〇	二、四、〇	二、九
線香(其他)			四	一〇	五	七、七
顔料(オーカー色)	三	三	一〇	五	七、七	八
酒精を含む化粧品	一	一	九	六	八	一〇、一
酒精を含まざる化粧品	八	三	七	七	一〇、一	七
ソース		二、四	五	二、五	九	二、六
手提靴	〇	六	五	二、六	二〇	五
革帶	一	七	六	二、二	七	二
擬貴金屬裝身具	七	二、六	九	二、八	五	二
洋傘金具	七	八	一、八、七	三、三	一、八、九	五
珐瑯鐵器	二、五	一、四、〇	二、五、八	六、四、三	一、六、〇、八	四、三
眞鍮製ランプ	九	三	五、六	八	七、六	七、五
乾電池並に部分品	四	三	四	二〇	九	三、八
白木箱	〇	〇	一	〇	二	〇
絲卷	三、七	二、八、七	三、七	二、六	七、七	二、七
茶護謨等の包	一、八、九、四、五	五、一、〇	二、六、一、四、八	四、〇、三、六	一、三、四、八、八	一、〇、五〇
裝用ベニア板	一、八、九、四、五	三、三	一、四、二、八	一、四、七	七、一	五
其他木製品	六、一〇	八、三	一、四、二、八	二、四、七	七、一	五
蓄音器	四、二	一、三〇、一	二、八、五	三、七、九	二、四、一	一、〇
レコード	二	八	四	九	九	一〇
麥藁、木枝眞田	吳	四	五、三	二	二、四	一
帽子用眞田	一	一	一、四	二	一〇	三
柳其他纖維製明籃	一、八	二、六	一、五、七	一、一〇	二、七、八	九、八
護謨タイヤ	三〇、一	五、四、五	三、七、六	五〇、四	四、七、四	四、八
護謨底靴	六、八	三、三	一〇、一	三、三	五、七	三
萬年筆類	一	一〇	二	七	一	三

セルロイド製パイプ	一	七	一一	五〇	一	二
齒刷子	二	三	五	二六	三	二
其他刷子	一	七	五	二六	四	五
セルロイド製玩具	〇	四	七	一四	四	八
護謨製人形	〇	一	〇	一	〇	〇
其他の玩具	三	一九	三三	五七	二〇	三〇
金屬製玩具	〇	〇	二	六	二	一
ライター	〇	〇	二六	五四	〇	〇
(日本への輸出)						
牛皮	七	五	二四八	一五	一八	七
玉蜀黍	一四、一三	三、六四				
米				五、二〇三	二、八七五	
棉の種子				六二	三〇	
カボックの種子			五、五七五	二六四	五、五七六	二二
松脂等の樹脂	五、〇八	四三	六、五八七	三九三	六、二八三	三〇
格魯般						
漆	二、五〇	八、六七				
テレベンチナ精	〇	〇	三九	七	一	一

珐瑯鐵器類、ベニア板函等の減少が目立つてゐる。

魚類罐詰は、罐詰材料騰貴の爲、現在では一般大衆の購買力薄れて振はず、本邦産果實は熱帯性氣候に依り保存不可能で腐敗し易く邦人商社筋も之を敬遠し従つて輸入は減少を見ている。

茶の輸入減少は排日貨運動にも依るが、課税改正により販賣價格の昂騰を見た爲である。麥酒は税金の高いものにも依るが一方自國生産品が大量に生産され來つたことに歸因してゐる様である。

硫酸安母尼、明礬、ピッチ、石灰窒素の輸入減少は、本邦輸出力の減退に因る。非金屬製品（眼鏡、手持鏡、巻煙草入、蓋口、金銀鍍小細工品等を含む）は、主として本邦の統制に依り金物類の價格騰貴の爲、原價より賣捌き難くなつた事に歸因する。

調味料の輸入減少に關しては、當該品中の味の素が一九三二年當初の日本對佛印の暫定協定に依れば調味料として認められて居つたのが、一九三八年より化學製品として見做され

護謨	二、七九	三、一八五	五〇、三三三	五〇、二九一	五、五六一	三、四一〇
チーク材	六七七	五	一、一五〇	一三	七〇〇	二
棉	一、二〇八	一八七	三、六八五	七三	二、四四三	一八
葡萄酒	四	一	一四	五	七	三
硅砂	六八〇、五六	七四八	一、五三三、五七六	一、五八二	〇一七、一八	一、四
石炭	六、七〇、四六二	一、七二五	八、〇七六、〇〇〇	四、三三三、七	〇一七、〇一七	三、三、六四
古鐵類					三六、七元	六三
鐵鑛					一一、五〇	二〇
亞鉛鑛						
マンガン鑛					四、九〇	一六
其他の鑛					一〇〇	〇
鹽	六五、三九一	三、八八四、七九、四〇	一、九九七、三〇〇	一、五〇三		
合成藥品					〇	〇
ベニア板函	六五四	一、七	三、〇八五	二、六	三、六九	二六
日本よりの輸入						
上記の如く對日輸入品中、近年の傾向として魚類、麥粉、果實、糖菓、茶、寒天其他海草類、麥酒、針金、ブリキ板、硫酸安母尼、明礬、ピッチ、石灰窒素、蚊取線香、非貴金屬細工品、調味料、陶磁器硝子類、洋傘金具						

従つて高率の關稅率を賦課せられることとなり、調味料の輸入はシャツ・アウトされることとなつた爲である。即ち一九三七年までの味の素の輸入税は、一函に付き九弗六九であつたのが化學藥品となつてからは、百四十弗四一と狂騰してゐる。

排日貨運動により最も手酷い打撃を受けたものとして日用品の陶磁器、硝子類がある。本品の輸入價格は大ではないが、在留邦商の約八割を占むる雜貨商にとつては相當な打撃である。珐瑯鐵器、護謨底カンバス靴、セルロイド製パイプ、刷子、玩具等この輸入減少は、稅率の改正によるものであつて、雜貨商の多い邦人筋としては、之等の輸入減少は一大痛撃である。

輸入増大を示したものは、馬鈴薯、繰綿、野菜、石灰、アスファルト、鹽酸等がある。

日本への輸出 印度支那より日本へ輸出せるもの、中最近減少してゐるものは、牛皮、米、カボック種子、護謨、チーク材、葡萄酒、硅砂、石炭、古鐵、マンガン鑛、鹽等である

佛領印度支那篇

これは日本が輸入防遏措置を採つてゐることに依るが、寧ろ佛本國の國防上の理由に依り軍需資財の第三國への輸出を差控えたことに依るものである。

之を要するに、日本對印度支那貿易は累年不振化傾向を辿つて來て居り、日本としては貿易統制の強化、印度支那としては、輸出の一部禁止乃至は抑壓、更に又高率關稅の賦課、その他排日貨運動の諸要因が、貿易不振の原因をなして來たのである。然乍第二次歐洲大戰勃發に伴ふ客觀情勢の變化は佛印當局者をしてその對外貿易政策上百八十度の大轉回を餘儀なくせしめられるに至つた。

尙本邦より見たる對佛貿易統計は左の通りで日本側に取り累年膨大なる入超となつてゐるが畢竟印度支那高率關稅制度の爲である。南洋市場一圓に亘つて日本雜貨がその品質優秀且低廉の故を以て確固たる販賣を持つてゐるに反しこの印度支那に於ては逐年日本商品の後退を餘儀なくさせられて來てゐることは寔に遺憾なことと言はなければならぬ。

本邦對佛印累年貿易額 (單位千圓)

輸 出	本邦對佛印品別貿易額 (單位千圓)	
	一九三九年	一九三八年
一九一三年	一、〇五五	二四、七〇〇
一九二五年	四、〇二七	四八、七二九
一九三〇年	二、四二二	七、八七七
一九三五年	四、〇一〇	一五、〇一〇
一九三六年	四、六九七	二〇、一五一
一九三七年	四、六三四	二七、〇二二
一九三八年	三、一八三	二〇、三〇一
一九三九年	一、九六一	二六、六五一
入 超	二四、六七〇	二四、六七〇

佛領印度支那篇	
油脂蠟及同製品	一五
徑 腦	四三
薄 荷 腦	二
蚊 取 線 香	一九
燐 寸	七
藥材、化學藥製藥其調合品及爆發藥	一七三
染料顏料塗料及填充料	一三八
生 絲	一八一
絲縷繩索及同材料	一八三
綿 織 物	三三
絹織物(綿入を含む)	三四
布張及同製品	八九
衣類及同附屬品	一三
石 炭	二八一
礦物及同製品	二九
陶磁器(食器)	一三五
魔 法 織	二六
硝子コップ	二六
硝子食器	九
眼 鏡	一八
硝子 鏡	五
陶磁器硝子及硝子製品	三
鐵 釘 類	二
珐 瑯 器	一
傘 骨	一
其の他の金屬製品	一〇三
金 屬 製 品	四七
蓄音機(部分品及附屬品を含む)	七五
自轉車ゴムタイヤ及インナーチューブ	一
自轉車部分品及同附屬品	一
紡績機(部分品及附屬品を含む)	〇
織布機(部分品及附屬品を含む)	七
時計、學術器、鐵砲、船車及機械類	一〇七
箱、樽 用 板	二五三
花 筵	八
護 謨 製 品	一
其の他の雜品	二七
雜 品	三〇五
一九三九年	二五
一九三八年	二五
入 超	二五

佛領印度支那篇
(輸入)

	一九三九年	一九三八年
米及粗	—	—
玉蜀黍	一、九七〇	一、九五五
胡椒子	—	九
穀物、穀粉、澱粉類及種子	七、五七〇	一、二〇〇
食鹽	一、四八八	一、五八八
飲食物及煙草	一、四九〇	一、五三三
牛皮及水牛皮	〇	一四
皮毛骨角齒牙甲殼類及同製品	〇	一四
植物性芳香揮發油	五	二
油脂蠟及同製品	五	六
インディアラツパー 及ガタバーチヤ(生)	四〇五	一、三六四

松脂	一二三	一七三
其の他の藥材、化學藥 製藥其の調合及爆發藥	一〇	二
藥材、化學藥製藥其調合品及爆發藥計	五三三	一、五四一
漆	九八〇	一、三三三
染料、顔料、及填充料	九八〇	一、三三三
棉花	一〇	二元
絲縷繩索及同材料	一〇	二元
石炭	一三、E〇〇	一三、〇九
其他礦物及同製品	一四、一六一	一三、六七
鐵及金屬	一、六八四	一、八四四
雜品計	—	二〇
(註) — は不明	—	三

英領馬來來篇

一 英領馬來と日本との關係

世界有數の仲繼貿易港新嘉坡を擁する英領馬來と日本の經濟的關係は第一次歐洲大戰により可成確固と結ばれたが我進出の餘りに急調であつたが爲めに遂に一九三四年六月二十四日附官報布告を以て、日本製織物の輸入制限を目標とした織物輸入割當法の實施を見ることとなり、爾來兩者の經濟關係は著しく歪曲された。加へて支那事變の發生は英領馬來在住華僑を著しく動搖せしめ、或は邦品排斥となり或は鑛山從業労働者の罷業となる等我が國としては好ましからざる風潮を生ずるに至つた。

一九三九年の馬來の對日貿易は七千六百萬弗にして馬來買

英領馬來來篇

易に於ける日本の分け前は輸出八・五%、輸入一・九%に過ぎず、累年日本側の入超に終つてゐる。馬來よりの輸入がその世界的生産物たるゴム、錫を初め鐵鑛石、燐鑛石、礦油等近代工業並に軍需資源として多量の需要を有するものであるに拘らず、日本の馬來向輸出の大宗たる綿織物並に人絹織物が極度の輸入制限を蒙つてゐる以上日本側の逆調も亦己むを得ざる次第である。我が國の對馬來關係はかゝる貿易交渉のみでなく、馬來に於ける本邦人の活動に於ても亦注目されねばならない。即ちその活動範圍はゴム及椰子栽培、鐵鑛探掘並に漁業であるが、鐵鑛探掘は我が鐵鑛資源確保上、ゴム栽培事業と共に特に重視さるべく、漁業も亦我海外事業の一として見逃すことの出来ぬものである。

然るに昨年には新嘉坡近海に於ける日本人漁夫の漁業許可證取消問題が発生し、本年五月には歐洲大戰の爲めにせよ廣汎なる輸出入制限が施行され、剩へ最近には新嘉坡軍港の英米共同基地論さへ放送され、我が馬來への關心は經濟的にも政治的にも一段と昂揚されて來た。英本國と濠洲、新西蘭或は香港を繋ぐ馬來の地理的重要性、米國が高度に依存する馬來ゴムの國際的重要性から見て、今後馬來の動きが愈々微妙複雑化し、馬來を挿む英米樞軸と我が國との立場が對立關係に置かれんとすることは不可避の形勢にある。軍事的無能力の馬來が本國の趨勢に順應することは勿論であるが、地理的經濟的に嚴として東亞共榮圏の一環をなす馬來の對日關係がその軌道に復歸することの一日も速かならんことが要望されるのである。

二 概 況

位置 所謂英領馬來とは馬來半島の突端部の中、北緯六度四三分から新嘉坡の南端一度一五分に互る一小部分で、海峽

ルネイ五、七四九〇

英領馬來合計

一三七、七七六平方料

氣象 英領馬來は氣象學上印度地方の一部に屬し、一ケ年の中、十一月より三月迄を北東季節風、五月より九月迄を南西季節風の二期に分けられ、北東季節風の時期は概して雨量多く、南西季節風の時期は大體乾燥する、氣温は他の熱帶地方に見るが如く高温度でなく、陰影下に於て百度以上に上ることも稀らしく、夜分は大抵八十度以下である。

人口 一九三一年國勢調査を基礎とし、翌年より毎年の出生數、死亡數及び移入數、移出數を加減算定した結果が一九三五年末政府統計局より總人口四百六十一萬一千四百五十人と發表された。

英領馬來人口一覽表 (一九三五年)

海峽植民地	馬來聯邦	馬來非聯邦	計
馬來人 三九、二八八	六四九、四三三	一、二六、八五八	二、一〇五、五九八
歐洲人 一一、一〇〇	七、六六六	一、五七六	三、二四二
歐亞人 一、二〇、四八	四、六三三	五、四六	一七、三三八
英領馬來篇			

植民地、馬來聯邦、馬來非聯邦から成つてゐるが、嚴密な意味から云へば印度洋中にあるコ、ス諸島、クリスマス島は勿論、ボルネオに於ける英帝國領たるラブアン、同保護領たるブルネイ、サラワク、英領北ボルネオをも包括することゝなつてゐる。

面積 英領馬來の總面積は十三萬七千七百七十六平方料で我が九州、四國及北海道を合したものと略同面積で内譯左の通りである。

海峽植民地

三、五一三平方料

新嘉坡五六九平方料、彼南二八四〇、プロビンス・ウエルズレイ七五一〇、マラツカ一、六五七〇、ラブアン九〇〇〇、クリスマス島一五五〇、ココス島三〇〇

馬來聯邦

七一、三二七平方料

ペラ二〇、六六七平方料、スランゴール八、一八四〇、ネグリシビラン六、六八二〇、バハン三五、七九三〇

馬來非聯邦

六二、九三五平方料

ジョホール一八、九八四平方料、ケダ一〇、四二七〇、パリス八〇二〇、ケランタン一四、八九二〇、トレンガヌ一三、〇七九〇、ブ

支那人 六六、八四〇 七三、三三八 三四七、七六六 一、七三三、二二八

印度人 一八、八三三 三九七、六七三 一一、一一、〇〇〇 六三、八、七四〇

其他 一一、七七八 一七、〇三六 二七、七五五 五六、五二九

計 一、一四、七三三 一、八三、八八二 一、六五、七六七 四、六二、四四〇

因に一九三七年十月現在に於ける在留本邦人は一萬四千五百十九人で、會社員、銀行員、商店員、事務員等が最も多く、次いで水産業従事者、工礦業方面關係となつてゐる。

財政 資料不足の爲め近年の財政状態を詳細に知ることが出来ないが一八六七年海峽植民地が印度總督の所管を離れ植民省に移管されて以來財政的發展は順調な経過を辿り、世界恐慌發生の一九二九年には歳出入合計九千萬弗に達してゐる。爾來經濟恐慌の影響を受け財政の縮小顯著となり、一九三七年の歳入出合計は六千八百萬弗(豫算案)となつて居り、馬來聯邦並に非聯邦共略々同様な推移を示してゐる。各財政状態を示せば左の如くである。

海峽植民地	一九三五年	一九三六年	一九三七年
歳入	三三、〇〇〇千弗	三三、八〇〇千弗	三三、〇六二千弗
歳出	三四、七五〇	三四、五二〇	三四、九九〇

英領馬來篇

(馬來聯邦)		(馬來非聯邦)	
入	出	入	出
六二、三四	五二、二〇	三九、九八	三三、五八
六七、五八二	五七、三〇〇	二九、四八二	三四、五八一
三〇、〇二	二九、六五	三三、五八一	三四、五八一

(註) 一九三七年は豫算

貨幣 英領馬來は金爲替本位、嚴密に云へばスターリング爲替本位の貨幣を有し、其法定比價は海峽弗六〇弗に對し英貨七磅、即ち海峽弗一弗に付英貨二志四片換と定められてゐる。鑄貨は金貨(ソヴアレ)と銀貨が無制限法貨とされてゐるが、金貨は兌換準備用として政府に保有されて通常市場には流通せず、銀貨(一弗及五十仙)も亦紙幣による代用流通が多い。この外制限通貨として銀貨(二十仙、十仙、五仙)、白銅貨(五仙)、銅貨、紙幣がある。

正金發表による新嘉坡向平均爲替相場は左の通りである。
一九三五年 百弗に對し圓 二〇〇・四五

一九三六年	二〇一・四五
一九三七年	二〇一・八五
一九三八年	二〇〇・二〇七
一九三九年	一九六・四九

三 産業と資源

英領馬來の資源中代表的なものはゴム及錫で、共にその生産額は世界第一位にあり、馬來經濟の消長は一に國際ゴム並に錫市場の盛衰に懸つてゐる。この外農産物には米、古々椰子、油椰子、鳳梨、タピオカ、檳榔子、珈琲、茶、煙草、バナナ、デリス等があり礦産物としては金、石炭、鐵礦、マンガ、燐酸石灰、灰重石、ウオルフラム等があるが、之等は前者に比較すれば微々たるものである。

(イ) 農産資源

ゴム ゴムは馬來農業の大宗たるばかりでなく、實に錫と共に馬來經濟の生命である。資料は些か古いが一九三四年末に於ける作物別栽培面積表を一覽すれば略々その事實が判然

としやう。

一九三四年作物別栽培面積

作物	栽培面積	割合
ゴム	三、二二、二〇六エーカー	五八・八%
古々椰子	六〇五、八八五	一一・二%
米	七五、三三〇	一・五%
其他共合計	四、九七、〇三三	一〇〇・〇%

又馬來ゴムの世界に占める重要性は左に掲げる世界主要ゴム國別生産高によつても明らかである。

年	英領馬來	蘭領印度	錫蘭	世界總生産高
一九三五年	四五・六	二五・四	五三・七	八三・〇
一九三六年	三五・三	三〇・八	四九・九	一一三・一
一九三七年	四九・〇	四六・八	六九・六	一、三三・〇
一九三八年	三七・〇	二九・七	五・一	八〇・〇
一九三九年	三二・四	三七・一	六〇・七	—

即ち馬來のゴム生産高は全世界生産高の四割強に當り世界の第一位を占めてゐる。一八七七年初めて栽植されてより急

英領馬來篇

コブラ生産高

古々椰子 ゴム、錫と共に馬來三大物産の一たるコブラを採る樹で、古くより土民に栽培され、食料、飲料、燃料、建築材として廣汎な用途に供されてゐる。又輸出品としても前述ゴムに次ぐ重要農産物であるが、近年領内に於ける搾油業の發達に伴ひコブラとして市場に出るよりも油となつて出る方が多く、椰子油の輸出増に對しコブラは減退の傾向を呈してゐる。

英領馬來篇

一九三六年	七六、六二噸
一九三七年	七五、五三
一九三八年	六六、五四
一九三九年	三四、四〇

米 米は馬來半島住民の九九%迄が常食とする重要食糧品であるが生産高は消費高の三、四割にも満たず、その大部は泰佛印、緬甸より仰いでゐる現状である。昨年四月二十一日總督が國際不安に鑑み食糧統制法を公布し食糧品の生産、配給、消費部門の統制を始め以てその自給自足を圖らんとしてゐるが、米の自給自足の早急的實現は困難とされてゐる。昨一九三八—三九年度の米栽培面積は七十五萬三千二百四十英反、同生産高三十四萬一千四百五十五噸で全需要高の三四%を充たしたに過ぎなかつた。

畜産・林産・水産 畜産としては水牛、牛、豚等あるも取るに足らず、林産も全面積の五分ノ四が森林を以て蔽はれてゐるに拘らず交通機關の未發達と比較的良材に乏しき爲め振はない。

錫 鑛産物のうち最も重要なものは錫で錫鑛及精鍊錫の生産は一八八三年以降常に世界の首位を占めてゐる。

錫鑛及粗錫國別生産額

(錫 鑛)	一九三九年	一九三八年	一九三七年	一九三六年
英領馬來	五五、〇九噸	四三、二四噸	七五、五四噸	六六、八〇噸
蘭領印度	—	三三、〇四	三九、八五	三三、六四
ポリビア	—	一一、九一	二五、〇四	二四、〇七
泰國	—	一三、五〇	一六、四九	一一、六八
中華民國	—	一一、〇〇	一〇、五〇	一〇、五〇
其他共合計	—	一七、八六	一〇、二九	一〇、四〇
(粗 錫)				
海峽植民地	八三、〇九噸	六三、八〇噸	六五、二〇噸	八四、五〇噸
英國	—	三九、〇〇	三九、五〇	三九、〇〇
和 蘭	—	二六、七五	二六、八八	二二、二七
蘭領印度	—	七、四六	一三、九〇	二、九〇
其他共合計	—	一六、〇五	一九、七〇	一七、五三

以上の如く一九三六年—三八年の三ヶ年に就て見るも錫鑛並に精鍊錫共に世界第一位にあり、世界總生産額に對しても

英領馬來篇

漁業も半島周圍が淺海である爲めと馬來並に支那漁夫の漁業技術及設備の幼稚なる爲め、未だ尙繁盛と云ふ域に達して居らず、重要食糧品たる魚類の供給も不安定である。一九三九年調査による國籍別漁夫數は左の通りで遠洋漁業に従事する邦人漁夫の七百六十八人は注目に價する。

馬來 人	一三、四八人
支 那 人	一一、二七
印 度 人	一、〇〇六
日 本 人	七六
泰 人	一五二
其他共合計	二六、六一

支那事變發生以來支那人の邦人捕獲魚不買運動あり、加へて昨年には日本人漁夫の漁業許可證取消問題あり、馬來に於ける邦人漁業問題は各方面の注意を喚起してゐる。因みに一九三九年度新嘉坡に於ける鮮魚陸揚量は一萬二千八百九十噸で前年に比し千五百噸の減少である。

(口) 鑛 産 資 源

錫	一九三八年	一九三七年	一九三六年
粗 錫	三九、二%	三七、二%	三七、〇%
精 錫	三六、六	四七、九	四七、八

の如く實に歴史的な割合を示してゐる。

錫鑛の産地は聯邦州を中心とし、ペラ州を筆頭にスランゴール、パハン、ネグリシ・ピラン等に豊富である。英領馬來は自國の錫鑛を精製するのみならず、泰、緬甸、佛印、阿弗利加等より原鑛を輸入して精鍊し、嘗ては蘭印よりも多量の錫鑛を輸入したが、彼地に精鍊所の設立を見るに及んでその輸入は激減した。目下國際危局に際して錫の需要は俄然激増し特に米國の馬來錫に對する依存性は頗る濃厚であるが、之等の事項に就いては後述貿易の項に譲ることとする。

尙錫もゴム同様國際錫限産協定(一九三七年—一九四一年)が存し、生産及輸出を制限し急激な市價の動搖を防止し、併せて適量のストックを保持することとなつてゐるが、歐洲大戰に伴ふ需要の激増より見て何時迄本協定が履行されるか之亦疑問と云はなければならぬ。同協定による一ヶ年の各生



產國割當標準數量は左の通りである。

白領コンゴ	一三、二〇〇噸
ボリビア	四六、四〇〇
佛領印度支那	三、〇〇〇
マレー	七、九四〇
蘭領印度	三六、三〇〇
ナイジェリア	一〇、八五〇
泰國	一八、〇〇〇
合計	一九、八五〇

鐵鑛 英領馬來の鐵鑛資源に就ては今尙調査行届かず埋藏量に就いても諸説區々であるが、目下の處大體二億噸内外と推定されてゐる。然しこの莫大なる資源も自國にこれを消費すべき製鐵業なく、又歐米鐵鑛市場との距離大なる爲め永く其價値を認められず極最近迄採掘の機會に恵まれなかつた。是等地方の鐵鑛資源が開發せられるに至つたのは日本鐵鋼業伸張の結果で極東に於ける日本の莫大なる鐵鑛石の需要は英領馬來の鐵鑛資源を高く價値づけた。現在稼行されてゐる鐵鑛山の殆んど大部分が邦人經營であるのは如上の事實を證明

するものと云ふべく、馬來半島が製鐵用原料炭の産出を欠く以上製鐵業の發達は望み得ず、従つて馬來の鐵鑛石は技術的經濟的將又地理的條件からも全面的に日本に依存してゐると云ふも過言でない。馬來鐵鑛生産高並に馬來鐵鑛山一覽表を示せば左の通りである。

馬來鐵鑛生産高 (單位千噸)

一九三六年	一、六五四・六
一九三七年	一、六二二
一九三八年	一、六五五
一九三九年	一、九四二

英領馬來鐵鑛山一覽表

ジョホール州	推定埋藏量	採掘經營者
スリメダン鐵鑛山	八〇〇萬噸	株式會社石原産業公司
エンダウ鐵鑛山	二五〇〇	飯塚鐵鑛會社
トレンガヌ州		
ケママン鐵鑛山	二五〇萬噸	株式會社石原産業公司
ヅングン鐵鑛山	一〇、〇〇〇〇乃至	日本鐵業株式會社
ケランタン州及ケダ州		

テマンガン鐵鑛山	六七〇〇	南洋鐵鑛株式會社
ケダ州	不詳	
馬來聯邦州		
タンブン鐵鑛山	六五〇〇	
スンガイ・レロン	不詳	
ロンピン	二、〇〇〇〇	株式會社石原産業公司

以上の中スリメダン鐵鑛山(ジョホール州)は一九二一年我が石原産業に採掘權を許與せられ、埋藏量約八百萬噸と云はれるが既に三分ノ二を採掘し残存鑛量は約三百萬噸位である。ヅングン鐵鑛山(トレンガヌ州)は現在馬來で稼行せられてゐる最大の鑛山で、一九三〇年以來日本鐵業が經營に當り推定埋藏量は四千萬噸とも云ひ一億噸とも云はれてゐる。

馬來の鐵鑛石が日本に依存する程度の大なることは既述の通りであるが、新嘉坡の直接脅威下にある關係上戰時に於ける對日供給についての安全性は極めて少いと見なければならぬ。現に採掘従事者の九割は支那人で、彼等は日支事變以來、

罷業を繰り返し、一九三七年末にはスリメダン、一九三八年二月にはヅングン兩鐵鑛山の従業支那労働者は一齊に退去し、經營は可成困難に遭遇した。爾來支那人に代ふるに印度労働者を以てし先づ順調に生産が行はれてゐる。

錫、鐵を除けば金、マンガン鑛、タングステン鑛が目立つが、前二者に比較すれば尙微々たるものである。

マンガン鑛(千噸)	タングステン(噸)	金(噸)	鐵鑛土(千噸)
一九三六年	八六	一一七	一一九
一九三七年	七七	一〇七	一〇六
一九三八年	七五	一〇三	一三九

(ハ) 工業

英領馬來の工業的發展は尙新しい。即ち歐洲第一次戰を契機に漸く工業化の緒についた馬來の産業は、一九三一年就任のクレメンチ總督の「馬來の産業化」運動に伴ひ漸く本格的發展が約束されるに至つた。各種生産機械と資本とを潤澤に供給する本國と安價にして柔順なる勞働力を自由に獲得出来る馬來の工業はその素質に於て十分なる條件を具備して居り、

現在工業部門も百十有餘に上り、或る種工業に於ては完全に輸入品防遏の目的を達し自給自足の外輸出をなすものすら存してゐる。而してその主なるものがゴム、錫であることは云ふ迄もあるまい。一九三五年馬來各地工場統計は左の通りである。

海峽植民地各種工場數

炭酸水工場	一六	アタツプ工場	一三九
麵麩及ビスケット工場	八九	ブラチャン工場	七
煉瓦及石灰工場	二七	蠟燭工場	一二
指物工場	三七七	セメント工場	一
木炭焼場	一一	古々椰子油工場	一二
コブラ工場	八二	染物工場	一二
土木請負及眞鍮・鐵工場	四一	魚調製所	四八
ガムビール工場	一	ガス工場	二
落花生油工場	三	製氷工場	四
油脂工場	一	パイアツツプル鐵詰工場	四
工器製作所	二七	精米所	一二五
ゴム工場	一、二六	サゴ工場	二四

ソリス工場	二	製材所	二八
造船所	九	鍛冶場	一二五
石鹼工場	一一	精糖所	一八
タロー鑄接工場	二〇	鞣皮工場	二五
タビオカ工場	四	錫精鍊所	三
計	二、四三九		

馬來聯邦製造工場數

炭酸水工場	四	セメント工場	一
土木請負及自動車修繕所	四	製氷所	一
磷寸工場	一	ニツパ椰子蒸溜所	一
製油所	二	鳳梨工場	二
合板工場	一	精米所	一
ゴム工場	五	支那酒蒸溜所	一
馬來聯邦製造工場數			
炭酸水工場	四	煉瓦工場	二
支那陶土工場	一	土木請負所	二
製氷所	二	磷寸工場	二
椰子油工場	四	鳳梨工場	六
印刷工場	一	ゴム工場	一四〇

製材所	四	タビオカ工場	一
茶工場	一	精米所	一七
支那酒蒸溜所	一	木彫金屬細工及籐細工場	一
カツチ工場	一二	銀細工所	六
眞鍮細工所	二	織物工場	二

四 外國貿易

馬來自體の外國貿易構成は頗る簡單であり、一言以て盡せばゴム及錫の輸出とこの輸出の大小に應ずる先進諸國よりの工業製品の輸入と云ふ點に歸することが出来るが、仲繼貿易の點からすればその内容も頗る複雑したものとなる。然し乍ら馬來自體の貿易と仲繼貿易を區別することは殆んど不可能に近く、馬來の對外貿易はその純貿易を超過する仲繼貿易を含んでゐる點を前提として考慮しなければならぬ。

(イ) 貿易額

馬來の貿易はゴムの栽培並に錫鑛の採掘が開始されて以來初めて本格的發展を示したもので、栽培及採掘の歴史が新しただけにその貿易の發達も最近の事である。貿易額が急激に

増加したのは第一次歐洲大戰によるゴム及錫の需要激増に基くもので、一九二〇年には二十二億九千四百萬弗と戰前の八億六千八百萬弗の二倍半に達し、爾來好調を持續して一九二六年には二十三億二千三百萬弗と最高調に達した。然るに一九二九年の米國の經濟恐慌に發端する世界恐慌に捲き込まれ一九三二年の如きはその貿易額七億四千六百萬弗に激減し、一九二六年の三分ノ一にも及ばなかつた。近年は漸次貿易額も恢復し昨年度には十三億七千八百萬弗となり、更に最近は第二次歐洲大戰によるゴム及錫の需要を映して著しく活況を呈してゐる。

英領馬來年貿易額

(單位千弗)

年	輸出	輸入	總額
一九一三年	三六八、九三〇	四七九、四五五	八六八、三八五
一九二〇年	一、〇四四、〇四八	一、二〇〇、三三三	二、二四四、三八一
一九二五年	一、二八九、八八五	一、〇〇八、〇三三	二、二九七、九一七
一九二六年	一、一七三、四七四	一、〇九〇、一一一	二、二六三、五八六
一九三〇年	六七三、三三四	七二六、二二六	一、三八七、五三〇
一九三二年	三六六、三〇一	三八〇、三七八	七四六、六七九

英領馬來篇

一九三五年	五八、九三三	四七五、四八八	一、〇五七、四五一
一九三六年	六二七、七六一	五〇三、〇三四	一、一三〇、七六六
一九三七年	九〇五、〇五五	六九八、四三五	一、六〇三、五三〇
一九三八年	五八、五五四	五五九、四二〇	一、一四〇、六四四
一九三九年	七五〇、一九四	六三八、一四三	一、三七八、三三六

(口) 品別貿易

ゴム及錫の輸出と先進諸國よりの工業製品の輸入、換言すれば再輸出の爲めの蘭印物産の輸入、再輸出を含む米國へのゴムと錫の輸出、英國及び日本よりの日用品の輸入、在住移民の消費を目的とする支那及び印度よりの多額に上る雜品類の輸入から成つてゐる馬來の貿易は世界經濟の動搖を強く反映し貿易額の著しき増減を呈するとは云へその構成内容は甚だしき變化を示してゐない。最近二ヶ年の品別貿易を示せば左の通りである。

重要商品輸出額

(單位千弗)

米	一九三九年	一九三八年
白米	一〇、二六一	一三、四〇五
米	八、一三〇	一一、三一一

其他共合計

七五〇、二四四

五八一、五五四

(輸出) 輸出の大宗は云ふ迄もなくゴムと錫で一九三九年ゴムは馬來の輸出總額七億五千萬弗に對し、三億七千七百萬弗

乾 糧 魚	七、五七七	七、四六八
パイナップル	九、九八八	七、二六三
アレカナット	九、五五六	一〇、四四六
鐵 鑛	九、一五七	七、三三七
コ プ ラ	一〇、四六八	一、一四九四
ココナットオイル	七、三三六	五、六四七
バームオイル	五、九八八	六、二四〇
ゴム及ガタバーチヤ	三、七七一	二、七五五
パ ラ ゴ ム	三、五九六	二、三三三
ラ テ ッ ク ス	一、六、四三二	八、六六七
錫(塊、棒、スラフ)	一、五八、三〇四	九六、三三九
礦 油	五、四、三〇四	五、六、五九九
燈 油	一、一、八〇三	一、二、一六八
液 體 燃 料	六、九八三	八、三三八
ガ ソ リ ン	三、四、七二四	三、五、四九七

(五〇・七%)、錫は一億五千八百萬弗(二一・一%)、之等二商品で全輸出額の七割強を占め、次に蘭印よりの仲繼貿易品たる礦油の五千四百萬弗、コプラ、米の各一千萬弗が續き、其の他では鐵鑛、パイナップル等が先づ目星しいものとなつてゐる。

ゴム 輸出貿易の約五割を占めるゴムはゴム工業の發達と國際情勢の緊張の爲め著しく需要を喚起し、一九三九年の輸出は三億七千七百萬弗と前年に比し優に一億圓を増加するの活況を呈してゐる。而してその最大の顧客は米國で一九三九年にはゴム(ドライ)總輸出額三億五千六百萬弗の中一億九千六百萬弗、五五%が米國向となつてゐる。

米國の馬來ゴム依存度の如何に高率であるかは左表によつても明らかである。

馬來ゴム對米	米國ゴム
輸 出 高	消 費 高
一九三八年	一九三八年
三〇、一五噸	四三、七、一〇〇噸
一九三九年	一九三九年
二八、七、五三	五七、七、八〇〇

米國のゴム生産自給率は僅に六%に過ぎずと云はれて居り、従つて

英領馬來篇

右表により察知せられる消費の不足量は殆んど蘭印より供給されるものと見て差支なく、米國のゴムと南洋とは全く不可缺の關係に置かれてゐる。

米國向を除いては英本國、佛蘭西、日本、加奈陀向の順で最近二ヶ年の主要國へのゴム輸出高は左表の通りである。

日 本	一九三九年	一九三八年
三、六三、三〇弗	一、七、四三、二〇弗	
英 國	四、三、四三三	四、七、七六七
加 奈 陀	二、〇、五七三	一、一、五五三
佛 蘭 西	二、九、九三三	三、四、六三三
獨 逸	二、四、四三	一、一、二、三六
伊 太 利	八、三〇九	一、三、四八六
米 國	一、九六、一〇四	一、〇八、八四三
其他共合計	三、五、六、四九五	二、六、八、六四

錫 ゴムに次ぐ重要輸出品で一九三九年度輸出額は一億五千八百萬弗、輸出總額の二二%を占め前年度に比較し五千一百萬弗を増加しゴムと共に時局に伴ふ需要の急増を物語つてゐる。最大仕向先は米國で輸出總額一億五千八百萬弗の中一

億九百萬弗、六九%を占め米國の自動車工業其の他一般工業の錫需要の大なることを示してゐる。然し乍ら米國の馬來錫に對する依存度は事態の急迫に伴ひ南米ボリビアに市場を轉向することも不可能でないの、ゴムに比較すればその割合は小さいと云はれてゐる。主要仕向國別輸出額は左の通りである。

	一九三九年	一九三八年
米國	一〇九、五五九千弗	五三、五九千弗
英國	一、〇七	六、四六二
印度	六、五五	四、一七九
佛蘭西	一〇、六七	六、二七
伊太利	二、三四	三、八六
其他共合計	一五八、三〇	六六、三九

礦油 輸出全額の上からはゴム及錫に次ぐ重要商品であるが、輸出入の両面から見ればその殆んど全てが蘭領印度産油の再輸出であることがわかる。

礦油 輸出入額

	一九三九年	一九三八年
輸出	五四、三四千弗	五六、五九千弗
輸入	九〇、〇三	八三、六九
コブラ		
輸出		
輸入		
重要商品輸入額	一九三九年	一九三八年
米	五四、三三	五四、〇元
白米	三九、一〇	四一、五二
魚類(罐詰類を含む)	九、五三	九、八六
乾鹽魚	九、〇三	七、五四

馬來の輸入貿易は既述の通り先進諸國よりの工業製品の外に集散途上に於ける蘭領印度、泰、緬甸、その他近隣諸域からの原料品の輸入を以て構成されてゐる。之を商品別に見るとゴム(合ガタバーチヤ)、鑛油を大宗とし錫鑛、米、綿製品、鐵鑛及同製品、機械類、煙草等の順序となつて居り、過去二ヶ年の輸入額を示せば左の通りである。

重要商品輸入額

(單位千弗)

	一九三九年	一九三八年
煉乳	一〇、一六八	九、七四
砂糖(除糖蜜及キャンデー)	一三、八三	六、八九
煙草	一六、六四八	一七、六四
紙卷	一五、四四	一六、二二
錫	五六、三七七	三〇、五八
コブラ	七、四六	六、八六
ゴム及ガタバーチヤ	二四、七九	七六、八七
鐵鋼及同製品	二、三六	三、六三
機械類	一八、一〇三	二二、〇六
綿糸及同製品	三三、四九	二五、四〇
綿織物	一五、三三	一八、四六
化學藥、醫料藥品、染料、塗料	二、三二六	一一、八九
鑛油	九〇、〇三	八三、六五
自動車	七、八六	七、八六
其他共合計	六八、四二	五九、四〇

ゴム(合ガタバーチヤ) 一九三九年の輸入額は一億一千四百萬弗で輸入總額の二八%、前年に比較し三千七百萬弗の激増を示してゐる。主要仕向國は蘭領印度で殆んど二分ノ一を占

め、以下泰、サラワク、佛印、緬甸の順となり、之等は何れも輸出の項に述べた如く大部分歐米諸國に向つて再輸出される。鑛油 ゴムと共に馬來の仲繼貿易の地位を明らかにしてゐる商品で、一九三九年輸入額は九千萬弗で輸入總額の二四・三%を占めその大部分が蘭領印度より、一部がサラワクより輸入されてゐる。

錫鑛 一九三九年の輸入額は五千六百萬弗、總輸入額の八九%を占め、この地で精煉の上歐米各國に輸出されてゐる主要仕向國は泰、佛印、緬甸である。

米 一九三九年、米の輸入額は五千四百萬弗で馬來の主要食料品の對外依存度の高率にあることを示してゐる。

綿製品 一九三九年の綿製品輸入額は二千三百萬弗で輸入總額に占める割合は三・七%、前年の二千五百萬弗に比較し二百萬弗の減少となつてゐる。主要仕向國は英國で日本並に印度が相匹敵して之に次ぎ、香港よりも多少輸入されてゐる

が、之等の事項に關しては馬來の對日貿易の項に於て述べる
こととする。

鐵鋼及同製品並機械類 之等重工業製品の大部分は英國より
一部が米國、獨逸より輸入されてゐる。一九三九年度輸入額
は鐵鋼及同製品二千一百萬弗、機械類一千八百萬弗である。

以上の外煙草が英國より多量に輸入されてゐる。之等商品
の仕出に關する一九三九年度の統計は尙入手出來ないので參
考迄に一九三八年度に就いて示す。

一九三八年英領馬來主要國別輸入額 (單位千弗)

ゴム(ドライ及ウェット)	七四、三〇〇
蘭領印度	三九、三七
佛	一八、三六
緬甸	八、三九
ガソリン	四、七六
蘭領印度	三、九〇
イラン	二、一七
液體燃料	一九、二六
蘭領印度	一七、五五
サラワク	一、六八
佛	三、七
印	三、七
サラワク	四、七六
米國	二、〇〇

燈油	一六、一五	サラワク	五、〇七
蘭領印度	一〇、五八		
錫	三〇、〇五		
佛	二〇、八七	緬甸	五、〇八
泰	二、三九	日本	—
米	五、〇二		
緬甸	一五、九八	佛	一、四八
泰	三、六〇	印	—

(ハ) 國別貿易

英領馬來主要國別貿易は左表の通りで、一九三九年度の輸出
では米國向が三億二千一百萬弗、輸出總額に對する割合は四
二・九%でゴム及び錫の需要増大によりその割合は益々増大
せんとしてゐる。英國向は八千一百萬弗、一〇・八%で遙に
米國に及ばず、日本向は六千四百萬弗、八・五%の中鐵鑛が
大なる部分を占めてゐることは産業と資源に於て述べた通り
である。日本に次いで佛蘭西向の四千二百萬弗、蘭領印度
向の四千萬弗であるが、何れもその輸出總額に對する割合は
五%餘で小さい。

一方馬來の輸入は仲繼貿易の特性を遺憾なく發揮し、一九
三九年には蘭領印度よりの一億九千四百萬弗(總輸入額に對す
る割合は三〇・九%)が筆頭を占め、ゴム、錫、礦油類の再輸出過程に於ける
馬來の地位を物語つてゐる。第二位は泰國よりの一億五百萬
弗(二六・八%)、第三位は英本國よりの九千萬弗(一四・四%)
で、この兩者は前年度と地位を顛倒した。第四位は英領サラ
ワクよりの三千五百萬弗で、以下支那、米國、印度、濠洲の
順となり、日本よりの輸入は一千二百萬弗(一・九%)で第九
位となつてゐる。即ち馬來の輸入貿易は蘭印と英帝國、其の
他の諸國で略三分の形である。

英領馬來主要國別貿易額

(單位千弗)

(輸出)	一九三九年	一九三八年
日本	六四、二七	五三、八七
蘭領印度	四〇、八一	四〇、八九
米國	三三、九五	一七、七三
英國	八一、一四	八二、〇三
泰國	一四、四〇	一四、四〇
佛蘭西	四二、五三	四三、五三
英領馬來篇		

濠洲	二〇、八四	二六、六九
サラワク	一〇、八七	八、七九
印	二六、四三	三三、六九
獨逸	七、四七	一八、三二
支那	三、八九	三、五六
其他共合計	七五、二四	五八、五四
(輸入)		
日本	一一、四八〇	一一、四三六
蘭領印度	一四、二四五	一五、三三九
米國	一八、三〇六	一七、二五
英國	九〇、八九七	一〇一、三三三
泰國	一〇五、五二八	八七、八八一
佛蘭西	二、五三八	三、〇八一
濠洲	一七、四六八	一三、〇八四
サラワク	三三、三三三	二四、一三五
印	一八、一七	一六、二五九
獨逸	八、一八	一一、一八〇
支那	三三、九六	三三、九〇
其他共合計	六三、八、一三	五五、九、四〇

五 日本との貿易關係

馬來の對日貿易は第一次歐洲大戰を契機として發展したが大戰後は今日に至る迄目星しき發展もなく、總額は七千乃至八千萬弗で、一九三九年に於ても馬來の外國貿易に於ける日本分け前は輸出に於て八・五%、輸入に於て一・九%に過ぎず、之を日本側から見ても對馬來貿易が我が外國貿易に占める割合は一九三九年に於て輸出〇・五%、輸入三・七%と頗る低率で兩者の依存關係は一見薄弱である。

英領馬來對日貿易額 (單位千弗)

Table with columns for Year, Export (輸出), and Import (輸入). Data points range from 1930 to 1936.

Table showing trade balance for British Malaya from 1937 to 1939, including columns for Total Export (總輸出額), Total Import (總輸入額), and Balance (對する割合).

日本の馬來に對する輸出の核心をなすものは綿糸及綿製品羊毛製品、絹糸及絹製品、人絹糸及人絹製品等の纖維製品で之等で馬來に對する輸出總額の二分ノ一近くを占め、綿製品が壓制的優勢を示してゐる。元來馬來が英本國紡績業の獨占市場であつたことは想像に難くないが、一九二九年以降に於ける世界恐慌期を通じての日本品の進出は特に著しく、馬來輸入綿布に對する日英兩國製品の分け前は全くその地位を逆轉

した。

(無地物)

Table comparing UK and Japan trade figures for 1929 and 1933, including percentages.

英本國が自國製品擁護上織物輸入割當法を施行(一九三四年)するに至つたのもかゝる事情の下に於ては自明の理であつた。同法によつて我が綿製品が如何に甚大なる打撃を被つたかは左表によつて明らかであらう。(單位千ヤード)

日本よりの輸入実績 日本への輸入割當量

Table showing import statistics for various goods like cotton, silk, and wool from 1933 to 1936.

英領馬來對日重要商品輸入額 (單位千弗)

Table showing import values for rubber and tin from 1939 to 1938.

英領馬來篇

Large table listing various goods (e.g., tin, stone, wool, silk) and their trade volumes between 1937 and 1939.

英領馬來篇

【註】括弧内は英領馬來總輸入額
英領馬來對日重要商品輸出額

(單位千弗)

一九三九年

一九三八年

鐵	鐵		
屑	鐵		
マンガン	鐵		
ウオルフラム	鐵		
(タングステン)			
列記されざる鐵物			
ダ	マ	五三(一、三七九)	三九(一、二二三)
ガタ	バル	一五(一、二三六)	四(八九三)
ゴ	ム	三、六三(三、四九四)	一七、四〇(一、六三三、九三三)
ゴ	ム	一七三(一、六四二)	一八(八、六六)
ゴ	ム	乳	液

燐	酸	石	灰	一、八八三(二、二四三)	一、四四(二、〇五七)						
夜	光	貝	及	高	瀨	貝	八七(一、八二)	九四(二、〇八)			
カ	ツ	チ		三(五、四)	二六(五、二)						
ガ	ン	ビ	ル	キ	ユ	ー	ブ	三(七、七)	一三(六、九三)		
ト		バ		九七(五、〇)	一〇(三、八)						
錫											
キ	ニ	ー	ネ	及	キ	ニ	ー	ネ	鹽	一五(一、五七)	一(一)
催	滑	油		三(一、七八)	六(六、三)						
ベ	ン	ヂ	ン	一〇、四六(三、四、七、四)	一〇、四八(三、四、九、六)						
テ	レ	ペ	ン	油	六(三、八)	四(三、二)					

【註】括弧内は英領馬來輸出總額

泰 國 篇

一 東亞共榮圈と泰國

慶長年間(一五九六年—一六一四年)長崎の商人津田又左衛門、或は一世の奇傑山田仁左衛門長政等により關係づけられた日泰兩國は、その後も東亞の友好國として堅く結ばれて來たが、昭和十一年泰國よりマヌダン内相の來朝あり、之に對して我國は安川雄之助氏を使節團の代表として泰國に送り、爾來日泰兩國の關係は愈々友好の度を加へ本年六月遂に日泰友好條約が締結され、更に日泰間の定期航空の開始により兩者の關係は地理的に、時間的に一段と深められることとなつた。泰國はその地理的條件から英佛勢力の抑壓を受けることと久しく、經濟的にも外國資本特に英國資本が勃興の機運にある泰國産業を制壓し、之が爲め泰國独自の發展を期するこ

とが出来なかつた。

之等の情勢に反撥して泰國内に國家主義の擡頭を見るに至つたのは蓋し自然の勢で今や英、佛兩國自體が根底から顛倒せんとしてゐる時、彼等の束縛より脱するには實に絶好の機會と云はねばならない。

日泰の間の經濟的關係を見るに、一千九百三十九年我が泰國向輸出は二千六百萬圓、泰國よりの輸入は五百五十萬圓程度で、輸出入額はこゝ數年、遺憾乍ら年毎に減少を示してゐる。此の貿易額は兩國の關係から見ても好調とは云へないが、豊富な資源を包藏し、技術と資本の必要を痛感してゐる泰國と我國との經濟關係は今後大いに増進するものと考へられる。

今回泰國より親善使節團にアン・プロミヨテイ氏の一行を

迎へることゝなつたが、我々は一行がよく世界の形勢を察し、新しく展開しつゝある東亞の使命を洞察し、東亞共榮圈建設のため緊密なる協力を惜まざらんことを望むものである。

二 概 況

面積 泰國は印度支那半島の中央に位する獨立國である。

國土は北緯約五度半より二十度半、東經約九十度半より百五度半の間に存在し、總面積五十一萬八千方料で、我國の七〇％に該當する。泰國は地勢上大體北部、中部、東北部及南部(半島部)に四分されるが、北部地方はメナム河上流の山岳地帯であり、中部は豊饒なる平原と暹羅灣の東岸を包括する。東北部は大高原地帯にして林産資源に富み、南部半島地方は鑛産資源特に錫鑛が豊富、而して中部平野地方は米の產地にして國內米生産の中心をなしてゐる。

氣候 全土が熱帶圈内にある爲に、氣候は常夏である。而して印度洋西南季節風の影響を受けて例年五月中旬—十月中旬迄の雨期と、其後六ヶ月の乾期に分かれ、雨期には殆んど

り、半島地方には印度人及馬來人あり、更に安南人、ビルマ人等があつて、彼等が相互に或は支那人と混血し人種的に頗る雜多となつてゐる。従つて泰國内に使用される言語も暹羅語、ラオ語、馬來語等であるが、暹羅語が廣く國語として使用されてゐる。

泰國人口一覽表

種族	人口	%
暹羅人	10,912,100	91.2
支那人	442,774	3.9
印度人及馬來人	379,268	3.3
カンボヂヤ人及安南人	25,929	0.2
シヤン人及ビルマ人	3,385	0.03
歐米人	1,920	0.01
日本人	295	0.002
其他	87,433	0.8
計	11,806,109	100.0

(註) 一九二九年國勢調査に據る。

財政 泰國の財政狀況は比較的健全である。然し一九三〇年以降世界的不況の爲め一九二七—二八年度を最高として歳

連日數回の激雨があるが乾期中は晴天にして殆ど降雨がない。乾期には日中室内華氏九十六—七度で、特に百度を超えることもあるが、雨期に入ると温度は漸次低下し殊に十二月の東北季節風の吹き初める時には青空晴れて日本の秋冷を想はしめるものがある。

人口・人種 一九三九年の泰國々勢調査によれば總數一千四百四十六萬四千人、密度は一平方料當り二十八人弱で極めて低く、産業不振の原因ともなつてゐる。

泰國人は自國を稱して「ムアン・タイ」と呼ぶ。自由國の謂であるが、此の「タイ」とは通稱暹羅國人と云はれてゐるタイ族を意味する。而して現在東部諸州に在る「タイノイ」即ち小タイ族と、メナム流域に住する「タイカイ」即ち大タイ族に分かれ、兩民族は今日では風俗習慣も異り全く異民族の如くになつてゐる。大タイ族は支那人、印度人の血を享けてその感化を蒙り、泰族の特色を失つてゐるが、小タイ族よりも知能に秀で暹羅國民の中核となつてゐる。

泰族の外に北部地方に少數のラオ族、シヤン族の部落があ

入の減少を示すに至つたので、政府は一面増税、新税の設定等による歳入の増加と他面歳出に於ける各種經費の節減を以て歳計の均衡に努力した。近年に於て歳入不足を生じたのは一九三一年—三二年度のみで之は革命勃發の影響と見られてゐる。

泰國政府通常歳計 (單位千銖)

年度	歳入	歳出	差引差額
一九二七—二八年度	127,443	127,392	51
一九三一—三二	80,548	89,022	(8,474)
一九三二—三三	79,522	70,133	9,389
一九三三—三四	83,000	75,000	8,000
一九三四—三五	74,467	74,467	0
一九三五—三六	85,761	85,949	(188)
一九三六—三七	101,061	100,977	84
一九三七—三八	104,821	104,821	0
一九三八—三九	109,425	109,327	97

(註) 一九三七—三八年度以降は豫算

貨幣 泰國に於ける金融機關の特色として先づ擧げなければ

ばならない點は、中央銀行の組織がなく大藏省が自ら紙幣を發行し、同時に民間金融も行つてゐることである。

泰國の銀行としては一九〇六年國王の特許の下に設立せられた暹羅商業銀行（英國系資本）と一九一三年四月開設を見たる國庫貯蓄銀行（Siamese Treasury Saving Bank）の二行があるだけである。

泰國の貨幣制度は從來銀本位制であつたが、一九〇八年以降金本位制を採用し、一九二八年四月現行貨幣法の制定を見るに至つた。現在の貨幣單位はバート（Baht）又はチカル（Tikal）にして、金バートは純分〇・六六五六瓦、一磅が十バートの割合となつてゐる。英國の金本位停止後はバートは一時弗リンクしたが、一九三二年五月泰國の金本位離脱と共に、其の對外價値は再び一磅・十一バートの割合に復歸した。

現在の通貨は殆んど全部大藏省發行の紙幣にして一九三六年末流通高は一億四千萬バート、準備は銀四千三百萬バート、外國證券（主として英貨證券）一億一千二百萬バートである。

・一%で我國に於ける明治初期の狀況に酷似してゐる。泰國の經濟基礎が依然として農業に置かれてゐることは、斯く明らかであるが、天然條件が農業に好適であることが泰國農業の發展に大に寄與してゐるのである。農産物中の主要なるものは米、煙草、玉蜀黍、棉花、大豆、胡麻、胡椒、護謨等である。

米 泰國農作物中主なるものは米である。米は國內需要を充足するのみでなく、その剩餘部分は輸出され國際收入の大支柱となつてゐる。その産額は一九三九―四〇年度五百八萬三千廬で、作付面積は總農産作付面積の九割以上を占めてゐる。穀倉地帯はクルンテープ、アユタカー、ナコン、チャイシー、ラチャブソー、ナコン・ラチシー、マピサスロークプラチンブリーの七州で、就中アユタカーはその中心をなしてゐるが、生産方法は未だ原始的である。

一九三九年泰米の輸出量は豫想外に多く百八十二萬餘廬に達し、最近五年來の最高記録を示現した。歐洲戰爭の勃發により、英、獨各國競つて食糧の貯藏を實施し、極東に於ても

る。紙幣の外には硬貨としてバート銀貨、五〇及二五サタン銀貨、ニツケル貨及銅貨があるが、紙幣及バート銀貨は無制限法定通貨となつてゐる。

因みに正金調査になる日泰爲替相場は左の通りである。

一九三六年	百銖に付	一五八・四九七
一九三七年	〃	一五八・六九七
一九三八年	〃	一五九・〇六三
一九三九年	〃	一五八・三七〇

三 産業と資源

泰國産業は工業、金融、交通、貿易等一部英國勢力を除くの外は他に對抗的勢力なく、殆んど華僑の獨占となつてゐる。當地華僑を事業別に見ると商業は最も多く七割以上を占め、鑛業は之に次ぎ二割、農業は一割以上である。

(イ) 農 業

泰國の主産業を職業構成から考察すれば八三%が農業、林産業に従事し、商業は六・七%、工業關係三・四%、水産一

新嘉坡を始め、日本、印度も盛に買付けを急いだが爲めである。泰米が世界に占める地位の如何に重要なかは左記二表により明かであらう。

世界の米産額（籾の重量、單位 千廬）

英領印度	一九三一年	一九三七年	一九三八年	一九三九年	一九四〇年
緬甸	四、四四四	四、八三〇	三、六四五	三、五三三	三、五三三
印度支那	七、一九六	七、九三七	八、六六九	七、一〇九	七、一〇九
蘭領印度	六、三三六	六、三〇八	七、二二〇	一、〇三九	一、〇三九
泰（暹羅）	五、九二七	五、九四二	—	—	—
比律賓	三、三〇〇	四、五五六	四、五三四	五、〇八三	五、〇八三
英領馬來	二、四二二	二、四六六	—	—	—
亞細亞計（其他共）	一、〇七〇	一、〇七〇	—	—	—
米 國	八、七三〇	八、七三〇	八、四〇〇	—	—
伯刺西爾	一、一〇九	一、〇八九	一、〇九一	一、〇六八	一、〇六八
マダガスカル	一、〇五〇	—	—	—	—
埃及	六、六〇〇	六、四〇〇	—	—	—
佛領阿弗利加	六、九三三	三、七三三	—	—	—
伊 太 利	四、三三三	四、三三三	—	—	—
伊 太 利	七、三三四	一、九七七	八、八	八、八〇〇	八、八〇〇

泰國 篇

ソ 聯 邦 一 三三三
 世界計(其他共) 三、七〇〇 三、九四〇 九、二〇〇 九、〇〇〇
 (註) 一九三九—四〇年に於ける印度支那の産額は安南及び東京

列國米輸出量

	一九三七年	一九三八年	一九三九年
印度支那	一、三三七	一、〇一一	一、四三二
緬甸	七三九	二、八六二	三、四三四
泰(暹羅)	一、五五九	一、四八八	一、八三九
英領印度	七三九	二、九四	三、〇一
英領馬來	一、四一	二、〇九	一、四七
米國	一〇六	一、四八	一、四八
埃及	一五二	五	三
伊國	一三七	一五九	一四〇
伯刺西爾	三	五	五
世界計(其他共)	八、七三七	六、五九八	八、二〇〇

(註) 何れも白米に換算せるもの

護謨 泰國に於ける護謨栽培の沿革は近年即ち一九〇八年以降の事に屬する。華僑は泰人と共に半島の極南部及び東南

により將來百萬俵の繰棉生産を目論んでゐる。

胡椒 泰國は古來優良胡椒の産地として名を歐洲に馳せたことがある。現在の産地は東南部のチャンタプリー地方で全産量の九割を産出する。一九三七—三八年の植付面積は四千八百七十一ライ、産量は三千二百五十擔である。

煙草 泰國國民は煙草を嗜好するが、外國煙草の輸入の比較的に早かつたこと、並に英米系の煙草企業が提携して政府の煙草專賣を妨げた爲め尙自給自足する程度に至つてゐない。一九三七—三八年の作付面積は六萬六千ライ、生産額は十三萬三千擔である。

玉蜀黍 玉蜀黍の栽培は全國至る所に行はれ、一九三七—三八年の作付面積は五萬四千ライ、産額八萬三千擔と泰國農業部門に於て可成重要な地位を占めてゐる。米と共に上下一般の常食に供される。

以上の外甘蔗、大豆、茶、胡麻等何れもその産額は豊富であるが、勞力、資本、技術の缺除と英國の泰國産業開發に對する不當なる干涉の爲め充分なる發達を遂ぐるに至つてゐな

部で之が栽培を開始し、一九三四—五年の護謨園數は五萬三千三百三十五、植付面積七萬三千ライである。又一九三五年に於ける護謨栽培業者は五萬百九十二人で、内馬來人三萬人以上、泰人一萬七千人を占め華僑は五千餘人で僅かに一〇・八%である。

泰國の護謨生産高は左の通りである (單位 千英噸)

一九三三—三四年	一九三六—三七年	一九三九—四〇年	一九四一—四二年
四〇・〇	四〇・〇	四〇・〇	五四・五

(註) 一ライは我が一段六畝四歩

棉花 古來泰國人は自作棉による綿布を用ひ、餘剩棉花を支那、緬甸等に輸出した時代もあつたが、其後近代化された外國製綿布に壓迫され、棉作と家内工業的織物業は衰微するに至つた。現在棉花栽培地方は東部と北部で、一九三七—三八年の栽培總面積は五萬ライ、産額十一萬八千擔である。多角の農業經營の必要を痛感した泰國は近年棉作還元を期すべく我國より農事顧問を招聘し棉作の可否を検討した結果、百萬町歩以上の棉作可能な地を得る事が判明し、施肥法の改良等

い。主要農産物の作付面積並に生産高を示せば左の通りである。

各種農作物作付面積

	一九三三—三四年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
米	二二、一〇、六七	一〇、三三、三〇〇	一一、〇六、三六九
煙草	五三、六八〇	五五、六四〇	六六、三七八
玉蜀黍	四六、〇六七	三八、七五九	五四、五七九
棉花	三三、六六五	四三、〇四六	五〇、一六九
豆類	二二、二四	二九、九〇九	六六、九八七
胡椒	六、〇二五	五、二六一	六、〇八〇
胡麻	七、三三七	七、七四〇	四、八七一
ココナツツ	三三、九六五	三三、二二六	三三、二二〇
米及ココナツツを除外した小計	五〇七、八八三	四九八、〇〇一	五六四、一六四
同小計の米收穫を百とする指數	二、四二	二、四二	二、六八

各種農産物生産高

	一九三三—三四年	一九三六—三七年	一九三七—三八年
米	六、七八三	五、六三〇	七、五、九二八
煙草	一、三三	一、二六	一、三三

玉蜀黍	七四	七四	八三
棉花	三三	六六	二八
豆類	七二	八二	二四三
胡椒	一五	二二	二二
胡椒	三	三	三
ココナツツ	一五、二五八	一五七、九三	一、〇〇、九四
米及ココナツツを除く小計	三六九	三七四	五九三
同小計の米收穫を百とする指數	〇、四七	〇、六七	〇、七六

(口) 牧畜

泰國では從來役牛の外は食用としての牧業はなかつたが、近年華僑の貿易業者、商人、労働者が全國に亘り豚、家禽を食用する慣習を廣らしたので、現在は全國至る處に華僑の手で養豚業が行はれてゐる。之が屠殺は、泰人は佛教の信仰から行はないので華僑が之に従事し、その肉は國內消費の外之を新嘉坡、彼南、蘭印、支那等へ輸出してゐる。

(ハ) 鑛業

泰國の鑛業は錫に盡きると謂へる。錫鑛業の開拓者は華僑

で稼行の記録は十五世紀で、錫鑛は半島至るところ酸化錫として花崗岩及び一部は花崗岩の混入する水成岩を含む酸性岩脈並に石英雲母岩層に現はれてゐる。併し現在經濟的に採掘される産出地は英領馬來の國境の風化鑛床及び沖積鑛床に限られてゐる。

年産額は左表の通りで國內で精鍊設備を缺くため鑛石は其のまゝ大部分は英領彼南、新嘉坡に送られる。

泰國錫生産高	(單位噸)
産額	産額

一九三五年	九、七七九	一九三八年	一三、五二〇
一九三六年	一二、六七八	一九三九年	一五、二〇〇
一九三七年	一六、四九四		

錫は米に次ぐ泰國の重要輸出品であるが、現在は國際協定によつてその生産を制限されてゐる。

(ニ) 工業

泰國輸出の九割以上が原始生産品であるに反し、輸入の七割以上が消費財に屬する製品であることは工業の發達してゐ

ない證左である。主要工業としては華僑の獨占業である精米を首位とし、製材業を擧げ得べく、其他燐寸、製氷、製油、蠟燭製造、石鹼製造、製糖、製菓、製革、パイナップル罐詰業、煙草製造、金屬品製造、染色業、織布業、家具製造業、瓦及煉瓦製造業、金銀細工業、川舟製造業、化粧品製造業、乾電池製造業、清涼飲料製造業發電業等があるが何れも規模は小さい。

精米業 精米業は一八五五年盤谷のメナム河岸に設立された蒸汽精米所(一九三八年燒失)を濫觴とし、爾後首都にその數を増加した。初期は白人殊に獨逸人の勢力範圍であつたが、事業自體が簡易で必ずしも高度の技術と大資本を要しない關係があり、世界大戰に泰國が聯合國側に參加した爲めに華僑の手中に歸し、爾後交通の發達、華僑の人口膨脹、生産費節約等の事情から漸次奥地に進出したのである。

現在本業は首都精米所の中、東亞公司所有のもの、少數泰人所有のものを除けば悉く華僑の經營に係り、又泰人所有のものもその賃借經營には華僑が當り、六、七千人と云はれる勞

働者も亦悉く華僑である。精米所の數は一九二九年の調査に依れば首都八十軒で、資本金は約一千六百九十萬銖、地方精米所は泰國政府の發表に依れば五百九十三軒、資本金八百萬銖と見積られてゐる。精米能力は首都精米所は地方精米所に比して多く一日白米四千噸乃至四千五百噸である。

製材業 製材業は精米に次ぐ重要事業で、チーク製材はその代表的の大工場で行はれ、華僑は二工場を有するに過ぎず一流工場は英人を主とする白人に獨占されてゐる。只二流以下の唐木其の他の製材所は殆んど華僑の經營であり、泰人所有工場も亦經營は華僑に委託してゐる。

之等群小工場は全國に約一千程であるが、その大部分は人力に依つてゐる。首都に在るものは前記二工場を含んで八十である。

(ホ) 水産業

魚類は米に次ぐ重要な食料ではあるが、泰人は佛教信者であつて漁業に従事するものが殆んどなく、只比較的小資本で足りる淡水漁業でも安南人や同系統の者が投資し比較的大資

本を要する鹹水漁業は殆んど華僑の獨占到屬してゐる。而して一九三八年に於ける農商務省調査による推定生産額は約二千萬銖である。

四 外 國 貿 易

泰國の直接輸出入貿易に於ては白人及び邦商に讓る所あるが、此の貿易品の消費者又は生産者たる土民間との配給乃至聚貨網は殆んど華僑が獨占し、唯僅かに一部分を印度人及び泰人に委すに過ぎない。即ち華僑は獨り外國貿易の仲介業許りではなく、國內消費の土貨の仲介機構を掌握し、殊に外人商社の買辦は悉く華僑である。従つて歐米商でも邦商でも泰國に對する貿易は華僑との取引に歸着すると云ふ状態で、華僑の存在を無視しては如何に雄厚の資本と國家的背景を以てしても到底泰國に於て商業的の活動は出來ない。一九二九年調査に依れば有職業者七百五十二萬人中、商業従事者五十萬六千餘人(六・七%)で、その内九割即ち約四十五萬は華僑が占めてゐる。前述の如く直接外國貿易は英、米、佛等の貿

易業者の進出に依つて華僑は優越的地位を喪失し、現在華僑の輸入商は五十軒内外で、一ヶ年の取扱總額も二千萬銖乃至三千萬銖と謂はれ、總輸入額の二、三割に過ぎない。輸出商も亦約五十軒あり木材、護謨等の特産品の取扱に於て勢力を持つてゐる。泰國の外國貿易に於て華僑が白人及び邦人に拮抗出來なくなつた主因は

- (一) 華僑の取引は近代式の組織經驗に基かず、舊式慣習を墨守し時代の推移に應じないこと。
- (二) 華僑は近年著しく商業道德を缺き殊に詐欺破産の如き彼等獨特な惡風が熾んに行はれて信用を失墜しつゝあること。
- (三) 外國商も華僑相手の取引を不安に考へ取引範圍を縮小したと。
- (四) 華僑の輸入商の多くは基礎不確定であること。

(イ) 貿 易 額

佛曆二四八一年度(自一九三八年四月至一九三九年三月)泰國對外貿易總額は三億三千四百五萬二千銖にして、前年度輸出入總額二億八千三百三十一萬七千銖に比較し五千二百七十二萬五千銖の激増を示

年は七千四百萬銖と前年に比し約一千七百萬銖を増加し近年に於ける出超額の最高記録を示してゐる。

泰 國 累 年 貿 易 額

年	輸 入 額		輸 出 額		出 超 率
	千銖	千銖	千銖	千銖	
佛曆二四七年	四六,四六二	二,四四二	二〇,七三三	一三,〇六〇	一〇六・六
佛曆二四八年	四六,四六二	七,二三四	二五,〇〇九	二一,二五七	一〇四・三
佛曆二四九年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三
佛曆二五〇年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三
佛曆二五一年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三
佛曆二五二年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三
佛曆二五三年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三
佛曆二五四年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三
佛曆二五五年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三
佛曆二五六年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三
佛曆二五七年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三
佛曆二五八年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三
佛曆二五九年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三
佛曆二六〇年	四六,四六二	七,〇四四	二五,九五四	二一,四一八	一〇三・三

(註) 右表に於て輸出入の比率は輸入總額より再輸出額を控除したものと國産品輸出額との比率である。又再輸出の多くは委託品及賣殘品の積戻である。

してゐる。之が内譯を見ると、輸入は一億二千九百六十三萬銖にして前年の一億一千八百八十二萬四千銖に比し一千八百八十八萬六千銖、即ち一五・九%の増加を示し、輸出は二億四百四十二萬二千銖にして前年度の一億六千九百四十九萬二千銖に比較して三千四百九十三萬九千銖、即ち二〇・六%の増加を示してゐるが、右輸出に於ける著しき増加は米並に護謨の輸出増加に因るものにして、米は實に三九・三%の増加となつてゐる。尙泰國の貿易は左の如くその九割迄盤谷港を経由し盤谷港以外の諸港を経由するものゝ主なるものは錫、護謨加工品等である。

	佛曆二四〇年		佛曆二四八年	
	銖	銖	銖	銖
盤谷港 輸入額	九五,五四〇,五八三	一一三,二六五,七六三		
其の他の諸港輸入額	一六,二八三,八九八	一六,三六四,九六九		
輸 入 總 額	一一一,八二四,四八一	一二九,六三〇,七三二		
盤谷港 輸出額	一〇二,七三九,六五三	一四〇,一八三,八四九		
輸 出 總 額	一六九,四九二,八〇四	二〇五,四三二,〇八八		

貿易尻から見ると泰國は年々多額の出超を示し、二四八一



次に主要項目別輸出入額及其の輸出入港を示せば左の如くである。

輸出入	佛曆二四〇年			佛曆二四八年		
	盤谷港	地方港	計	盤谷港	地方港	計
生鳥	四〇、六三三	六、一八三	四六、八四六	三四、六四〇	一、八三〇	三六、四七〇
食料品	一四、〇四六、一七四	二、六三三、〇六六	一六、六七九、二四〇	一四、〇八三、〇八二	二、七二四、八六一	一六、七九七、九四三
原料品	一一、八九三、五九	三、三四九、五九七	一五、二四三、一五六	一一、四八二、六九一	三、二七四、七三三	一四、七五七、〇六四
加工品	六七、六〇二、五〇三	九、九八〇、九七	七七、五八三、四七〇	八三、〇四四、〇六〇	一〇、〇三七、三〇	九三、一〇一、三三〇
酒類	一、二六五、五〇三	三〇九、三四三	一、五七四、八四六	一、三五六、九〇一	三三、一四三	一、六九〇、〇四四
阿片	—	—	—	八五五、六七五	—	八五五、六七五
金銀地金及貨幣	五八四、三三三	三、六三三	五八八、〇一四	二、三三二、一五	三	二、三三二、一四六
金箔	一〇七、四八七	五八〇	一〇八、〇六六	七六、五九八	四、五〇〇	八一〇、九八
合計	九五、四〇〇、五八三	二六、二八三、八九八	一二一、六八四、四八	一二三、二四五、七六二	一六、三三四、九六九	一三九、六三〇、七三
米	四、〇〇七、一三	一、一〇〇、三三	五、一〇七、四六	三、三三二、九三三	—	三、三三二、九三三
護謨	二、〇二四、六一〇	二、〇六四、七九四	四、〇八九、四〇四	八五六、一八一	二四、二六六、九八	三、三二二、一〇九
チタ	九、一一二、一三六	—	九、一一二、一三六	六六九四、一〇五	—	六六九四、一〇五
其他	一三、〇八二、一〇〇	四、〇四五、七七	一七、一三六、八七	九、五八五、九一五	三、四一五、六五一	一二、〇〇一、五三六
再輸出品	二、六二五、七六	一、五〇〇、七七	四、一五五、五三	二、四三三、〇〇七	一、二七三、二四	三、七〇八、二五
金銀地金及貨幣	二、八五九、七九	六九七、〇五八	三、五五六、八五六	二六、五三三、五七	一、一四七、九八一	二七、六八二、五五
合計	一〇一、七九三、六五三	六六、七五三、一五	一六八、五四六、八〇	一四〇、一八三、八四九	六四、三三八、三三九	二〇四、五七〇、一八八

(口) 國別貿易

泰國輸入貿易の仕出國を見るに、永年に亘り首位を占めてゐた日本は二四八一年には第二位に落ち、之に代り第二位の新嘉坡が總額の一五・四一%を占めて第一位に上り、第三位は英國、第四位は香港、次いで彼南、獨逸、印度、米國、蘭印、支那の順位となつてゐる。

左表は百萬銖以上の輸入額及輸入總額に對する百分率を示したものである。

泰國主要國別輸入額	佛曆二四〇年		佛曆二四八年	
	輸入價額	輸入總額に對する百分率	輸入價額	輸入總額に對する百分率
新嘉坡	一七、八六七	一七・四%	一九、九七三	一五・四%
日本	三三、〇九七	一九・七%	一九、二二七	一四・六%
英國	三三、六七八	二二・三%	一五、二二七	一一・三%

香港	八、五三九	七・六四	一、一四七、九八一	二七、六八二、五五	一〇・三三
彼南	一、七八五	一〇・五四	—	—	—
獨逸	六、九六六	六・三三	—	—	—
印度	四、三八一	三・九二	—	—	—
米國	五、六三六	五・〇四	—	—	—
蘭印	五、五四四	四・九六	—	—	—
支那	三、五八五	三・二二	—	—	—
和蘭	二、二〇五	一・九七	—	—	—
丁抹	一、三〇八	一・一七	—	—	—
白耳義	六六	〇・六	—	—	—
濠洲	一、三三	一・〇〇	—	—	—
英領馬來	七五三	〇・六	—	—	—

右の中新嘉坡、香港及彼南の大部分は仲繼貿易にして主なる原産國よりの新嘉坡及香港經由輸入額を示せば左の如くである。



604
184

泰國 篇

原産國	佛曆二四〇六年		佛曆二四二年	
	香港經由	新嘉坡經由	香港經由	新嘉坡經由
日本	千銖 五四〇	千銖 一四一七	千銖 三三三	千銖 七七八
支那	五、七九九	一、三三	一、〇八三	一、六四
米國	八八	一、七三三	九八	一、五五八
濠洲	元	一〇六	五	二六〇
獨逸	五二	三、四四	三三	四、四四
印度	三	一、四四〇	二	二、一七六
蘭印	一三八	七、一〇七	三	七、六三三
英國	一三三	一、六七九	一〇〇	二、四六〇
香港	七三	五	九六	五
新嘉坡	三五	一、〇三七	—	一、二八四

次に輸出を見るに新嘉坡、香港及彼南等の英領諸港に對する輸出は斷然多く、全輸出額の約六割を占めてゐるも、之は右諸港が諸外國への仲繼港たる理由に依るものにして米、チルク等は主に新嘉坡、香港を經由し、護謨、錫鑛は彼南を經由して輸出せられる。二四八一年の日本向輸出は前年の第四位より第十一位となつてゐる。

百萬銖以上の仕向國及輸出總額に對する百分率を示せば左の如くである。

仕向國	佛曆二四〇六年		佛曆二四二年	
	輸出價額 千銖	輸出總額 に對する 百分率	輸出價額 千銖	輸出總額 に對する 百分率
新嘉坡	五、六六八	三・〇七%	三、六九八	三〇・六七%
彼南	五、一〇九	三・二元	四、八四八	二四・三九%
米國	一、一九三	〇・七〇%	三、六五九	二一・〇九%
香港	二、二二三	一・二四%	二、六〇三	一〇・五七%
西印度	四、四三三	二・六三%	六、四六六	三二・六%
獨逸	二、七三四	一・六一%	六、一五四	三〇・一〇%
和蘭	一、九八三	一・一七%	五、一〇六	二二・五%
錫蘭	二、二五	一・一八%	四、二二二	二〇・六%
英國	二、七九	一・二〇%	二、八九九	一・四三%
英領馬來	一、八六七	一・〇〇%	二、八二七	一・三六%
日本	五、九〇六	三・四九%	二、三八七	一・一七%
南阿聯邦	二、五九三	一・五五%	二、一四三	一・〇五%

て總額九千三百十萬一千銖に達し、前年に比較して一千五百五十一萬八千銖の増加を示した。加工品中第一位を占むるものは綿織物にして二千九十九萬銖に達し、之は輸入金額の一割六分に當り、機械類は七百六十五萬二千銖、以下車輛五百三十三萬六千銖、麻袋五百三十二萬九千銖、絲類四百六十三萬二千銖、燈油三百九十萬三千銖、ペンジン三百七十八萬二千銖、紙類三百五十萬四千銖、電氣器具三百五萬二千銖が主なるものとなつてゐる。

最近五ヶ年の主要品別輸入額を示せば左の通りである。

品別	佛曆二四七七年		佛曆二四七八年		佛曆二四九九年		佛曆二四〇〇年		佛曆二四〇一年	
	輸入額	千銖	輸入額	千銖	輸入額	千銖	輸入額	千銖	輸入額	千銖
白耳義	九〇九	〇・五四	一、九八三	〇・九八	—	—	—	—	—	—
葡萄牙領南東アフリカ	二、〇三五	一・二二	一、七九	〇・八五	—	—	—	—	—	—
チュニス	四八四	〇・二九	一、五五	〇・六	—	—	—	—	—	—
秘露	六四三	〇・三八	一、三四八	〇・六	—	—	—	—	—	—
印度	二、〇八九	一・三三	一、二九五	〇・六三	—	—	—	—	—	—
滿洲	三三三	〇・一一	一、一〇四	〇・五四	—	—	—	—	—	—
(輸入) 佛曆二千四百八十一年に於ける泰國の輸入價額は一億二千九百六十三萬一千銖にして前年に比較して一千七百八十萬七千銖の増額である。輸入の中、約八割は加工品にし										
食料品	一四、七七一・八五	一、四七	一五、八四九・八七	一、五八	一六、六七九・七〇	一、六七	一六、七九七・九四	一、六八	一六、九〇三・八七	一、六九
燈油	四、四七三・五三	四、四七	五、〇四六・七九	五、〇五	三、八八三・六三	三、八八	三、六二九・七五	三、六三	三、九〇三・八七	三、九〇
ペンジン	四、六三三・一〇六	四、六三	四、八八八・八八	四、八九	三、九〇七・四五	三、九一	三、六四七・八八	三、六五	三、七八二・五七	三、七八
液體燃料	一、三三三・〇〇	一、三三	一、九五五・〇〇	一、九六	二、一四一・二九	二、一四	二、六八八・二五	二、六九	二、六九四・三三	二、七〇
化學製品	九、九三三・六一	九、九三	一、〇四〇・〇九	一、〇四	一、一七四・二八	一、一七	一、三三三・五五	一、三三	一、四〇〇・〇〇	一、四〇
電氣器具	一、六八八・二五	一、六九	二、〇一六・八四	二、〇二	二、四七二・七九	二、四七	三、〇三三・六三	三、〇三	三、五〇二・五九	三、五〇

604
184

泰米輸出價格表 (擔に付銖)

佛曆	白米	白碎米	白粉米	玄米
佛曆二四七七年	四・七五	二・三八	一・二〇	二・八九
" 二四七八年	四・六〇	二・九二	一・八三	三・四
" 二四七九年	四・六三	三・一〇	一・八八	三・〇六
" 二四八〇年	四・九	三・六六	二・〇四	四・〇六
" 二四八一年	四・六	三・一九	一・九	三・九二

泰米主要仕向國別比率表

仕向國	佛曆二四八〇年 (%)	佛曆二四八一年 (%)
香港支那諸港	三三・六	一九・〇
新嘉坡	四九・七	四三・二
印度錫蘭	四・六	五・二
南米	一・四	一・九
歐洲	一・七	一・三・九
日本	—	—

泰米輸出額

佛曆	數量 (擔)	價格 (銖)
佛曆二四七七年	三三,七〇一,二五	九,四七三,三九七
" 二四七八年	三三,〇二九,七六六	九,〇八三,六三三
" 二四七九年	三三,九七八,四四五	九三,九四四,四四四
" 二四八〇年	一八,三七〇,三三一	七五,三四一,五一一
" 二四八一年	三三,九三三,九六一	九七,四九三,三四一

錫 米に次ぐ重要輸出品の一にして、一九三七年は從來の生産割當數量九千八百噸より一萬八千五百噸に増加せられた。錫は原鑛の儘彼南、新嘉坡方面へ輸出されてゐるが、最近五ヶ年間の輸出統計は左の如くである。

佛曆	擔	銖
佛曆二四七七年	一〇〇,一	三三,七〇一,二五
" 二四七八年	七	三三,〇二九,七六六

千七百萬銖で前年度に比較して二千二百萬銖を増加し、輸出總額の約五割を占めてゐる。次に最近の泰米に關する統計を示せば左の通りである。

泰米輸出價格表 (擔に付銖)

佛曆	白米	白碎米	白粉米	玄米
佛曆二四七七年	四・七五	二・三八	一・二〇	二・八九
" 二四七八年	四・六〇	二・九二	一・八三	三・四
" 二四七九年	四・六三	三・一〇	一・八八	三・〇六
" 二四八〇年	四・九	三・六六	二・〇四	四・〇六
" 二四八一年	四・六	三・一九	一・九	三・九二

泰米輸出額

佛曆	數量 (擔)	價格 (銖)
佛曆二四七七年	三三,七〇一,二五	九,四七三,三九七
" 二四七八年	三三,〇二九,七六六	九,〇八三,六三三
" 二四七九年	三三,九七八,四四五	九三,九四四,四四四
" 二四八〇年	一八,三七〇,三三一	七五,三四一,五一一
" 二四八一年	三三,九三三,九六一	九七,四九三,三四一

錫 米に次ぐ重要輸出品の一にして、一九三七年は從來の生産割當數量九千八百噸より一萬八千五百噸に増加せられた。錫は原鑛の儘彼南、新嘉坡方面へ輸出されてゐるが、最近五ヶ年間の輸出統計は左の如くである。

佛曆	擔	銖
佛曆二四七七年	一〇〇,一	三三,七〇一,二五
" 二四七八年	七	三三,〇二九,七六六

泰國篇

鳥巢	一五五、四四五	二二六、四二〇	一三四、八六六	八五、二〇〇
乾唐辛	一四七、六六七	一五九、二二八	三六〇、三六一	二九九、二六六
家鴨卵	五七〇、〇八七	五九一、四二二	九四一、一五四	五二五、三四一
鹽魚	二、四三四、〇五六	一、七八四、八七六	二、三二一、七八四	一、八三三、〇三六
果實	五六一、八六二	四八八、八八八	六八四、五五七	四六七、四五五
乾貝	二二三、〇七三	二五八、五〇一	三〇八、〇三一	一七九、五二一
玉葱	四四九、五〇七	三六〇、一〇八	三四〇、六六五	二七六、〇三六
胡椒	五二一、三七八	二、〇〇六	三三	一〇八
檳榔椰子	五六三、〇三二	五二一、二一八	六〇二、三三八	八七〇、一七
小荳蔻	三三三、五九〇	四〇〇、八五〇	五五二、七三	七八二、五三
木炭	二四一、八〇二	三六七、五三三	三六七、五三三	二五五、八四〇
コブラ	四七、八五一	二二九、六一	二〇八、二九	一一二、六六七
獸皮	八七、一三二	一、五三三、五〇	三七五、四〇〇	四三〇、五七五
ステイクラツク	二、八〇六、六八七	一、一三六、九五六	二、五五六、七五六	二、九七、四四九
藤皮	七二、一六三	五、四〇、〇〇八	一〇一、四六六	一一三、六三七
黒絹布	五八、二二二	三三七、九四	三九、三七五	四二九、二五八
煙草	二二九、三三七	二二六、九八	三〇一、二三八	三〇〇、九三五
其他	三、三六四、一七〇	二、九八八、六二二	四、五三四、七四三	四、四五一、五四四

泰國篇

米	佛曆二四七七年	佛曆二四七九年	佛曆二四八〇年	佛曆二四八一年
錫、錫鐵	九、四三七、三九七	九〇、八三三、六三三	九五、九四四、四四四	九七、四九三、三四一
チルク	二六、三四六、六〇	二二、三七五、〇五	二九、八八九、三八九	三〇、八三三、七六一
其他木材	四、五八八、八〇八	五、〇五二、二二七	八、六五一、七三〇	九、一一二、二六
護謨	九、三〇五、八三四	一三、二二八、九四四	二二、五六六、三四七	二二、六六九、〇〇四
水牛	九四二、二二	一五四、六〇五	一七九、五九三	三九、一七
牛	九〇三、八七二	三三七、四〇一	六二、六五〇	五三、一七
家禽	三八七、九七五	四四三、四三七	四八、六三八	六二〇、五七七
豚	一、六八八、〇三三	三八八、三三九	一五、一九二	一八九、九〇八

輸出割當量	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
噸	三〇,〇〇〇	三〇,〇〇〇	三六,〇〇〇	四〇,〇〇〇	五四,五〇〇
實際輸出量	一九三四—三五年度	一九三五—三六	一九三六—三七	一九三七—三八	一九三八—三九
噸	三,三〇〇	二六,二〇〇	三,八〇〇	四七,〇〇〇	

護謨 協定に依り一九三五年三萬噸、三六年三萬噸、三七年三萬六千噸、三八年四萬噸、三九年五萬四千噸の輸出量を割當されてゐるが、最近五ヶ年の實際輸出高は左の通りである。

尙最近五ヶ年間の主要商品輸出額は左の如くである。

再輸出品	二、八四四、四三三
金銀塊及貨幣	二、五七六、八五五
合計	一七、五四一、八七〇

再輸出品	二、五八二、六三七
金銀塊及貨幣	八、九〇五、三六〇
合計	一五、八、三三三

五 日本との貿易關係

日泰間の貿易關係は足利時代に始まり、豊臣時代に入り愈々盛んとなつた。秀吉は文祿元年(一五九二年)に御朱印の制を定め泰國へ渡航する商品に免許の朱印を與へた。朱印船による輸出入品を擧げると我國よりの輸出は銅、銅器、漆器、傘、扇子、屏風、硫黄、樟腦、染布、麥粉、鎧鎗、琥珀、蘇木、牛皮、針金、厨子、瀝金で、輸入貨物は花毛氈、木棉、木棉綿更紗、すわう、鮫、黒糖、山馬皮、鹿皮、小人皮、象皮、象牙、犀角、うるし、やしほの油、とたん、えんせう、錫しわう、びんらうじ、籐、大腹皮、たんかう、らくわい、きりん皿、うこん、乳白等で之等が三百年前の貿易品である。一四一四年の歐洲大戰前泰國貿易に於ける日本の地位は輸出入共第九位程度にして、日本向輸出五十九萬五千銖(輸出總額の)

日本よりの輸入二百十萬一千銖(輸入總額の二・三%)に過ぎなかつた然るに大戰後日泰間の貿易は躍進し一九二九年—三〇年の如きは輸出入共夫々千六百萬銖を越え、泰國の對外貿易に於ける日本の地位は輸出は第五位乃至第八位、輸入は第四位乃至第六位の間にあつた。尤も輸入は香港及新嘉坡經由のものを加算すれば日本の地位は一層向上する譯である。

泰國對日貿易額(單位 千銖)

輸入額	一九二七—一九二九年	一九三〇—一九三二年
輸出額	一九二七—一九二九年	一九三〇—一九三二年
總計	一九二七—一九二九年	一九三〇—一九三二年

最近に於ける泰國の對日貿易狀況を見るに、對日輸入減少は意外に大きく、一九三九年は前年と比較して約三四%の著

減となつた。之は泰國の輸入統制に直接原因してゐるのであるが、日支事變勃發以來泰國在留華僑の本邦品不買運動も亦

重要な因を爲してゐることを見逃してはならない。本邦より見たる對泰國品別貿易額は左の通りである。

本邦對泰國主要品別貿易額(單位 圓)

(輸 出)	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
麥 酒	二五三、〇四八	二九〇、三八一	一八六、五四〇	二四、八九七	四、六九八
石 鹼	二七、五三三	六六、三〇〇	一〇三、七七八	七、八六九	一六、八八七
綿 織 絲	九六六、〇三三	九九三、三九七	五五三、三九七	二六八、八七一	七九〇、七六〇
綿織物(生地)	一、三〇、〇三三	一、二二、五、六六〇	一、〇四、四、四四一	〇〇七、七七一	一、八三六、四二五
綿織物(晒)	二、八六、五五四	三、四二、九九五	五、一七、三、一一五	五、一七、三、七七七	五、二二六、八七五
綿織物(其他)	九、〇〇、三三四	八、九八、二、五六八	九、四九、九、三三三	七、八〇、三、一五七	七、〇九、九、九七八
人造絹織物	三、七六、三九二	四、四三、九八七	三、三三、二、九七六	四、〇八、五、二七	一、三九、二、一三三
綿ブランケット	一、九三、四、八三三	一、〇八、六、五八七	九、九、九、九	四、〇、九、三〇八	七、四、三、三三六
綿 タ オ ル	五、五二、四七二	四、四三、五九六	三、〇、〇、〇	四、〇、九、三〇八	四、六、九、三六六
帽子及帽體	五、三六、四七	三、一〇、一〇	三、三、三、三	一、八、一、八	一、九、九、九
紙 類	五、二二、一九四	五、六三、五九六	五、〇、〇、〇	三、三、三、三	五、七、七、一四九
陶 磁 器	四、七、四、六	四、七、四、六	四、七、四、六	四、七、四、六	四、七、四、六
硝子及同製品	〇、七、二、二	七、七、八、八	〇、七、二、二	七、七、八、八	七、七、八、八
鐵 製 品	一〇、〇、〇、〇	一〇、〇、〇、〇	一〇、〇、〇、〇	一〇、〇、〇、〇	一〇、〇、〇、〇
洋 傘	一〇、〇、〇、〇	一〇、〇、〇、〇	一〇、〇、〇、〇	一〇、〇、〇、〇	一〇、〇、〇、〇



604
184

泰國篇

ブラツシユ	五四、一六四	七五、〇八三	七二、七六	四二、一八一	三四、一七二
ランブ及同部分品	二四六、二三八	一五、七五五	三三、一八八	五三、五〇〇	五七、五〇九
其他共合計	四〇、五八、一三六	四三、〇八、七四四	四九、三八、五七七	三九、二六八、九四五	三六、〇三三、八七五
(内阪神兩港)	(三〇、六六、九二)	(三四、九四、九)	(三三、七四、三〇四)	(三三、三九三、一三三)	(三〇、八二、九一〇)
(輸入)					
米及粗	一九三五年	一九三六年	一九三七年	一九三八年	一九三九年
米	二、九五、七三三	四、八二〇、二九九	三、一〇一、〇五五	一、三三六、一四三	一、〇八三、〇七八
木	一、六四、一六九	一、七三三、四二一	三、五七〇、九一八	四、九五〇、九〇〇	五、五三六、三四一
其他共合計	五、四五七、五五一	八、七五六、六八四	三、五七三、三三八	(二、六八、四〇〇)	(三、五五六、七五二)
(内阪神兩港)	(二〇九八、六六二)	(三、六六七、〇三二)			

即ち泰國よりの我輸入商品中重要なるものは米にして、泰國の米供給中日本は馬來及香港に次ぎ第三位を占めてゐる。次はチーク材にして、其他唐材、獸皮等があるが輸入額は僅少である。又泰國への輸出の主なるものは綿布、亞鉛引鐵板、磁器、陶磁器、人絹等であるが何れも最近著しく減少してゐる。

次に近年問題とされる日泰間の片貿易は、最近は反對に日本に有利な貿易尻を示すに至つた。その理由として

(一) 泰國の世界不況による購買力の萎縮が低廉なる邦品の需要を促進したこと。(二) 泰國が邦品に何等差別待遇を與へないこと。(三) 日本側に於ける直輸出の奨励。(四) 滿洲事變問題をめぐり國際聯盟總會に於ける泰國の棄権により邦人の泰人に對する關心が著しく喚起されたこと。(五) 日本工業の急速なる進捗により歐品と匹敵する良品を供給し得るに至つたこと。(六) 日本の米増産により一九三三年十月對日輸出額の九割を占めた泰米(碎米)の輸入を禁じたこと。

英領ボルネオ篇

一 英領ボルネオ經濟事情

英領ボルネオは世界第三位の大島たるボルネオ島の北部を占め、英領北ボルネオ、ブルネイ及びサラワクの三地域より成る。英國人が始めてボルネオに植民を建てたのは一七九八年の事で、現在では直轄領たる北ボルネオはボルネオ勅許會社の經營に係り、ブルネイ並にサラワクは保護國とし、各地方には知事を駐在せしめて行政、治安を掌握せしめてゐる。但しブルネイ、サラワクの土王は今も尙ほこれを認め、懷柔的政策を施してゐる。

英領北ボルネオ

概況 英領北ボルネオは英領ボルネオの北部を占め、總面積三萬一千百六平方哩、我が北海道より小さく、臺灣、樺太

英領ボルネオ篇

を合したるより僅かに大である。地勢は内陸は山嶽地帯をなし、平原に乏しいが、地味は概して肥沃である。人口は約二十七萬人(一九三一年調査)この中七一%が土着のボルネオ土人で次いで支那人、馬來人となつてゐる。

産業及資源 基礎産業は農林業と鑛業で、交通の不便なと勞働力が僅少な爲に今尙未開發の儘に残され、資源保有國としての地位を一步も出てゐない。農産物の主なるものは、護謨、米、コ、椰子及びサゴ、煙草等である。林産物中主なるものは木材、カツチ、マングローブ樹皮等で、一九三八年伐木量六百九萬一千立方呎である。而して其の輸出量は一九三九年に於て五百四十一萬九千立方呎であつて、其最も重要な輸出先は日本である。鑛物資源としては石炭、鐵、金及び鑛油等があるが其等の開發は尙進まず、工業としてはカツチ

製造位で、其他には見るべきものがない。

對外貿易 毎年多額の輸出超過を示し、一九三九年には輸出一千三百萬弗、輸入六百四十萬弗、差引六百萬弗の出超である。英領北ボルネオに關する貿易統計を示せば左の通りである。

英領北ボルネオ對外貿易額

	一九三八年	一九三九年	對一九三八年比較(増)減
輸 入	六、三二、八七〇 弗	六、四九、七三三 弗	(+) 一六六、八六三%
輸 出	九、五三、一三三	一三、四五、四九二	(+) 三、九二、三六〇(四一・三%)
差引出超	三、二〇、二六三	六、九五、七六〇	

英領北ボルネオ主要品別貿易額

(輸 入)	一九三八年	一九三九年
米 粳 及 糠	一、二二、四一三 弗	一、〇八、九七三 弗
食 料 品	七〇一、七六八	八〇二、六三二
織物及衣類	六七、八三三	七二、九四五
鐵器及金屬器	四二、九二二	四七、八六四
煙 草 類	四三、〇〇三	四三、六六一

(輸 出)	一九三六年	一九三七年	一九三八年
雜 貨	三、二、七五	三、七、九七	三、七、九七
砂 糖	二〇五、三六	二八二、六三三	二八二、六三三
ケロシン油	一六六、五四九	二〇四、三二六	二〇四、三二六
藥	一五九、八五四	一七九、三九〇	一七九、三九〇
ペトロロール	一六〇、〇九七	一七九、三九〇	一七九、三九〇
小 麥 粉	二、一五、一〇四	二、一三、七三三	二、一三、七三三
文 房 具	九、〇四〇	一〇八、四四六	一〇八、四四六
スピリット及ワイン	八八、一〇四	九七、四四三	九七、四四三

(輸 入)	一九三六年	一九三七年	一九三八年
護 謨	四、三、七〇一	八、〇、四九〇	八、〇、四九〇
木 材	二、一七、一七八	二、四、三六〇	二、四、三六〇
乾魚及鹽魚	五〇七、四四六	五三三、二六	五三三、二六
カ ッ チ	一、一、七三	一、一、七三	一、一、七三
コ プ ラ	四〇六、八三四	三、五九、四四	三、五九、四四
薪 材	一六五、三九九	三、七、二八八	三、七、二八八
煙 草	四、九、一六	二、八、二五三	二、八、二五三
ダ マ ル	七、〇八一	七、六、四六〇	七、六、四六〇
ロ、ナット	一、四、四九	二、一、一〇一	二、一、一〇一

通りで、當國も亦その國別貿易は發表してゐない。

ブルネイ對外貿易額

輸 入	一九三六年	一九三七年	一九三八年
輸 入	一、八六九、九九 弗	二、五二、一五 弗	二、八二、七九 弗
輸 出	四、二五、二七〇	五、五九、二四〇	六、五八、〇八二
差引出超	二、四八五、二七六	三、〇七九、〇六六	四、二五八、六八三

ブルネイ王國

其貿易の大部分は英國及び英領諸國を相手とするもので、新嘉坡又は香港を通じて多く行はれてゐる。因みに當國ではその國別貿易を發表してゐない。

概況 ブルネイ王國は英領北ボルネオの南西に連り面積僅かに二千五百平方哩の小國に過ぎない。地勢は南部奥地は山岳で密林地帯をなすが、西部一帯は平坦で南支那海に傾斜してゐる。人口は一九三一年調査に依れば、三萬人餘、其中馬來人及びボルネオ人が二萬七千、支那人が二千七百人である。

産業及資源 ブルネイに於ける産業中最も重要なものは石油事業で、農産物としては護謨、サゴ及び米等が重要である。當領の石油事業は比較的新しく、一九一四年に始めて發見され、其後一九三二年以來工業的規模の下に開發されて來た。而して産出地たるセリアから輸送管によりサラワク國のルトンに送られて精油される。

對外貿易 ブルネイ王國の對外貿易一般狀況を示せば左の通りである。

英領ボルネオ篇

ブルネイ品別貿易額

(輸 入)	一九三七年	一九三八年
一、飲食糧品及煙草類	一八〇、九二 弗	一三、七三三 弗
米	三三、八二八	二〇、五八七
其他の穀類	三三、七四四	三六、七四一
牛 乳	二、四六三	二、八二九
糖	六、四四五	六四、九三三
砂 糖	九五、三八四	一〇三、六〇一
煙 草	一五五、五七五	一七〇、三九五
食 糧 品	二六、八二九	二五、六八三
麥 粉	一八、五三七	一三、五三三
コ、ナット油	二〇、八四五	一六、三〇一
珈 琲		



604
184

英領ボルネオ篇

スビリット	一五、四六六	一五、四六六
アラック酒	二六	二五
麥酒	一三、〇三八	一四、〇〇〇
乾魚	一一、九五五	一三、二一九
牛	一、四九三	一、九九五
二、原料品	九四、八五九	九四、三〇〇
石油	五、四六四	六五、九八八
木材	一、九九七	六、二七八
燃油	二四、七四五	三三、五五〇
機械油		
三、製品	三四、八八九	四六、八〇九
自動車	一〇〇、五七三	九、三〇四
糸綿布	一三、九六〇	一一、八八二
サロ	三三、四〇四	二五、七四一
機	一五、四二五	二四、〇〇五
阿片	一五、二〇〇	一一、五七〇
阿片	七、五五三	七、五五三
七、三三四	五三、七九二	

其他	一、二八五、二七三	一、四四五、二五四
總計	二、五二六、一五四	二、八三二、七九
一、飲食糧品及煙草類	弗	弗
家禽	一三五	一〇、九三
乾蝦	九、〇三七	一三、四八〇
サゴ粉	二八、〇九三	一七
乾魚	六八六	
二、原料品	三、八七三、九五九	五、五二、五四九
原油	四〇六	六
サゴ	二二、二二九	一五二、三六六
カツ	一、九五五	一、七九六
林産物	一、二四〇、九五五	六三、五六五
栽培護謨	六八、〇二六	八、九四八
ジュエルトン	一、四八八	一、九八一
皮革及角	二七	四五九
石炭	一〇四、五八六	一四六、三八七
天然瓦斯	九四七	一、二八〇
蛇皮		

サラワク王国

概況 サラワク王国はボルネオ島の西北部に位し、面積約五百平方哩、其人口は一九三五年四十四萬人を算してゐる。住民中最も主要なるは馬來人で、農業と狩獵を事としてゐる。支那人は十萬人を下らず、彼等は貿易取引上重要な地位を占めるのみならず、農業其他多くの職業に従事してゐる。地勢は東部はイラン山脈が走り、西部は平野となつてレジャン河が流れ、舟運の便がある。

産業及資源 最も重要なる産業は農業と鑛業とであつて、農産品としては護謨、胡椒、サゴ、コ、椰子、粳等、鑛産物

英領ボルネオ篇

眞鍮器	一、七五五	二、一六三
銀器	七、五一	七、一七六
サロ	一、一〇八	九二
カジャン	三、二八三	二、六五
其他	三、九五四	三、〇四三
總計	五、五五五、二四〇	六、五八〇、四八二

サラワク對外貿易額

輸出	一九三八年 二二、三七一、九元	一九三九年 二六、一七三、四三〇	增加(%) 一七・〇
輸入	一九三八年 四八、五〇七、〇三六	一九三九年 六〇、五五三、一六八	二四・八
合計	一九三八年 七〇、八七九、〇三二	一九三九年 八六、七二六、五九八	
輸出超過	一九三八年 二二、三七一、九元	一九三九年 二六、一七三、四三〇	

サラワク主要品別貿易額

栽培ゴム	一九三八年 七、九六八、九三三	一九三九年 一五、三八四、九二八
液體燃料	一九三八年 六、四四八、八二四	一九三九年 五、六四四、六〇〇
ベンジン	一九三八年 三、一〇五、三六七	一九三九年 三、八七二、六六一
サゴ粉	一九三八年 五七〇、七九三	一九三九年 一、五七二、一八一
燈用石油	一九三八年 一、四三四、七九〇	一九三九年 一、一八九、〇〇二
金	一九三八年 一、二二三、三四八	一九三九年 一、一四二、一五五
機械類	一九三八年 五四五、三九四	一九三九年 一、二八八、五二二

(輸 入)	
原 油	五、六三、八五五
鐵 及 鐵 鋼	二、四四二、六四八
米	二、三九、六六六
籾入煙草 (葉卷及兩切)	一、三三、八五五
綿 布	六五〇、七五六
砂 糖	四八〇、五五九
雜 貨 類	五五、〇八一
	六、五三、五〇四
	二、四九四、一〇四
	二、三八四、七八一
	一、五五、一七九
	一、一〇四、九一一
	八五四、一三三
	七三、七六六

二 本邦對英領ボルネオ貿易の檢討

英領ボルネオから觀た對日貿易の地位は對英本國、英系國ほどの重要性を持たないが、わが國の立場から見た對英領ボルネオ貿易は如何か。其貿易額は昭和十一年には千六百萬圓で、十四年には千二百三十萬圓となつてゐる。而して各輸出入別に觀れば、其間輸出は五十四萬圓より九十五萬圓に、輸入は一千五百七十二萬圓より一千百三十五萬圓になつてゐる。斯く十一年に於ては輸出は輸入の三十分の一、十四年に於て

も輸出は輸入の百分の一にも達せず、兩國間の貿易關係は我國にとり累年著しい輸入超過の貿易である。

我國の英領ボルネオに對する輸出は總額に於て右の如くであるが、之れを更に品目別に見ると、其内の第一の輸出品たる綿織物を以てしても、昭和十四年、二萬七千圓に過ぎず、其他の商品としてはブリキ製品、鐵材ベニア板、陶磁器及び瑛瑯鐵器等がある。

他方輸入品にありては其種類は少いが金額としては大きく其内最も主要なるものは礦油にして、昭和十一年其額九百五十二萬圓に及び、同地よりの輸入總額の六〇%に達した。我國に對する礦油の供給國として英領ボルネオは米國、蘭領印度に次で第三位にあり、又英領ボルネオとしても日本向が最も重要な地位を占めてゐる。次は木材にして、昭和十四年其額二百十五萬圓となつてゐる。以下主たる輸入品は護謄、タンニン・エキス、コプラ等である。

附 南洋委任統治領

一 南進基地としての委任統治領

南洋に關する限り没却することの出来ないのは曩の歐洲大戰によつて我が委任統治に歸した所謂内南洋である。マーンヤル、カロリン、マリアナの諸群島より成るこの委任統治領は、その間に米領グアムを混へ我が南進政策と米國の東亞政策の微妙なる接觸點を形成してゐたが、第二次歐洲大戰によつて之等委任統治領の南洋に於ける意義は愈々重大性を加へて來た。

グアム島が米國の東亞政策に取り如何なる使命を果してゐるか、太平洋の米領を連れば布哇、その北西のミッドウエー

附 南洋委任統治領

島、その南西のウエーク島、更にグアム、比律賓と東より西に飛石の如く連り、之等飛石は定期航空路によりて堅く結ばれてゐるのみならず、最近は更に西に延び、英米合作によつて新嘉坡に迄達し、この一線によつて日本と南洋とを遮斷せんとするかの氣配をさへ示してゐる。今春米國議會に於て二億五千萬弗のグアム島防備強化案が論議された如きは、米國が如何に同島を重視するかを明らかに示したものに外ならぬ。勿論同案は否決されたが、今後この問題が蒸し返し論議されるであらうことは疑のないところである。

斯くの如くグアム島が米國東亞政策に取り樞要なる地位を有せば有するだけ之を取捲く委任統治領諸島の我が國に對す



る地位も益々重大性を加へて來ることは必然である。之等諸島の經濟資源は蘭印、比律賓、佛印、馬來、泰國等外南洋の諸地域に比較すれば或は遙に小さいかも知れない。然し乍ら問題は別である。委任統治領が我が國防上に占める地位乃至我が南方發展への基地たる政策的地位から眺めてこそ、之等南洋諸島の我が南方生命線としての使命が正しく認識されるのではなからうか。

以下我が委任統治領南洋群島の概貌を述べるが、國際的危機の逼迫が聳々と感ぜられる今日、その經濟情勢の數字的記述は之を差控へることとする。

二 概 況

位置及面積 内南洋と呼ばれる南洋群島は、世界大戰の結果我が委任統治に歸したものであつて、此の中に包括されて居る一千四百餘の夥しい島嶼は、我が國の直南略一千哩から二千哩に及ぶ赤道以北の太平洋上に散在してゐる。即ちマリアナ、カロリン、マーシャルの三群島であつて、海面上の擴

此の期間は作物の成育に適し、殘餘の乾燥期には收穫と工場作業に適してゐる。随つて此の爲に事業の遂行上受ける利益は大きい。

人口 全群島の人口は邦人、島民を合して十二萬餘であつて、一方籽當りの人口密度は約五十五人を示してゐる。現在群島に在住する邦人の數は七萬二千を算し、農、工、商、鑛水産、其他に従事してゐる。島民にはカナカ、チャモロの二種族があり、その數五萬餘を算する。前者は固有種族であつて、後者は日本統治以前の歐洲領有國人（主としてスペイン人）との混血種族である。チャモロ族は多く洋式の生活を營んで居り、今日尙裸身跣足のカナカ族に比較する時は遙かに生活程度が高い。性質は何れも温厚であつて、主としてローマン・カソリック教を信奉してゐる。

産業 南洋群島に於ける産業の大宗は製糖業である。高温多雨の好條件にある當群島として當然の事であり、その生産額も逐年躍進の一路を辿り昭和十四年には約百四、五十萬擔を擧ぐるに至つたが、同十五年には風害のため幾分減少を見

がりは東西四千軒、南北二千軒と云ふ頗る廣汎な地域を占めてゐる。

本群島は北に小笠原、硫黄列島を控へて之と地質的脈絡を結び、南は赤道を距て、ニューギニア及びビスマルク、ソロモンの二群島に面し、西は比律賓群島及びモルツカス諸島に對し、東は東經百七十五度の線に依つてポリネシアと分たれ、近くは英領ギルバート島、遠くは米領ハワイ及び英領ファンニング島等に對してゐる。

島嶼の數に比してその面積は僅かに二千二千方軒、略我が東京府に近似するに過ぎないが、地質は大體富士火山脈系統の火山性隆起珊瑚礁からなり、窒素、石灰分、燐酸分が豊富であつて、地味は甚だ肥沃である。

氣候 氣温は年平均攝氏二十七度程度であつて、四時所謂純海洋性氣候を呈し、日々定時的に壯絶な南洋特有のスコールが訪れる。又南洋群島では一年が雨期と乾燥期とに分れ、各地によつて多少の相違があるが大體七月から十一月迄を雨期として三千軒乃至五千軒の豊富な雨量に恵まれてゐるので

た。製糖の副産物である酒精及無水酒精事業もあり、その製品も臺灣一流品と聲價を同じくしてゐる。

一方燐鑛事業もその開發は最初アンガウル島のみに限られてゐたが、昭和六年爲替の低落以來輸入燐鑛の暴騰を告げ内地農村の肥料問題に重大な影響を齎すに至つたので、その後漸次諸島の開發が行はれ内地肥料問題に一大貢獻をなすに至つた。

四面廣濶な太平洋に圍まれてゐる爲め水産の一大寶庫であることは敢て言ふ迄もない。昭和十四年の概算漁獲高は三百萬貫内外に達し、鯨節原料が特に多く、内地消費鯨節の約八割は南洋産であると云ふ活況を呈してゐる。

纖維資源としての黄麻の重要性に鑑み群島にて目下試作研究中であるが、最近頗る良質のものが生産されつゝあり、本格的栽培と共にその將來が囑望されてゐる。

以上の如く南洋群島に於ける生産は砂糖を筆頭に燐鑛、水産物、コブラ等でこの總産額は概算六千萬圓にも達するとされてゐる。



附南洋委任統治領

貿易 群島の貿易は産業の發展と邦人の増加とによつて逐年躍進の一途を辿り、支那事變前に於ては左の如き推移を示してゐる。

	昭和十二年	昭和十一年
輸出	三八千圓	三〇三千圓
移出	三七、六四	二四、九美
合計	三八、三三	二五、二五九
輸入	一、三六	二、六三〇
移入	三、九六	一六、四四九
合計	三三、二六	一九、〇八〇

移輸出品の主なるものは砂糖を大宗とし、燐礦、鯉節、コブラ、酒精及無水酒精であり、輸移入は米穀、其他食料品、煙草、車輛、船舶、機械、布帛、木材等である。
輸移出入先は内地が殆んど大部分で、其他米領グアム島、英領ギルバート島、蘭領ニューギニア等へ少量の雜貨を輸出し、又印度支那から米穀、蘭領セレベス、英領ギルバート島米領グアム島から少量のコブラ、雜貨を輸入してゐる。



昭和十五年十一月十八日印刷
昭和十五年十一月二十日發行

【定價四十錢】

發行所 大阪市産業部貿易課

印刷者 大阪市北區濱崎町一八

中井 藤藏

印刷所 大阪市北區濱崎町一八

大阪出版印刷

電話掛號 一一四二番
振替大阪二六一七五番

604
184

604
184

604
184

604
184



